小さな集落活性化事業
ハンドブック

～「ゼロ」からスタートする地域づくりのノウハウ～

高知県 中山間地域対策課

▶▶▶まずは次頁の解説付き目次をご確認ください。

目次

事業の仕組みが知りたい方はこちらから

1．小さな集落活性化事業とは？……1

1‐1．小さな集落活性事業の概要……2

具体的な事例が知りたい方はこちらから

2．事例から学ぶ小さな集落活性化事業……8

2‐1．令和４年度　対象集落一覧……9

事業実施で、地域にどんな成果があったか一覧になっています

何から始めた良いかわからない方。事例を見ると見えてくるかも

【集落・組織と調整する】STEP１

「ゼロからスタートして『小さな経済活動』まで」…津野町　１区新土居地区……12

「地域行事の継続のための仲間づくり」…津野町　10区高野地区……16

「Ｕターンにつなげる『ふるさとだより』」…四万十町　下津井集落……20

【活動の目的と方向を検討】STEP２－１

「まずは地域の大きな方針をWSで決める」…いの町　神谷地区……24

【活動の具体的内容を検討】STEP２－２

「日常の延長を集落活動に」…黒潮町　市野々川集落……28

「地域の人の気持ちと実情に沿った活動づくり」…黒潮町　奥湊川集落……32

「成功体験（夏祭り）による自信と気づき」…室戸市　郷地区……36

「これまでの活動を見直し若手グループと連携」…いの町　上東地区……40

「成功体験の積み重ねと部会の連携を図る」…南国市　三和地区……44

「地域を丁寧に把握し課題解決につなげる」…北川村　北部地区……48

【中・長期の展望を検討】STEP２－３

「既存の集落活動センターとの連携した活性化」…大月町　樫ノ浦・西泊地区……52

2‐2．令和５年度　対象集落一覧……56

集落によって進み方は違うけれど、活性化の**進め方**の例示と、**具体的な方法**を紹介。事業の流れをイメージ！

３．小さな集落活性化事業の進め方……65

３‐１．集落の選定、コーディネーターの選定……66

３‐２．集落・組織との調整……67

３‐３．話し合いの実施……68

（１）話し合いの進め方

（２）活動の具体的な内容を検討

（３）活動の目的と方向の明確化

（４）中・長期の展望を検討

３‐４．活動の実施（活動支援制度）……72

※参考データ

４．基礎から学べる地域づくりのヒント集……74

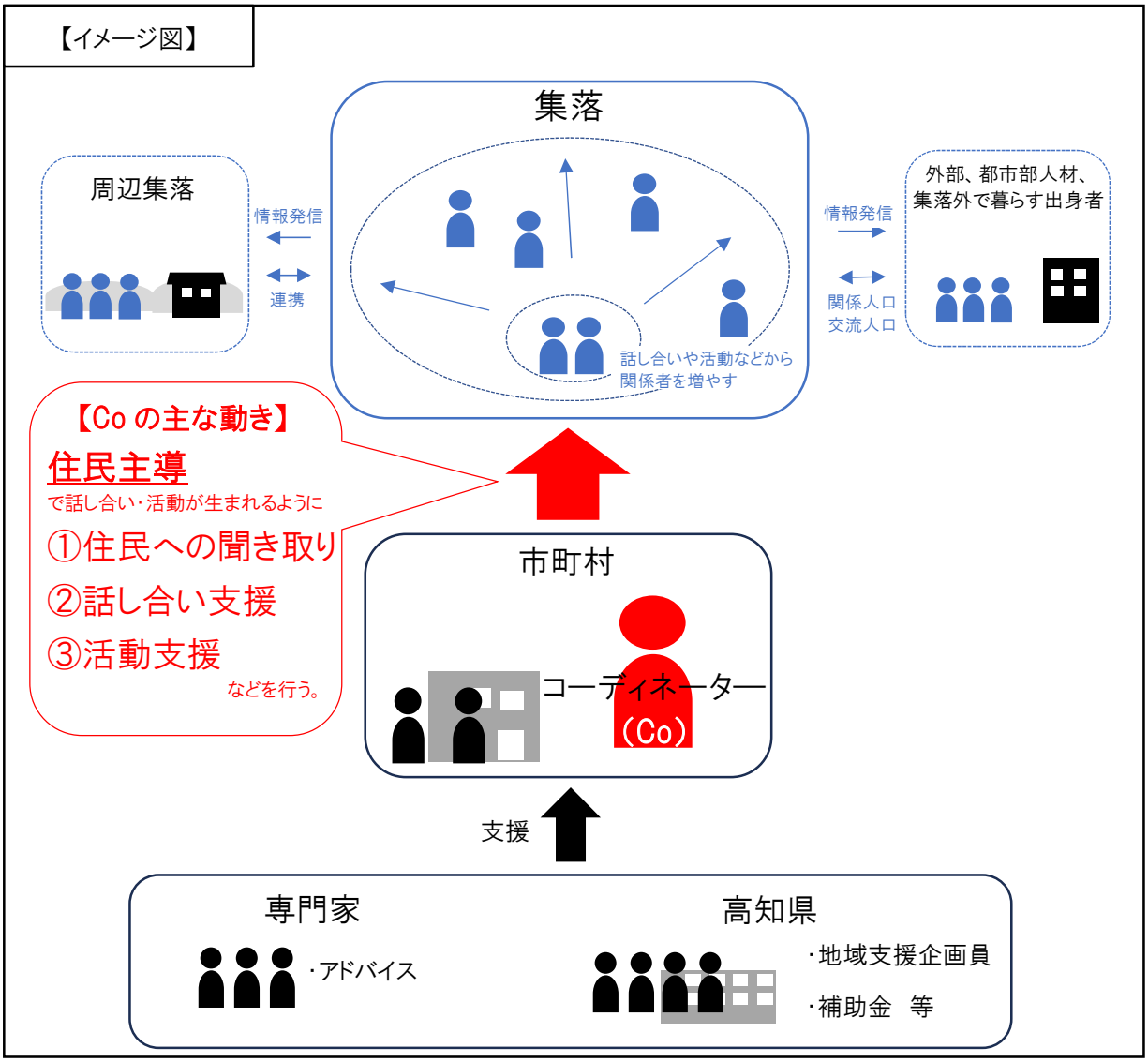
集落活性化で**困っている場面のヒント**が盛りだくさん

５．小さな集落活性化事業・専門家会議委員の総評……98

様々なアドバイスをもらった**専門家**の皆さまの**コラム**です。

1　小さな集落活性化事業とは？

本章では、小さな集落活性化事業の概要について紹介しています。事業の目的や内容、支援制度、ポイントとなるコーディネーターの説明などを記載しています。



1－1　小さな集落活性化事業の概要

小さな集落活性化事業とは…

高知県では平成 24 年に集落活動センターの取り組みを開始し、集落間で支え合う仕組みづくりとして、地域活性化の観点からも着実に成果を上げています。一方、令和 3 年度に 10 年ぶりの集落実態調査を行った結果、中山間地域の状況はさらに厳しくなっており、集落の維持・活性化の仕組みを拡げることが必要となっています。

このため、集落活動センターの構成集落に入っていない集落を活性化していく仕組みとして、令和 4 年度から「小さな集落活性化事業」をスタートしました。

この事業は、市町村においてコーディネーター（以下、Co という。）を配置し、選定した集落において、住民への聞き取り等により集落の状況を把握し、住民主導の活動につながるよう話し合いや計画づくりの支援を行い、継続的な活動により、集落の維持・活性化につなげることを目的に実施するものです。

本ハンドブックは、令和 4 年度及び令和 5 年度上半期にかけて、約 1 年半実施した各市町村の取り組みや専門家会議でのディスカッションなど「小さな集落活性化事業」におけるノウハウをまとめたものです。

「小さな集落活性化事業」に取り組む市町村担当者や Co にとって、事業の効果的な実施と円滑な進捗につながることを目的とした**参考書**です。

（1） 事業の目的

本事業は、令和 4 年度から令和 6 年度の間に各市町村で事業に着手し、それぞれ 2 年間のモデル地区での事業実施と、そのノウハウを活かして市町村内での横展開を図ることで、県内全域での集落の活性化につなげることを目的としています。

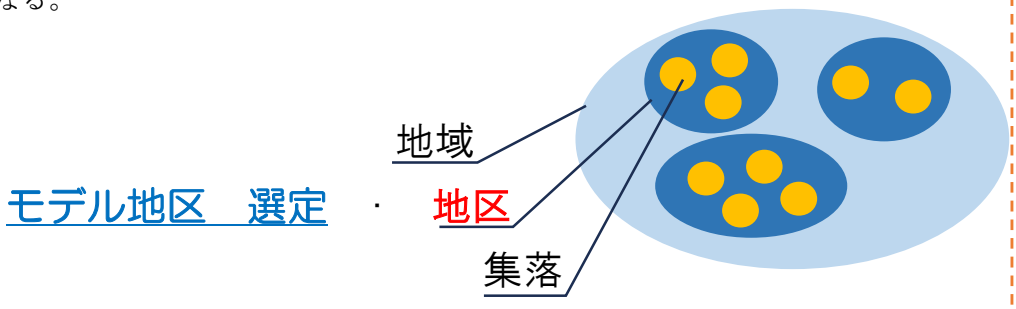
＜市町村、地域の目指すゴール＞

①集落の維持・活性化に向けて、地域の関係者主導で話し合う流れが醸成される。
②住民主導による新たな活動が生まれる。
③Co が事業の進め方のノウハウを蓄積し、市町村内の他の地域に取組みを波及する。

（2） 対象とする地区

モデル地区：集落活動センターの構成集落に入っていない集落。
1 市町村で複数の集落を選定。

※複数の地域を一つの地区として連携した取組も可能。なお、実施集落は 2 集落以上が必要となる。



（3） 事業の内容

1）県の取り組み

①市町村への補助金

補助メニューは大きく２つあります。

A)令和４年度から６年度の間に「モデル地区」でスタートする事業への補助
B)モデル地区実施後、市町村内で「横展開」するための事業への補助

補助メニュー	❶Co 人件費	❷Co 活動費・地区活動費
A)モデル事業	補助率：1/2 補助上限額：2,425 千円/人	補助率：定額 補助上限額：❶含め 10,000 千円/2 年
補助メニュー	❶Co 人件費・Co 活動費	❷地区活動費（地区あたり）
B)横展開事業	補助率：1/2 補助上限額：2,425 千円/人	補助率：1/2 補助上限額：500 千円/２年

【補助要件】

□集落を選定（複数）し、Co（集落支援員など）を配置。
□地域の活動において「人材育成」「交流・関係人口づくり」に向けて取り組む。
□市町村において地域づくりの「事業構想」を作成。

※事業実施から２年後に市町村おける地域づくりの将来ビジョン（地域ビジョン）を作成し、それを基に市町村で小さな集落活性化の取り組みを横展開する。

②専門家による助言･ヒント

事業を進めるにあたっての課題について、全国的な知見を持つ専門家の方々に、会議や現地訪問などで助言・ヒントをいただき、取組を支援しています。

＜専門家会議・委員＞　（50 音順、敬称略）

【座　長】明治大学　小田切　徳美　教授
【副座長】弘前大学　平井　太郎　教授
【委　員】九州大学　嶋田　暁文　教授
【委　員】法政大学　図司　直也　教授
【委　員】鳥取大学　筒井　一伸　教授
【委　員】神戸大学　中塚　雅也　教授

＜専門家会議　開催状況＞

・令和４年度：４回（その他、現地訪問など 12 回）
・令和５年度：３回（その他、現地訪問など６回）
・令和６年度：２回予定

③Co を対象とした「学びの場（研修会、情報交換会）」の開催

本事業は、Co の役割がポイントとなるため、研修会や情報交換会といった「学びの場」を設け、スキルアップや事例の共有を行っています。（以下、ワークショップを WS と称する。）

＜開催概要＞

R４	８月	専門家による講義・WS
	１月	専門家による講義・WS
R５	８月	事例発表・悩み事相談 WS
	１月	事例発表・悩み事相談 WS

④実践活動サポーターによる支援（マンパワーの支援）

Co が行う地域での住民同士の話し合いなどのサポートのため、必要に応じて、実践活動サポーターを派遣しています。

支援例： WS のファシリテーター

★県では、市町村と県をつなぐ役割として、「地域支援企画員」を各市町村に配置しており、事業の後方支援を行います。

地域支援企画員とは…

県と地域をつなぐパイプ役として、単に県の政策や支援制度などの情報を伝えるだけでなく、地域住民と同じ目線で考え、地域の直面する課題や住民のニーズに耳を傾け、地域とともに活動し、市町村と連携しながら、地域の振興や活性化に向けた取り組みを支援するために、各市町村に駐在している県職員のこと。

2）市町村の取り組み

・事業実施主体は、市町村となります。（県は市町村に対して補助を行います。）
・Co を配置し、モデル地区を選定、Co と二人三脚で集落を支援します。
・市町村内の地域の活性化や地域づくりの方向性を決定します。

Co と市町村職員との役割分担は、主に以下を想定しています。

市町村職員	Co
・実施集落の選定など方向性を決める。 ・Co への集落の情報提供、キーパーソンと Co のつなぎ。 ・政策展開の判断。 ・補助金の活用の判断。	集落の現状把握、話し合いを促す、計画づくりの支援、活動実施の支援など地域に寄り添った活動。

以上の役割分担を踏まえ、市町村職員は以下の点に留意していただきたいと考えています。

▶Co のフォロー

Co 任せにせず、Co の活動状況を把握し、Co とともに集落の活動を支援することが重要です。

（例：定期的な Co との情報共有会議の実施）

▶Co による集落の支援期間

モデル事業は 2 年間ですが、Co による支援により、集落が継続して活動できるようになるまでの期間は、各集落によって様々です。

このため、モデル事業終了後、他の集落への横展開を図る際には、これまで関わった集落への関与の度合いをどのようにしていくか検討する必要があります。その点も Co 任せにせず、一緒に考えていくことが重要です。横展開では、モデル事業を実施した Co が、モデル事業終了後に新たな集落を支援していくことをイメージしていますが、例えば、Co がモデル事業で支援した集落を継続して支援し、別の Co が新たな集落に横展開として支援していくことも考えられます。

＜用語解説＞

このハンドブック内では、以下のとおり定義します。

■集落　：地域を表す最小の単位。
S35 年の農業センサスにおける「集落」（2,360 集落（旧高知市除く））。

■地区　：複数の集落をまとめた名称。当該事業で実施する集落の集合体を指す。

■地域　：地区よりも広い範囲を指す。

■集落支援員　：市町村から委嘱を受け、市町村職員と連携して、集落の巡回、状況把握等を実施し、集落対策の推進を行う。国（総務省）の制度。

■WS　：ワークショップの略。一般的な会議形式とは異なり、参加者が体験し、情報を共有し、協働しながら何かを生み出す話し合いの手法。

■見える化　：地域の状況・課題等、検討や判断の材料となる情報を客観的に確認できるように整理・提示すること。

■５Ｗ２Ｈ　：整理・分類・集約にむけた検討の枠組み。（フレームワーク）
When(いつ)、where(どこで)、who(だれが)、what(なにを)、why(なぜ)、How(どのように)、How much（いくらで）

■プロセス　：手続きなどを構成する手順・方法・過程及び経過。

POINT！　コーディネーター（Co）とは…？

コーディネーター(Co)・・・

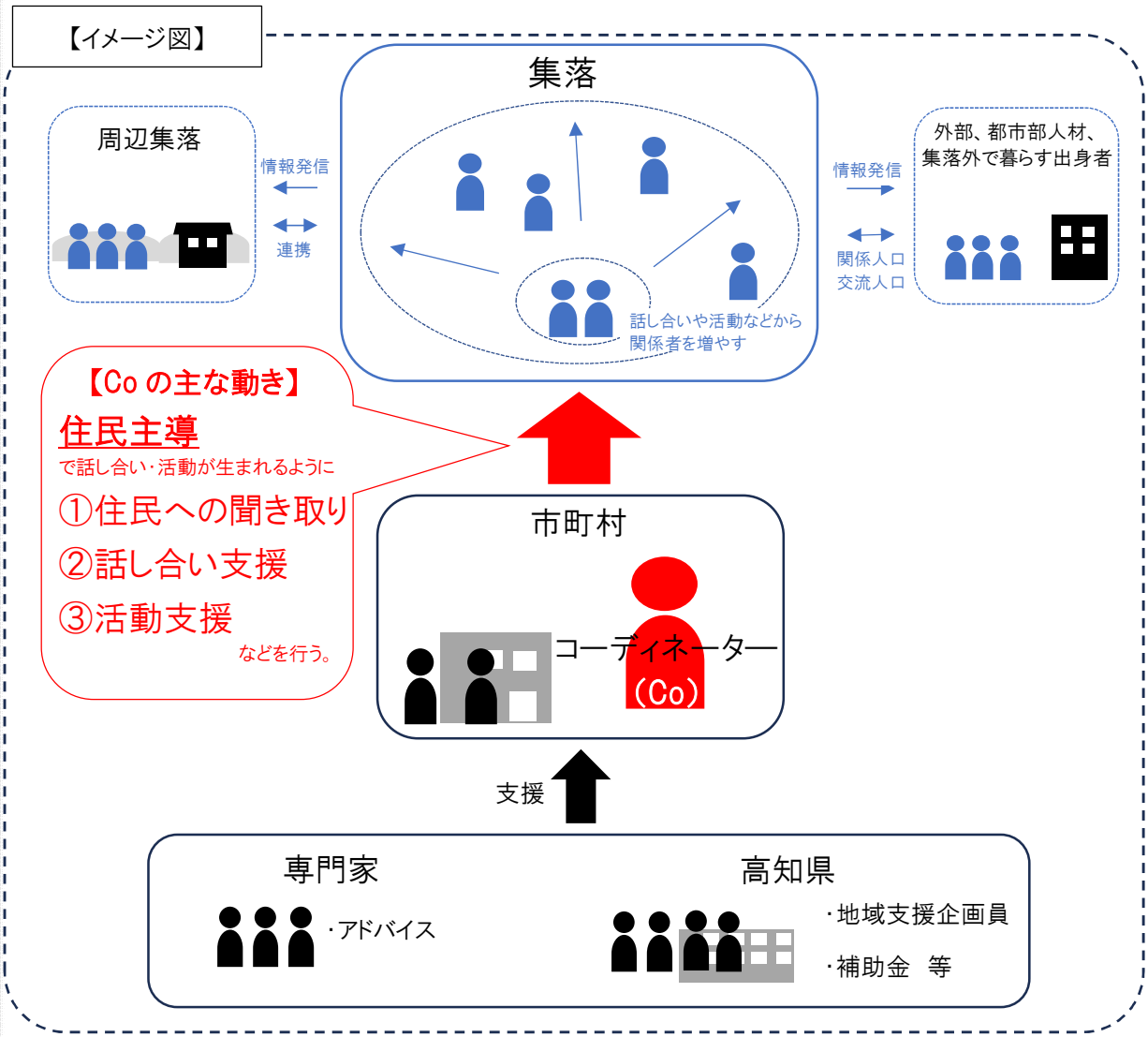
集落の関係者が主体的に集落の維持・活性化に取り組めるように、集落内の多様な方を訪ね、声を集め、意欲のある方を励まし、集落内や集落内外をつないでいく役割です。環境の変化にも対応しながら、粘り強く関係者に働きかけていくことが期待されます。

求められる能力…

集落に入り、話を聞ける人

□集落の方達と対話ができ、一緒になって集落の将来像を考えられる人材であれば、特別な能力は必要ありません。

□第 2 章の事例では、Co が活動の企画や WS の開催など様々な支援を行っていますが、着任時からできたわけではなく、この事業を通じて市町村や集落と一緒になって Co が“育っていく”ことも重要な視点です。



「集落活動センター」と「小さな集落活性化事業」の違い

平成 24 年度からスタートした「集落活動センター」は「集落間連携」の取り組みであることに対し、「小さな集落活性化事業」は「単独の集落」での実施も可能となっています。

【小さな集落活性事業の実施により改めて分かった点】

・Co の存在が大きい。（集落での話し合いや計画づくりが進みやすい）
・事例としては「単独の集落」での実施よりも「集落間連携」での実施が多い。

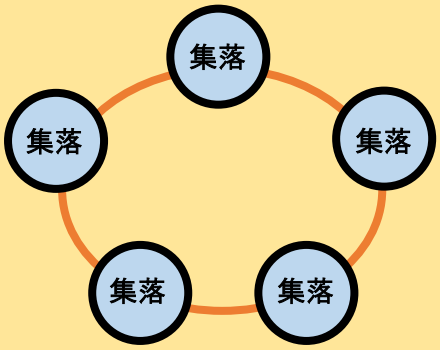
平成 23 年度　集落実態調査結果より

■中山間地域の集落の課題が数字によって明確化！
■人口減少や厳しい生活環境にも関わらず、集落同士で助け合いながら住み続けたいという想いを確認。

平成 24 年度
複数集落で連携して活性化する取組

集落活動センターを推進
（小さな拠点）

旧小学校区単位のまとまり



機能の集約・再編
住民力を活用した共助の仕組みづくり

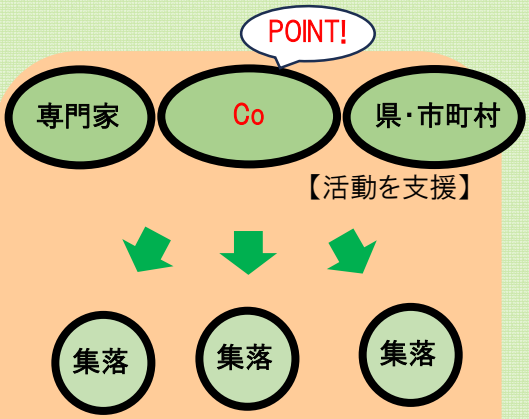
＋

令和3年度　集落実態調査結果より

■集落活動センターがカバーされていない地域が多く残されている。
■集落活動センターのない地域で新規のセンター立ち上げが困難。

令和4年度
単独の集落を活性化する取組

小さな集落活性化事業を実施



住民力を引き出し、活力を生む

「集落活動センター」に加えて、「小さな集落活性化」の取組を実施。

令和5年 12 月時点
32 市町村 66 箇所

「集落活動センター」に対する評価

・集落活動センターの取組により、58.0%の集落が“地域が良くなった”と回答。
・75.2%の集落が、取り組みに満足していると回答。（令和 3 年度　集落実態調査）

令和5年 12 月時点
13 市町村 17 集落

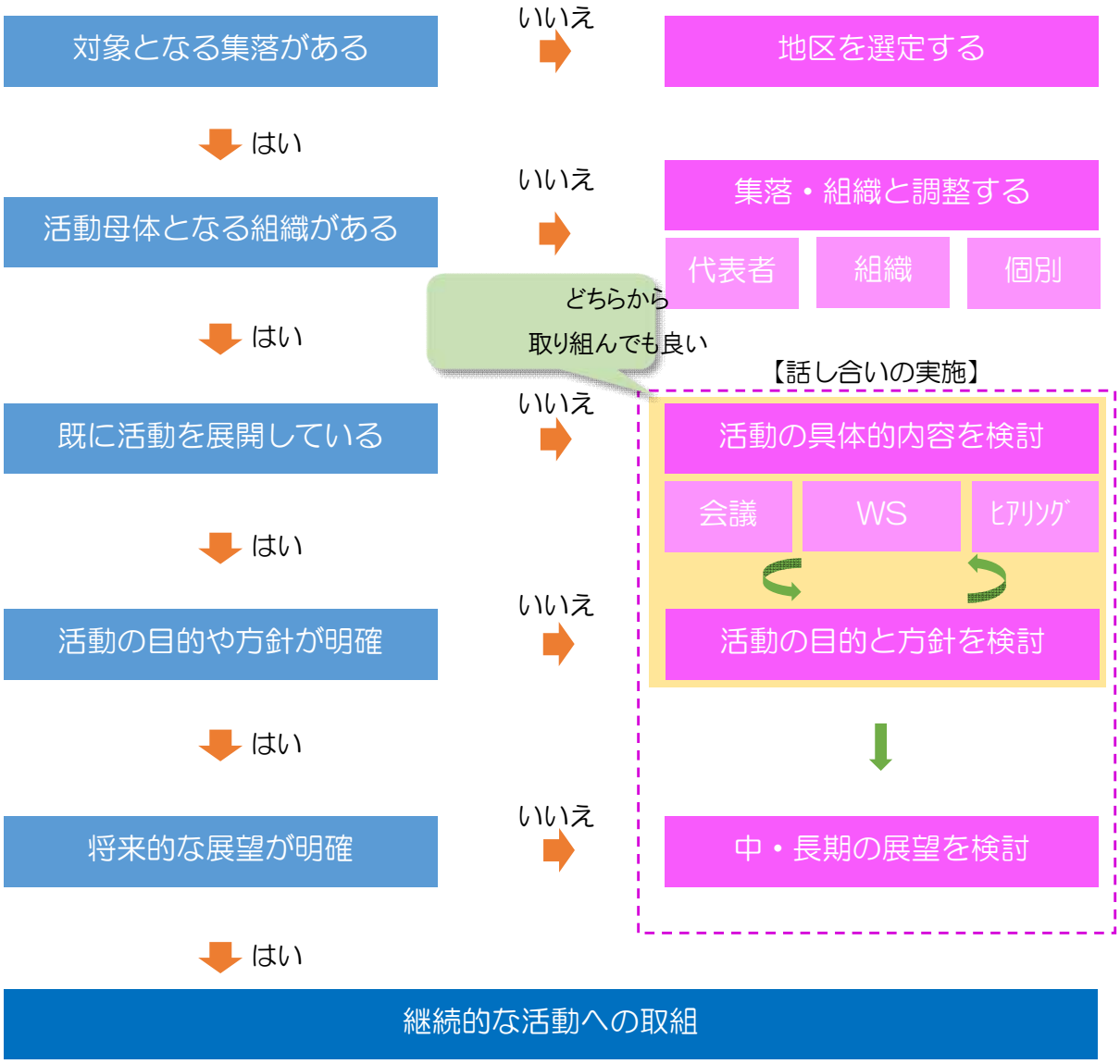
小さな集落活性化事業で目指すもの

・集落活動センターが全域をカバーしていない 28 市町村で仕組みづくりに着手。（令和4年～令和6年）
・市町村の地域づくり、ビジョンづくりと併せて横展開。

２　事例から学ぶ
小さな集落活性化事業

令和４年度に８市町村 11 集落、令和５年度には新たに５市町村６集落が本事業を活用し取組を進めています。本章では今後事業に取り組む市町村の参考となるよう、各集落の取組事例を紹介します。（令和５年 12 月時点）

以下は、事業を実施する集落が「どの段階か」を把握するフロー図です。令和４・５年度の事業実施事例を踏まえ作成したものであり、参考情報としてご活用ください。事例は、以下のフローに応じて分類しています。



2-1　令和４年度　対象集落一覧

【集落・組織と調整する】

市町村	モデル地区	当初の状況（選定段階の状況・課題）
津野町	1区新土居地区 （⇒P.12）	集落単位で活動する想いが強く、集落連携や新たな文化を受け入れる動きに対しては“連携のきっかけ”をつかめていない状況。
	10 区高野地区 （⇒P.16）	「お洗慶さま七夕祭り」など、各集落での資源・伝統文化を継承していく保存会や地域団体の活動が活発であるが、各集落は空間的にも広く、生活文化も異なる。また、人口が少ない集落を今後どうしていくのかも課題となっている。
四万十町	下津井集落 （⇒P.20）	地域に伝わる伝統行事（冬もうしなど）を後世につなげるため、町外関係者とともに牛鬼や花取り踊りの練習に取り組んでいる。今後、後継者の育成、世代交代に取り組みたいという思いがある。

【活動の具体的内容を検討】を先行して実施。

市町村	モデル地区	当初の状況（選定段階の状況・課題）
黒潮町	市野々川集落 （⇒P.28）	活動が活発な「釣りクラブ」が中心的存在となり、地域住民にまとまりがある。地域行事への参加も非常に積極的だが、若い世代や子どもは少なく、今の 60 代を引き継ぐ次世代に不安がある。
	奥湊川集落 （⇒P.32）	地域住民が集落や人々に愛着をもっておりまとまりがある。長年、少しずつ株を広げた彼岸花の風景が知られている。活動できる 60 代が少なく、「活性化」に気持ちが向きづらく、30～40 代の移住者家族もいるが、現状では、地元の人の先導が難しい。
室戸市	郷地区 （⇒P.36）	主な産業は農業で、ハイキングが楽しめる四十寺山があり、ガイド活動の他、桜やツツジの植林活動も行われているが、経済活動が弱い印象があり、地域資源の活用を検討していきたい。
いの町	上東地区 （⇒P.40）	地域を支える組織と活動はあるが人口減少と高齢化により活動は縮小傾向。マンパワーの確保や、集いの場でもある上東小の老朽化にも対応する必要がある。
南国市	三和地区 （⇒P.44）	地域課題を協議し解決を目指す組織として「三和を良くする会」が設立されており、今後、後継者の確保・育成に取り組みたい。
北川村	北部地区 （⇒P.48）	ゆずの栽培が盛んであったが、園地耕作者の高齢化、集落の生産者だけでは管理できない放棄園地の問題。地区行事・集落活動についても人材不足のため継続が懸念。

【活動の目的と方向を検討】を先行して実施。

市町村	モデル地区	当初の状況（選定段階の状況・課題）
いの町	神谷地区 （⇒P.24）	神谷小中学校の生徒数が減少しており、役員も高齢化している状況。若い世代や移住者などの参画が課題であるとともに、高齢者の活躍や集いの場が必要。

【中・長期の展望を検討】

市町村	モデル地区	当初の状況（選定段階の状況・課題）
大月町	樫ノ浦・西泊地区 （⇒P.52）	・集落活動の担い手不足及び世話役の固定化。 ・将来に向けて危機感を感じている住民もいると考えるが、地域から声は上がっていない。

取組の結果	成果
・地区内のイベントで販売活動を実施し、活動資金を確保。 ・現状把握と地域新聞「つのまちづくり」の発行。	・次の活動に繋げるための資金づくりと新たな人材発掘ができた。 ・地域と Co の双方向のやりとりが生まれる。
・お洗慶さまをきっかけとした仲間づくり。 ・お洗慶さま七夕祭り、笹見踊りの記録と保管。 ・現状把握と地域新聞「つのまちづくり」の発行。	・若手女性達が参画(販売活動)した。 ・続けていくべき大切な伝統を住民が再確認。 ・地域と Co との双方向のやりとりが生まれる。
・地域新聞「ふるさとだより」の発行。 ・伝統芸能の継承活動。(後世に継承するための記録)	・「ふるさとだより」発信で、集落の方と Co との双方向のやりとりが生まれる。 ・年に1回のイベントに、300 人(人口の約5倍)が集まった。

取組の結果	成果
・春・夏・冬のイベント企画・開催。 ・市野々川ロゴをデザインしユニフォーム(つなぎ、帽子、Tシャツ、エプロン)、手ぬぐいを作成。	・地域住民自身が「やればできる」「外部の人にこの地区を楽しんでもらうことができる」ことを、実感。 ・「次は～がしたい」「来年も続けたい」と意識が上がっている。
・「彼岸花」をモチーフに地域の子どもの字を活用し地区のロゴをデザインし、Tシャツと手ぬぐいを全地区住民に配布。 ・朱傘と縁台を点在させた彼岸花を楽しむ会を開催。	・地域の人の気持ちと実情に沿った「活性活動づくり」ができた。 ・「やってよかった」「またやりたい」という達成感を引き出すことができた。
・地区イベント「室津八幡宮レッツ郷親子夏祭り」の開催。 ・地区のお米を活用した特産品「ポン菓子」、野菜を活用した「漬物」の開発と休耕田の活用。(漬物用野菜の栽培)	住民主体で発案から実行・開催ができたことで成功体験が生まれ、自分たちだけの取組でも十分に魅力があるものを作ることができるという自信と気づきを得られた。
・LINE グループ、インスタグラム、便りなどを使った情報発信。 ・地区の将来を考える WS 開催。	・上東在住でない卒業生が家族で帰省する例が見られるように。 ・WS を通し、集落の将来像を考える機運が高まった。
・カフェ「ナナラ」、年2回の親子料理教室の開催。 ・みわりんピック(地区の運動会)の開催。	・地区内で積極的に活動する若手人材を発掘できた。 ・各部会間の情報共有・連携が図れるようになった。
・アイデアを書き出しマップ化、取組の優先順位を整理。 ・DIY イベントなどの実施や苔玉づくり体験など様々な交流事業の実施。	飲食店営業許可を取り、チャレンジショップによる弁当など地域の食を提供できる仕組みをつくり、高齢者の栄養を補うとともに、集落間の交流のきっかけとなる取組を実現。

取組の結果	成果
住民のニーズから「集いの場所づくり」と移住者増加に向けた「情報発信」をメインに検討するなど、方向性が見えた。	イベントへの移住者グループの出店の呼びかけや、小中学校の児童生徒に情報発信を行ってもらうなどの案が出始める。

取組の結果	成果
・「姫の里便り」で活動を周知。集落同士のやりとり開始。 ・集落活動センター姫の里の活動による地域を越えた交流。	「姫の里便り」による発信ができたことで、2集落での双方向のやりとりが生まれた。

津野町

1 区新土居地区

（7 集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	：	247 世帯
・人　　口	：	546 人
・高齢化率	：	47.1%
・事業主体となる団体	：	なし
・地域活動の拠点	：	各集落の集会所

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co

【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域と向き合い、地域に寄り添える人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
複数の地域団体があり、地域を元気にする活動を展開している。（八幡まつり、龍馬と歩こう脱藩の道など）

【課題】
・各集落単体での存続の想いが強い。
・集落連携や新たな文化を受け入れる動きは見えず、“連携のきっかけ”をつかめていない状況。

【これまでの取組】
・伝統文化の継承や地域の魅力を活かしたイベントの開催、集いの場、地域の楽しみづくりなど、各団体によって様々な取組を実施。
・地域団体の活動は、住民が中心となり、集落内だけでなく、集落の垣根を越えて仲間をつくりながら実施している。

・・ 対象集落を選定した理由

・津野町では、”人が暮らし続けることができる集落づくり”を目的に住民と行政が協働した地域づくりを行っている。
・地域でできることは地域で担うという考え方のもと、地域の力を一つに合わせながら、自分たちの地域課題は地域で解決していくことを目指す。
・本事業では集落活動センターの構成に入っていない集落および今後、集落活動が困難になると思われる集落を選定した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①販売活動。（羽釜で炊いたにぎり飯、焼き芋）
②現状把握と地域新聞「つのまちづくり」の発行。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	人件費、活動車両リース・燃料代など
印刷代	地域新聞「つのまちづくり」印刷
備品・消耗品	ホワイトボード、共有資料印刷代など

・・ 成果

①次の活動に繋げるための資金づくりと新たな人材の発掘ができた。
②初めて行った「販売活動」が、継続した活動となったことで住民の自信につながった。
③「つのまちづくり」の発行によって地域の方と Co の双方向のやりとりが生まれた。

	活動開始　～　3ヶ月	4ヶ月　～　6ヶ月
ポイント！	・・ Point01 人に会うため、積極的に地域に出向いた。 Co が既存団体や地域の取組を知るために、「地域のことを分からないので教えてください」というスタンスで**地域に出向き、地域を教えてもらうことから始めた。**	・・ Point02 まずは、Co が“地域のありたい姿”をイメージ。 住民から地域のありたい姿を引き出すために、まずは、住民の考える“地域の魅力”をベースに、会話を重ねながら、Co が、地域がこうなったらいいなという“地域のありたい姿”をイメージ。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①地域を知る ・地域を知るために集落の活動に参加。一緒に活動しながら、住民にヒアリング。 ・**“人に会う”**を意識し、会うときはしっかりと自分が何者なのかを**自己紹介**した。 →徐々に地域住民の顔や地域の空気感、住民の考えが見えてきた。 →積極的に地域訪問を行ったことで、Co が住民に認知され始めた。 →地域住民の話が理解できるように、地域の魅力や風習を見聞きし覚えることがポイント。	**Co、行政の動き**　：　②魅力に気づく ・イベントなどを通じて地域を知ることで、Co が地域の魅力的な資源（羽釜飯や地元のご飯が美味しい）に気付いた。 ・Co が集落に「集落のいいものを販売することに興味がないか」と投げかけた。 ※地域の良いもの（食べ物など）を販売することで集落の PR と活動費を稼ぐイメージを持ちつつ、地域活動に伴走していく。 ・専門家から「地域住民に Co が外からの目線で率直な集落の魅力を伝えては」との助言を実行し、地域住民に集落の魅力に気付いてもらうことが重要と気づけた。
	地域の動き 当初は、住民への聞き取りは連絡した方のみの参加であったが、徐々に Co が住民に知られたことで、地域で活動している集落内の関係者を住民から Co に紹介するようになった。	**地域の動き** 活動に伴走する中で、住民から Co に「地域の元気づくりに向けて活動を一緒に考えてほしい」と相談。
成果や見えてきた課題	【成果】 地域に積極的に出向き、住民と会話する中で Co の役割をしっかりと伝えることで、徐々に**住民に Co の活動、存在、役割が認識された。** 【課題】 地域から“地域のありたい姿”が見えてこない。	【成果】 Co が活動に伴走することで、集落との関係づくりが徐々にでき、住民に頼られることができた。 【課題】 これまでの地域の取組は地域の良いものを無料でふるまいをしている。おもてなしが上手なことが地域の良さである一方、稼ぐことに挑戦したことがなく、抵抗があることがわかった。

7ヶ月　～　12ヶ月

・・　Point03
話し合いの場づくりを設定し、地域の大切にしていること、挑戦したいことを共有。

住民が大切にしているもの、挑戦したいことを共有するための**話し合いの場づくり**を行った。

Co、行政の動き　：　**③見えるカタチで伝える・共有する**

住民の意見を反映した活動とするために、「三間川集落で取り組みたいこと」をテーマに地域が大切にしているもの、挑戦したい活動を話し合い、共有することを地域に提案し了承を得る。
→話し合いの実施。

地域の動き

・三間川集落の会長から主要な集落の方へ話し合いの場への参加を呼びかけ。
・Co の提案を受けて開催した話し合いの場では、「三間川自慢の羽釜飯を多くの人に味わってほしい」、「活動を継続させていくためには資金が必要」との意見が出た。
→活動の PR、活動資金を得るために、まずは津野町ふれあい特産市に出店することが決定。

【成果】
「継続した活動になるように実施しよう」と地域に投げかけ、話し合いを行ったことで、地域が「活動継続には資金が必要」と気づき販売実施につながった。
【課題】
・話し合いの場では、活動に積極的な住民の参加が多かったものの、周りの方へどう広げていくか今後の課題。
・地域が大切にしている資源、活動を継続させていくための活動資金づくり。

13ヶ月　～　20ヶ月

・・　Point04
集落の団結力を活かし、地域の活動の火を灯し続ける取組を行う。

出店に向け、料理をつくる住民の意見を集めながら、役割分担・準備を支援した。
販売活動を継続するため、活動の輪を広げることがポイントとなり、時期を見て、徐々に次回の販売活動に向けて住民に呼びかけを行った。

Co、行政の動き　：　**④つぶやきをカタチにする**

【津野町ふれあい特産市　出店】
・打ち合わせ内容の見える化。（板書、議事録の作成）
・地域住民との話し合いの場づくり、話し合い。
・進捗管理、連絡調整、必要備品の整備、許認可対応。
・イベント当日、住民と共に販売活動。
【イチョウまつり　出店】
・Co が町内の集落活動センター主催の「イチョウまつり」への出店を検討。出店に向けて、住民に**徐々に投げかけ**を行うなど大きな話題にはせず、小さく声かけをして出店することとなった。
→住民と販売物のアイデア出しを行い、集落の農作物を活かした「焼き芋」の販売が決定。
・無理なく活動するために、**「できる人ができるときに」と声をかけたことで、新たなメンバーの協力**が得られた。

地域の動き

・話し合いにより実施内容や準備物を共有し、イベント当日は役割分担のもと、販売を行った。
→自分たちの地域で開催しているイベントで培ったノウハウがあり、スムーズに対応できた。
・**販売後の振り返り**では、参加者から「出店して良かった」との声が多く集まる。

【成果】
・売上より2回目の出店が実現でき、今後の活動資金の確保につながった。
・平日に地域活動へ出ることが難しい世代からの協力が得られた。
・出店を通じて、他地域との交流が生まれた。今後も、この他地域とのつながりを大切にしたいとの声があり、新たな地域同士がつながっていくきっかけを創出できた。

津野町

10 区高野地区

（5集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 244 世帯
・人　　口	： 519 人
・高齢化率	： 44.9%
・事業主体となる団体	： なし
・地域活動の拠点	： 各集落の集会所

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co

【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域と向き合い、地域に寄り添える人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
北川集落のお祭りである「お洗慶さま七夕祭り」をはじめ、各集落での資源や伝統文化を継承する保存会や地域団体の活動が活発である。

【課題】
・10 区高野内の5集落は面積も広く、各集落で生活文化が異なり、集落同士の交流が乏しい。
・人口が少ない集落（20 人以下）の今後の方向性。

【これまでの取組】
・地域団体の活動は、住民が中心となり、集落内だけでなく、集落の垣根を越えて仲間をつくりながら実施している。
・活動内容は、地域の伝統文化の継承や地域の魅力を活かしたイベントの開催、集いの場、地域の楽しみづくりなど、各団体によって様々である。

・・ 対象集落を選定した理由

・津野町では、”人が暮らし続けることができる集落づくり”を目的に住民と行政が協働した地域づくりを行っている。
・地域でできることは地域で担うという考え方のもと、地域の力を一つに合わせながら、自分たちの地域課題は地域で解決していくことを目指す。
・本事業では集落活動センターの構成に入っていない集落および今後、集落活動が困難になると思われる集落を選定した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①お洗慶さま七夕祭り（夜祭り、笹見踊り、奉納相撲など）の活動をきっかけとした仲間づくり。
②お洗慶さま七夕祭り、笹見踊りの記録と保管。
③現状把握と地域新聞「つのまちづくり」の発行。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	人件費、活動車両リース・燃料代など
印刷代	地域新聞「つのまちづくり」印刷
備品・消耗品	ホワイトボード、共有資料印刷代など

・・ 成果

①「お洗慶さま大作戦会議」と題した意見交換を 2 回実施。話し合いの内容の共有や若手の女性達が参画（販売活動）した。

②お洗慶さま七夕祭りの活動や地域の伝統的な踊りである笹見踊りを記録として残すことができ、今後の継承活動のきっかけがつくれた。

③「つのまちづくり」の発行によって地域の方と Co の双方向のやりとりが生まれた。

	活動開始　～　9ヶ月	10ヶ月　～　13ヶ月
ポイント!	・・ Point01 **地域新聞「つのまちづくり」発信により地域から Co へ相談。** ヒアリングや地域新聞「つのまちづくり」の発行などの地道な活動が実を結び、地域から Co に伝統行事の継続に向けた相談があった。	・・ Point02 **地域の「こうなったらいいな」の姿を出し合い、引き出し、共有する。** 「お洗慶さま大作戦会議」という名称は、北川クラブと相談しながら、固くなく楽しそうな会と感じられるようにネーミング。 議事録を集落に全戸配布することで、担い手の掘り起こしにつながった。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①地域を知る 地域の現状を知るために、住民に会い、地域を知ることから始める。 ※集落は、笹見踊りの奉納、奉納相撲、夜祭などがある「お洗慶さま七夕祭り」を開催。 ※主催団体である北川クラブ（30 代～70 代）から、Co に対し、お洗慶さま七夕祭りの継承について相談があり、課題を出し合う場づくりを行うこととなった。	**Co、行政の動き**　②みんなで考える ・「お洗慶さま大作戦会議」を開催。 ・「みなさんにとってのお洗慶さまって何？魅力は？今後どんなお祭りにしていきたいか。」をテーマに WS を開催。 ・開催案内、WS の結果をまとめた**議事録は集落全戸に配布**。
	地域の動き Co の地域訪問時に、「お洗慶さま七夕祭り」の継承について Co へ相談。 	**地域の動き** ・WS の開催は、集落の会において北川クラブ会長から地区長へ周知を行った。 ・開催案内を回覧で周知し、参加者を募る。 ・第 1 回 WS 開催後、WS に参加できなかった人のために、第2回 WS を開催したいと地域が Co へ相談。第2回 WS も第1回 WS 同様、地域全体に周知を行い開催。
成果や見えてきた課題	【成果】 活動初期からの積極的な地域訪問や地域新聞「つのまちづくり」の発行により、Co の存在や活動が徐々に地域に認知されたことで、地域からお洗慶さま七夕祭りの継承に向けた活動を相談された。	【成果】 ・「お洗慶さま大作戦会議」によりお洗慶さま七夕祭りに関わるコアメンバーを Co が確認できた。 ・「つのまちづくり」の発行で北川クラブ関係者以外への周知につながった。 ・「お洗慶さま大作戦会議」「つのまちづくり」によりお洗慶さまへの町内の注目度があがった。 ・一緒に活動する仲間が必要という地域の悩みが明確になった。

14ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point03
地域が動き出し、協力者を募った。

北川クラブのメンバーを中心に、地域が動き、地道に声をかけあって、協力者を募っていった。

Co、行政の動き　：　**③仲間づくり**

・「お洗慶さま大作戦会議より見えてきた姿」と題し、会議の感想、気づきを共有し、お洗慶さまとは何か、支える団体、仲間づくりについて１ペーパーにまとめ地域へ共有。
　→会長の想いもあり、集落の若手の女性達の参加を中心とした仲間づくりに動く。
・販売物や物品の準備、役割分担などの販売に向けて協議。
・活動の様子や笹見踊りの練習などを記録。

地域の動き

・お洗慶さま七夕祭り実行委員会を開催。役割分担、意見交換など、動き出す。
・開催案内のポスターを作成し、全戸へ配布。周辺整備や土俵づくり、地域サロンの場で集落内外の子どもを対象に笹見踊りの練習、出店などの開催準備。

【成果】
・「お洗慶さま七夕祭り」は地域の方も知っていたが、関わるきっかけがなかったことから、担い手が広がっていなかった。
　→若手の女性に話し合いへの参加を徐々に投げかけることで、実行委員会に初めて若手の女性達が参加。
・**「地域の垣根を超えた仲間の協力も歓迎する」**との**声があがる**ようになる。

17ヶ月

・・　Point04
地道な活動により、地域のイベントが復活！

お洗慶さま七夕祭りが復活。地域の本来のにぎわいが戻った。
新たに若手の女性達が力を合わせて出店したことで、女性の新たな活躍の場づくりができた。

Co、行政の動き　：　**④地域イベントの開催**

当日は地域住民とともに活動に取り組み、販売活動をサポート。祭り開催後にメンバーへのヒアリングを実施。

地域の動き

・新たに女性達が話し合いの段階から参加し、出店するなど活躍の場につながっていた。
・集落内外から人が集まり、交流し、集落の人々が楽しむ姿が多く見られた。祭りを通じて久しぶりに人と交流し、楽しみを分かち合うという地域の本来のにぎわいが取り戻された。

【成果】
・「お洗慶さま七夕祭り」の大切さを地域が再認識。
・地域の方の地道な声掛けのもと、新たな仲間が運営に関わってくれるようになり、少しずつ集落の垣根を越えた仲間ができてきた。女性の新たな活躍にもつながり、来年度も出店したいとの声があった。

【課題】
・北川クラブの活動をまとめたものが少なく、仲間づくりに向けて、新たな参加者への呼びかけやクラブの活動内容を伝えることが困難だった。
・「お洗慶さま七夕祭り」に関わりたいけど関われていない人との関わるきっかけを生み、どう関わってもらうか、今後の活動に向けて検討が必要。

▶▶ 取組のプロセスポイント　地域を知る（Co を知ってもらう）

専門家からの助言
まずは行政内で、地域づくりの進め方や将来像を設定してみては？

活動開始当初

地域の力となる前向きな想いがどこにあるかを探りつつ、「地域のやりたいこと」に対して、地域のあるべき姿を考える土壌づくりのための活動を目指した。

専門家からの助言
地域Coの主観で良いので、地域内外の現状や活動を共有することが大切。活動のお返しにもなるため地域活動を“見える化”してあげるとよい。

活動開始当初

場を「見つける」ために奔走！

・Coが、毎日地域に出っぱなしの状態。
・既存の地域組織を探す活動を継続して実施。役場内で情報収集を図り、住民を訪ねては、紹介してもらった。
・地域の魅力や活動、ニーズ、課題などを抽出し、集落カルテにまとめた。

地域の時間を知る、ルールを知る、人・組織・場所を知る。

5ヶ月経過

地域を見える化する。

・専門家からの助言や地域の状況や課題を知る中で、地域の魅力を認識できた。
・「津野町のいいところを知ってもらう」「地域の人とやりとりできるようにならないか」を考えた結果、地域のお祭りや特徴を地域新聞「つのまちづくり」で町内に発信（町内の回覧＋町広報誌で掲載）。

地域のやりとりが生まれる！

活動の協力へのお返しのために議論、地域へ入るきっかけをつくる。Coの存在、動きを地域へ届ける。

1 年経過

2年経過

つぶやきをカタチにする場の構築。

・人に会い、会話を重ね、時間を共有する中で、徐々に信頼関係ができ、「地域に来る人を増やしたい」、「女性が活躍できることをしたい」など「地域がこうなったらいいな」のつぶやきが聞こえてくるようになった。
・地域での話し合いの場づくりを行い、地域の井戸端会議のような自由な雰囲気を作り、活動に必要な女性の参加も呼び掛けた。

市町村・Co から一言

まずは「人」に出会い、地域を知ることが大切です。
積極的に地域に出向き、「人」に出会ったことで、地域の想いを知り、地域の方とともに地域のことを考えることができました。人に焦点を当てることで関係の輪が広がり、沢山の方と共に活動ができました。

専門家の担当委員から一言

Coのお二人は、活動開始後しばらくは手探り状態で、不安も大きかったと思います。それでも地域の人たちと丁寧に交わした時間から、新たな会話の場が生まれました。地域活動も少しバージョンアップして、ささやかな手応えが広がっています。

四万十町 下津井集落（１集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 35 世帯
・人　　口	： 58 人
・高齢化率	： 75.9%
・事業主体となる団体	： 下津井郷土芸能保存会 下津井青年団
・地域活動の拠点	： なし

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co

【雇用形態】
地域おこし協力隊

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と課題解決に向けた取組の支援

・希望人材像：地域に入り、地域の方に寄り添える人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
「めがね橋」、「牛鬼」、「花取り踊り」など、地域に文化的な資源・伝統行事があり、それらの継承に取り組んでいる。

【課題】
・高齢化が進み（平均年齢も上がり）、区長などの世話役・地域の担い手が固定化している。
・後継者の育成、世代交代がうまくいっていない。

【これまでの取組】
・区長を中心に、集落の草刈りなどの環境整備や維持管理に取り組んでいる。
・地域に伝わる伝統行事（冬もうしなど）を後世につなげるため、下津井在住者だけでなく、町外関係者（下津井の親戚や下津井出身の若者など）とともに牛鬼や花取り踊りの練習に取り組んでいる。

・・ 対象集落を選定した理由

・四万十町は、大正北部地域の振興のために「大正北部地域づくり基本構想」を策定。
・大正北部地域内には集落活動センター（「中津川集落活動センターこだま」）が開所・活動しているが、周辺のその他の集落との連携や、周辺集落自体の地域づくりの動き、それらに対する行政の支援が十分でなかった。
・そのような中でも、地域資源や伝統行事の振興に取り組むなど地域づくりの素地のある下津井集落を選定した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①地域新聞「ふるさとだより」の発行。
②伝統芸能の継承活動。（牛鬼や花取り踊りなどを後世に継承するための記録、中学生への体験活動）

・・・ 補助金の主な活用内容

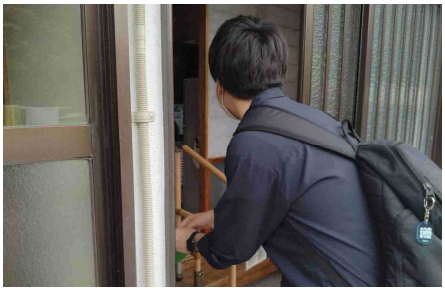
活動経費	伝統芸能継承用記録映像委託
印刷代	地域新聞「ふるさとだより」用の印刷トナー代
備品・消耗品	燃料代、修繕費、アドバイザー謝金、備品購入費

・・ 成果

①「ふるさとだより」による発信ができたことで、集落の方と町・Co との間に、双方向のやりとりが生まれた。

②「ふるさとだより」による発信により、集落在住者と集落外に居住する出身者との交流が活発化し、出身者がふるさとを思うきっかけができた。

③令和5年の冬もうしに、集落出身者や観光客など 300 人が集まった。

	活動開始　～　3ヶ月	4ヶ月　～　6ヶ月
ポイント!	・・ Point01 **事業の方向性を地区長に説明し、事業に取り掛かる。** 事業に取りかかるために、地区長への事業の方向性の説明を行う。	・・ Point02 **戸別訪問による聞き取り開始。** 専門家から話し合いの実施が住民の負担であれば、集落の規模からも各戸訪問により聞き取り･まとめることで話し合いに代えることができる」との助言を受け、**話し合いの方法を「場づくり」から「個別訪問」に変更した。**
Co・行政・地域の動き	**行政の動き**　：<u>①Co の選定</u> ・小さな集落活性化事業の Co として、大正北部（下津井含む 10 集落）担当の地域おこし協力隊の募集を開始。 ・住民の想いなどを確認するために、調査方法を検討。  **地域の動き** ・住人の高齢化、世話役などへの負担の集中などから住民が一同に会する話し合いの場づくりが困難であった。 ・当事業の内容や進め方を地区全体に広める方法を考えていく必要があった。	**Co、行政の動き**　：　<u>②集落を知る</u> ・Co 着任。 ・集落を知るために、アドバイザー（協力隊 OB）の助言を受けながら、集落に入り、情報収集を実施した。 ・住民の集う場をつくることが困難なため、Co が**定期的に各戸を訪問**し、聞き取りを行った。 ・集落住民が集まる年末の「暮れ会」に Co と町が参加し事業の進め方を協議した。 →Co が「牛鬼」、「花取り踊り」の振興を集落に提案。 →「ふるさとだより」のような**地域の活動を発信**することを町から提案し、暮れ会の参加者から**同意**を得た。 **地域の動き** Co から提案された「牛鬼」「花取り踊り」の振興に集落が取り組むことが決定した。
成果や見えてきた課題	【課題】 ・住民同士の協議を先導する人材として、地域 Co が必要。 ・話し合いの場づくりは住民の負担が大きいため、協議方法や進め方などの検討が必要。	【成果】 Co が積極的に各戸を訪問することで、信頼関係が築け、住民の想いや生活の実情を聞き取ることができた。 【課題】 U ターンを最終目標とした関係人口･交流人口の増加につなげるため、集落内外の人々に集落の動きを知ってもらうことが必要。

7ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point03
地域新聞「ふるさとだより」を作成。

専門家の助言やアドバイザー（協力隊OB）の先進事例も踏まえ、集落内外の人々に集落の動きを知ってもらうための方法として、紙媒体の「地域新聞」を選択。

Co、行政の動き　：　**③集落の動きを知ってもらう**

・Co の活動、事業について住民に知ってもらうために、Co（必要に応じて、担当課職員も同行）が可能な限り集落を訪問した。
・「ふるさとだより」に掲載する内容について住民と情報交換を行った。
・町の担当課やアドバイザーの助言を受けながら、住民から聞き取った内容を中心とした「ふるさとだより」を発行して情報を発信。
・ふるさとだより第1号。（着任から 8 ヶ月）
・ふるさとだより第2号。（着任から 10 ヶ月）

地域の動き

・「ふるさとだより」の送り先は、住民から地域外で住む親族の住所を Co が聞き取り、Co が郵送する想定であったが、住民が個人情報の取り扱いに懸念を示したため、封筒や切手などの準備までを Co が行い、**「ふるさとだより」の発送は住民が行った。**
・Co などの提案を受け、伝統芸能の「花取り踊り」継承に向けた取組の推進（下津井郷土芸能保存会による練習の指導など）を開始。

【成果】
「ふるさとだより」の発行。
【課題】
・「ふるさとだより」により、地域内外の交流を効果的に行う方法、工夫の検討。
・地域に関わる人を増やす、出身者同士のつながりをつくる。
・伝統芸能を継承していくための後継者や指導者の育成。

17ヶ月～

・・　Point04
集落外にいる出身者の横のつながりづくりに向けた新たな取組の検討。

伝統芸能継承や指導者育成の観点から、地元中学生への働きかけや活動の記録を実施。
人材・担い手の確保として、集落外にいる出身者などのつながりを広げるための新たな情報発信方法を検討。

Co、行政の動き　：　**④新たな展開につなげる**

・伝統芸能を継承する後継者や指導者の育成の観点から、**地元中学校生徒に冬もうし「牛鬼」の担ぎ手の体験**をしてもらうなど、後継者育成の取組を行った。
・冬もうしを集落内外に広めるために、準備・本番の様子の撮影・記録を地元ケーブルテレビに委託した。
・「地域新聞」以外にも集落内外のつながりをつくるために、①SNS 活用（対象：集落出身の若年世代）②インターネットでの集落産品販売（対象：当該集落（下津井）に来れない方）、③道の駅など集落産品の販売（対象：当該集落に来れる方）といった対象ごとへの PR 方法を検討。

地域の動き

・R5.10 月に高知市帯屋町アーケードで「牛鬼」を披露。高知市在住の集落出身者に担ぎ手となってもらい、R5.11 月の冬もうし本番でも協力することとなった。
・ふるさとだより送付先一覧の作成など Co に協力。

【成果】
・当初、個人情報の観点から行政・Co へ出身者住所など情報を共有することに住民は否定的であったが、「ふるさとだより」の発行後、区長から送付先一覧の共有が提案されるなど、**集落住民の心情が大きく変化した。**
・冬もうし本番は、過去最大の 300 人の来場者となった。行政や Co が呼びかけを行っていない方、県外在住者の出身者の家族参加など、**「ふるさとだより」から参加するなど関わりの輪が広がった。**

▶▶ 取組のプロセスポイント　地道な活動の継続による地域住民の意識変化

専門家からの助言
話し合いの実施が負担であれば、集落の規模からも各戸訪問により聞き取り・まとめることで話し合いに代えることができる。

専門家からの助言
伝統行事の継承保存にあたって、練習風景の撮影・編集により、何を継承すべきか確認する。

専門家からの助言
「地域内外の交流が活性化するための手段」、「出身者の横のつながりづくり」、「集落の応援者に対するアプローチ」が重要になる。

活動開始当初

伴走型支援を実施できるCoを選定。併せてアドバイザー（地域おこし協力隊OB）との連携を図り、集落の実情を踏まえた地域への関わり方を検討。

2ヶ月経過

Coよる「個別訪問」の実施。
集落と良好な関係をつくり、集落の実情を把握するために、2ヶ月にわたり集中的（着任当初Coは週4日勤務のうち3日、下津井集落を訪問。住民に「何をしに来ているか」と尋ねられる程）に集落を訪問。集落の暮らしの状況や住民の想いを戸別訪問で聞き取った。

7ヶ月経過

集落として「牛鬼」、「花取り踊り」の取り組むことが決定。

冬もうしの実施、本番、練習の撮影・記録の検討。
地元ケーブルテレビに練習や本番の撮影を委託。
地域の取組を知ってもらう地域新聞「ふるさとだより」の発行。
・「ふるさとだより」に掲載する内容を集落の住民と情報交換
・町の担当課やアドバイザーの助言を受けながら、住民から聞き取った内容を中心とした「ふるさとだより」を発行して情報を発信。
・切手・封筒をCoが準備、発送を集落住民が実施。

1年経過

住民から提案が上がるなど意識が少しずつ変化。

伝統文化・芸能の継承に向けた実施・体験・記録活動。
・学生を巻き込んだ体験や冬もうしの実施・記録などを展開。
・冬もうしは過去最大の参加者となり、「ふるさとだより」による情報発信の効果が見られる。

2年経過

市町村・Co から一言

集落の「人」「こと」を知ることが大事であり、できる限り集落に入ることが重要です。「何が住民の幸せにつながるか」「地域内外の人が楽しく暮らすには?」を大事に取り組んでいます。下津井集落の最終目標はUターン者を迎えることであり、その目標に向けて地域外の「地域出身者」がつながる場を企画しています。

専門家の担当委員から一言

地域新聞「ふるさとだより」が住民同士だけでなく、他出者（集落外で暮らす出身者）をはじめ地域の外にいる人たちとの間をつなぎ始めました。地域に住む人の数が減っても、外側から様々な形で関心を寄せてくれる人が増えれば、地域活動を続けるアイデアも生まれそうです。

いの町 神谷地区（１１集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 539 世帯
・人　　口	： 980 人
・高齢化率	： 57%
・事業主体となる団体	： 神谷七色会
・地域活動の拠点	： 神谷小中学校

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co

【雇用形態】
事務補助員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域に寄り添える、地域を知っている人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
人口減少・少子高齢化の進展に伴い、神谷小中学校の存続や移住促進を進めるため、地域組織の「神谷七色会」が中心となり、地域の魅力発信、会合、イベントの開催を実施している。

【課題】
・神谷小中学校の生徒数が減少しており、役員も高齢化している状況。
・若い世代や移住者などの参画とともに、高齢者の活躍や集いの場が必要。

【これまでの取組】
地域紹介 HP 開設やパンフレットを作製しており、毎年5月には地域のシンボルである白花せんだんのお花見会を開催。毎月の定例会では、空き家情報共有と空き家バンク登録物件を発掘。

・・ 対象集落を選定した理由

・日ごろから地域活動の素地がある集落であり、神谷小中学校の存続、移住者の確保といった明確な方針を持っている。
・そのための様々な情報発信やイベント開催などを検討しており、小さな集落活性化事業の趣旨と合致することから、本集落を対象とした。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

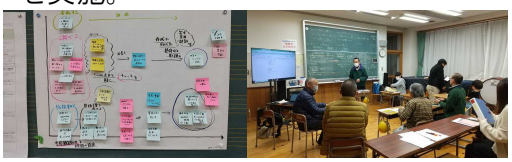
①アンケート調査などにより得られた、住民のニーズに沿った公園やサロンなどの「集いの場所づくり」。
②移住者増加に向けターゲットを絞った「情報発信」のための、既存 HP やパンフレットの改訂。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	・人件費、アドバイザー派遣費用（専門家とりまとめなど） ・HP、パンフレット改訂費用
備品・消耗品	簡易テント、机、椅子　など

・・ 成果

①七色会のメンバーだけでなく、これからの地域の担い手となる若者世代の参画が必要であるという考えが生まれ、今後につなげようという意欲がでてきた。
②イベントへの移住者グループの出店の呼びかけや、小中学校の児童生徒に情報発信を行ってもらうなど、新たな視点での案が出始めた。

	活動開始　～　2ヶ月	3ヶ月　～　7ヶ月
ポイント！	・・ Point01 新たな視点をいれて、もう一度、これまでの検討内容を見直す。 これまでの取組を基に、新たな視点を取り入れながら、もう一度地域を知り、深掘りや項目の整理を行うことでわかりやすく見える化を図った。	・・ Point02 地域の将来像実現に向けた理念と方向性を検討。 すぐに解決、実行できることばかりではないため、何から取り組んでいくかを地道に考えていく事が大事。 まずは、集落活動の理念と方向性を検討し、周辺の地区長に相談を行えるよう整理する方針となった。
Co・行政・地域の動き	**行政の動き**　：　①地域を知る ・地域活動や集落の将来像は、過去に七色会関係者で WS を実施していたが、それらの方向性を取りまとめるには至っていなかった。 →七色会と協議を行い、時間がかかってもこれまで取り組んできた内容を再整理し、見える化を図る方針となった。 →町や県は、今後の取組内容や方針を決めていけるようサポート。 →過去に、七色会で行った WS での意見が多岐にわたるため「実践活動サポーター(P.3)」を活用し、地域の会議に備えてサポーターと協議。	**Co、行政の動き**　：　②活動理念を決める ・以前に七色会に関わっていた町の事務補助員を Co に選定。 ・WS 形式での話し合いを実施し、項目分類、共通する部分の整理などを行い、地区が活動理念や方向性を検討・地区が選定しやすいようにサポート。 ＜実践活動サポーターによる支援＞ サポーターが WS の進行や情報をまとめ、話し合いをサポート。
	地域の動き ・毎月行ってきた定例会を、小さな集落活性化事業の協議の場とし、話し合いを実施。 	**地域の動き** ・取組内容を七色会に入っていない周辺集落に知ってもらうために、各集落の区長に説明を実施。 →集落の総会で紹介してもらうよう依頼すると共に、七色会が中心となって事業を進めていくことの了解を取った。 ・毎年5月に実施している、「白花せんだんのお花見会」の計画を立て、寄付のお願いや告知の準備などを行った。
成果や見えてきた課題	【課題】 ・検討項目が多岐にわたり、行政サイドから見ても取組内容を決めかねる状況。 →実践活動サポーター活用 ・Co が決まっていない。	【成果】 専門家の助言もあり「子育‘ち‘しやすく出て行っても帰って来たくなる”カッコイイ”神谷」を理念に、【暮らす】【育てる】【楽しむ】【発信する】という四つの方向性を定めた。 【課題】 活動を実行に移すことに慣れておらず、人員も限られたため話し合いが停滞。 ※一旦、白花せんだん祭りに注力する。

8ヶ月　～　12ヶ月

・・　Point03
話し合いだけでなく、実際に動いてみる。

事業自体の検討は一旦少なくし、地域のイベントを開催した。実際に動いてみることで得られた成果もあり、話し合いだけでなく実行の大切さを改めて感じた。

Co、行政の動き　：　**③理念と実際の声を比較する**

神谷七色会だけの話し合いでは、一部のメンバーの意見となり、結果的に地域に受け入れてもらえない可能性がある。
→その為、広く意見を収集し、様々な想いを取り込むことを目的に、白花せんだんのお花見会を活用して、アンケートを実施することで意見を集める方法を提案。

地域の動き

・5月に白花せんだんのお花見会を開催。地域内外から200人以上が来場、100人以上から意見を収集（アンケート実施）。
・8月に地域が開催する夏祭りに七色会のブースを出店した。お盆で帰省した出身者なども含め、主に地域住民が200人程度参加した。
　→七色会のメンバーから地域の若い世代にも声掛けを行い、積極的にコミュニケーションを取る様子が見られた。

【課題】
事前に調整を図り、神谷七色会の活動と今後の取組に、若いメンバーにも加わってもらいたいといった内容を発信できていればよかった。
→検討している内容を実践するための、若い世代の加入が必要。

13ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point04
具体的な取組の検討へとシフトチェンジ。

より具体的な取組にシフトしていく段階。改めて、神谷七色会だけでは解決できない問題であるという気づきが生まれ、地域に移住した方や、地域の若い世代、小中学校との連携などの案が生まれ始めた。

Co、行政の動き　：　**④地域の声も踏まえて活動する内容を絞り込む**

・地域の声も参考にし、まず取り組むべきことの絞り込みを行うこととした。
・公園や集まれる場といった「集いの場所づくり」に対して、活用できそうな町有地などを提示。
・情報発信として HP 構築を生業としている地域おこし協力隊に見積を依頼するなどし、検討しやすいようにサポート。

↓

公園やサロンのような「集いの場所づくり」、移住者増加を目的に、ターゲットを絞った「情報発信」のために既存の HP やパンフレットの改修の2点を重点目標として取り組んでいくこととなった。
→順調に進めば、HP などで移住ツアーの告知を行い、実際に地域を訪れてもらうような取組につなげる予定。

地域の動き

「集いの場所づくり」と「情報発信」とで班分けをして役割分担し、それぞれに必要な内容を定例会までに集めてくるなど、徐々に具体的な動きが始まる。

【成果】
七色会のメンバーだけでなく、地区内の方々と一緒に行っていくマインドに移ってきている。
→今後、小さな成功体験を積み重ねていきたい。
【課題】
具体的な居場所づくりとして用地確保に苦慮している状況。場所を作ることが目的でなく、いかにコミュニティーを広げ活性化していくかという観点が必要であり、取組の真の目的をみんなで把握していくことが課題。

▶▶ 取組のプロセスポイント　集落活動の理念と方向性を絞りこむ WS の開催

活動開始当初

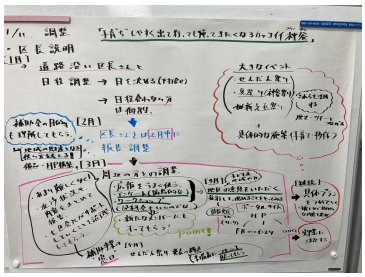
地域の将来像、実施してみたいことの意見は上がっていたが、その活動が集落の将来像にどう寄与するかなど、活動理念と方向性が絞れておらず、周辺区長にも説明ができなかった。

5ヶ月経過

みんなが膝を打つ“活動理念と方向性”の検討。

・神谷七色会定例会を活用し、活動理念及び方向性を整理するためWSを開催。

・「こんな神谷地区になったらいいな！」をテーマにみんなで意見を出し合う中で、「子育て」、「仁淀川の鮎のように帰ってくる」、「カッコいい暮らしがある」ことを共有できた。



専門家からの助言
子どもが自らの力で心身ともに成長することを「子育“ち”」と言い、神谷地区にも当てはまるのでは？

活動理念と方向性（案）がまとまる。「子育‘ち‘しやすく出て行っても帰って来たくなる‘カッコイイ‘神谷」

7ヶ月経過

集落長への説明を実施。

本格的な活動実施に向け、周辺の区長への説明会を行い、活動理念や方向性（案）を踏まえた中で、神谷七色会が窓口となって活動していくことの了承を得た。

→具体的な活動の検討段階に進むことが可能となった。

1年経過

話し合いから実践にシフトチェンジしていく段階。

専門家からの助言
仲間づくりにおいては、例えば、女性グループや、趣味の会など「人単位のネットワーク」を考えていくと意外とつながっていく。

2年経過

イベントを活用した聞き取り調査。

白花せんだんのお花見会を活用し、イベント参加者への意見収集を実施。外部からの意見として、新たな気づきがあり、活動展開につながる。

市町村・Co から一言

最終目標など地域のあるべき姿だけ想像すると、できない要因を探す方向に思考が向く。あまり悩まず、「共同作業後にお茶を飲んで話をする」などから初めて、余裕があれば次回は少し内容を追加するなど成功体験の積み重ねが良いと考える。協議疲れとならないように気を配り、長い目で少しずつ変えていく。

専門家の担当委員から一言

小中学校の存続などの地域課題に関心を持ったコアとなる組織があり、スタートが切りやすかった例。その一方で、仁淀川に近い子供が多い集落と、山間の集落とでの関心に差異があったため、11集落の区長さんへの説明などを丁寧に取り組んでいるところも注目。

黒潮町 市野々川集落（1集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 40 世帯
・人　　口	： 70 人
・高齢化率	： 53.6%
・事業主体となる団体	： 釣りクラブ
・地域活動の拠点	： 市野々川集会所

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ

【雇用形態】
地域ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域の意見を聞き取り、集約し、取組を提案できる人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
・活動が活発な「釣りクラブ」が中心的存在となり、地域住民にまとまりがある。防災活動や祭りなど、地域行事への参加も非常に積極的。
・農家民宿「かじか」での外部交流もある。

【課題】
・自分達で集落を楽しんでおり「困り感」が少ない。
・若い世代や子どもは少なく、今の 60 代を引き継ぐ次世代に不安がある。

【これまでの取組】
・「釣りクラブ」の存在により、集落運営の負担が区長に集中することなく様々な活動を地区全体で取組むことができている。
・当番制による集会所清掃やペンキ塗りなど、できることを自分達で行う住民の結束力は非常に強い。

・・ 対象集落を選定した理由

黒潮町佐賀地区の中山間地域の中から、特に地域活動が活発な市野々川集落に協力を依頼した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①春企画「タケノコ掘りと発電所見学」の開催。
②夏企画「流しそうめんと月を見る会」の開催。
③冬企画「こんにゃく作りと星を見る会」開催予定。
④市野々川ロゴをデザインしユニフォーム（つなぎ、帽子、Tシャツ、エプロン）、手ぬぐいを作成。

・・・ 補助金の主な活用内容

備品・消耗品	・イベント開催における消耗品雑費（星座早見盤、懐中電灯）など ・ロゴデザイン、つなぎ、帽子、エプロン、Tシャツ、手ぬぐい作成 ・和室座椅子、屋外扇風機の購入

・・ 成果

①地域の人のアイデアを繋ぎ、具体的に企画を実施したことで、住民自身が「やればできる」「外部の人にこの地区を楽しんでもらうことができる」ことを、実感できた。
②やりがいと可能性をもって「次は～がしたい」「来年も続けたい」と住民から声が上がるようになり、モチベーションが上がっている。

	活動開始　～　5ヶ月	6ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 丁寧な声掛けによる集落との関係づくり。 「集落を元気にするためにできることを考えたい」という Co の想いを地域に伝え、**まずは丁寧に集落の状況把握**に努め、**関係性づくりを大切**にする。	・・ Point02 共に集落を楽しみながら少しずつ関係性を築き、「仲間」として認識してもらう。 住民の方が自分の想いやアイデアを率直に話し、Co の話を「いいもの」として聞いてくれる、**好循環の関係性を作る**ことが大切。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①集落を知る ・集落の状況を知るために、区長にアポイントをとり、話を聞きにいく。 ・住民と意見交換できる機会を探る。 ・当該集落における事業の目的を整理し、何のために、どういったことを、どのような流れでイメージしているかなどをまとめ、住民と共に事業活用を考える説明資料を作成。 **地域の動き** ・毎月 1 回、釣りクラブの定例会。 ・年 4 回、ふれあいサロン。 	**Co、行政の動き**　：　②企画をする ・集落に足を運び、自分を知ってもらい、住民の声を聞く。 ・集落を知り、共に楽しむために、様々な行事に参加する。交流機会、お誘いを大切にする。(秋祭りなど) ・住民の意見や声をつなぐ企画を考え、たたき台を提示。(カタチにする) ・釣りクラブ定例会に参加し、住民と意見交換、関係性づくり。 ・こんにゃく作りに参加。 ・具体的な企画提案、予算作成。 **地域の動き** ・毎月 1 回、釣りクラブ定例会。 ・秋祭り、防災活動、釣り大会、忘年会、新年会　など。 ・こんにゃく作り。 ・様々な会に Co を呼び、事業に向けての企画相談。
成果や見えてきた課題	【成果】 ・集落の大まかな状況把握ができた。 ・住民と意見交換できる機会として、「釣りクラブの定例会」を案内してもらう。 【課題】 住民にわかりやすく説明するためのツールが必要。	【成果】 ・住民とざっくばらんな話をする中で、集落の魅力、素材がたくさん見えた。 ・各種地域行事に参加する中で、釣りクラブのメンバーだけでなく、女性部など集落の多様な方々と「仲間」になれた。 ・地区の声を反映した具体的な企画案、予算案を提示し、事業の活用に前向きな気持ちを引き出すことができた。

13ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point03
企画者自身が楽しく活動し達成感を感じられるようフォロー。

「カタチにする」（Co がつくる企画案）が、地域の想いによって「よりよいカタチになる」ように、集落の声を生かし、状況に合わせて臨機応変に対応していく。

Co、行政の動き　：　③実際に活動する

・集落の自然を楽しむ技を生かし、新たな交流を生む企画として、集落外から親子の参加者を募る自然あそびイベントを開催。
・釣りクラブ定例会に参加し、住民のアイデアをまとめ、参加者募集のチラシ作成。
・集落のロゴ作成、ユニフォーム（つなぎ、帽子）発注。

地域の動き

・毎月 1 回、釣りクラブ定例会。
・イベント広報、参加者申込を受けるために、インスタグラムを開設。
・春企画「タケノコ掘りと発電所見学」開催。
・夏企画「流しそうめんと月を見る会」開催。

【成果】
　イベントに多くの参加が集まり、参加者に喜んでもらえたことが地域にとっても喜びと達成感になった。
　→住民からの声
　　「これほど人が集まるとは思わなかった」
　　「市野々川の住民より多い。」「子どもの声がうれしい。」など
【課題】
　定員を設けても断ることができず、倍の参加数となり、集落負担の食糧費が課題。

17ヶ月～

・・　Point04
イベント企画のない期間も、集落に足を運び、関係づくりを大切にする。

集落の要望に応え、事業予算を有効に活用できるよう、計画を見直し、臨機応変に対応する。
　イベント後も、地域に足を運び、関係づくりを大切にする。

Co、行政の動き　：　④次の取組に向けた準備

・住民との関係性をより深めるために、様々な行事に参加する。交流機会、お誘いを大切にする。
・釣りクラブ定例会に参加し、住民の声を生かしグッズ作成などを進める。
・数年に一度の釣りクラブ旅行に参加。
・集落の高齢者も集まりやすいように、和室座椅子を購入。
・秋祭りに参加し、住民と交流（副町長、係長と訪問）。

地域の動き

・毎月 1 回、釣りクラブ定例会。
・秋祭り、釣りクラブ旅行、釣り大会、忘年会。

【成果】
　仲間として、釣りクラブ、婦人部、集落の人たちに馴染むことができた。
　→集落から Co へ交流機会の誘いをもらう関係ができ、集落からの信頼、仲間として意識されていると感じる。
【課題】
　事業のまとめと今後について、具体的に話し合う場が必要。

▶▶ 取組のプロセスポイント　地域の素材・技を生かし、交流人口を生み出す！

専門家からの助言
・地域課題×関係人口の創出　教科書的な取組。
・地域から出てしまった人を呼び戻したり、都会から人を呼ぶなど、ファンや経済をつくる可能性もある。

活動開始当初

区長にお誘いいただき、集落の青年団のような「釣りクラブ」の月一定例会に参加し、関係づくりと情報収集、相談を重ねる。

半年経過

集落の自然と楽しむ力で、交流人口を生み出そう！
情報収集と相談から、方向性を定め具体的な相談を進める。
・Coが定例会で出た声を春・秋イベントの企画にまとめ、必要物品の検討を進める。
・秋祭り、防災訓練など地域のイベントに参加しながら、集落全体の住民とも関係を深める。

集落の人の声をひろい、カタチ（文章・写真・企画など）にする

1 年経過

みんなで企画したイベントの実行。
・春企画「タケノコ掘りと発電所見学」を開催し集落外より 17 名、住民 15 名が参加。参加者に喜んでもらったことが達成感になり、夏企画も追加で行うことになった。

・夏企画「流しそうめんと月を見る会」を開催し、集落外より 40 名、住民 20 名が参加。住民も驚くほど人が集まり喜んだ反面、食糧費の集落負担が課題となる。

・冬企画として「こんにゃく作りと星を見る会」を開催予定。前回の反省と参加者からの要望も反映し、参加料を設定。参加者も企画者も楽しく持続可能な企画を目指した。

「これほど楽しんでもらえるとは！」の実感が活性化の力に

2年経過

イベントの継続について考える。
「またやってほしい」という参加者の声や、それに応えたいという気持ちが高まっている。それをどうカタチにしていくか。

市町村・Co から一言

「事業のため」ではなく、共に楽しみながら少しずつ関係性を築き、「仲間」となれたことで、想いを率直に話し、こちらの話を「いいもの」として聞いてくれる“良い状況”をつくることができました。
関係性づくりと、地域の声を生かしカタチにしていくことの積み重ねが大切だと思います。

専門家の担当委員から一言

前向きな人々が一部にいたものの、それを地域全体の継続的な盛り上がりにつなげきれていなかった地域が活発に動き始めた事例。人々の声に徹底的に耳を傾けた上で、その想いを具体的なカタチにした案を提案することで、地域が動き始める後押しをした点に注目。

黒潮町 奥湊川地区（１集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 45 世帯
・人　　口	： 78 人
・高齢化率	： 67.9%
・事業主体となる団体	： なし
・地域活動の拠点	： 奥湊川ふれあいセンター

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ

【雇用形態】
地域ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域の意見を聞き取り、集約し、取組を提案できる人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
・黄色い旗運動など集落活動もあり、地区住民が集落や人々に愛着をもっていてまとまりがある。
・長年少しずつ株を広げた彼岸花の風景が知られており、9 月下旬頃に彼岸花祭りを開催。

【課題】
・活動できる 60 代が少なく、「活性化」に気持ちが向きづらい。
・30～40 代の移住者家族もいるが、地元の人の先導は難しいのが現状である。

【これまでの取組】
区長がリーダーシップを発揮し、特徴にある活動を長年展開してきたことから、地域のまとまりは非常によい。

・・ 対象集落を選定した理由

大方地区の中山間地域の大部分が集落活動センターを設置しているため、残りの地区の中から特に地域活動が活発な奥湊川地区に協力を依頼した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①「彼岸花」をモチーフに地域の子どもの字を活用し地区のロゴをデザインし、Tシャツと手ぬぐいを作成。全地区住民に配布。
②朱傘と縁台を点在させて新しい風景を創り彼岸花を楽しむ会を開催。

・・・ 補助金の主な活用内容

備品・消耗品	・朱傘、縁台、フォトプリンター購入 ・ロゴデザイン、ゴム印、のぼり作成 ・手ぬぐい、Tシャツ作成

・・ 成果

①地区の活動として、これまでの区長を通した展開ではない形を模索し、区長の負担軽減や地域の人の気持ちと実情に沿った「活性活動づくり」を進めることができた。
②地域の方の「やってみよう」という前向きな気持ちと、実施した結果「やってよかった」「またやりたい」という達成感を引き出すことができた。

	活動開始　～　5ヶ月	6ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 丁寧な声掛けによる地区との関係づくり。 「地域を元気にするためにできることを考えたい」というCoの想いを地域に伝え、**まずは丁寧に地域の状況把握**に努め、**関係性づくりを大切**にする。	・・ Point02 共に地域を楽しみながら少しずつ関係性を築き、「仲間」として認識。 地域の声が出にくい場合は、地域の想いを大切にしながらも、こちらから提案し緩やかに乗せていくことも必要。 地域に足を運び、自分を知ってもらい、地域の人の声を聞く。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①地域を知る ・地区の状況を知るために、区長にアポイントをとり、話を聞きにいく。 ・地区の人と意見交換できる機会を探る。 ・当該地域における事業の目的を整理し、何のために、どういったことを、どのような流れでイメージしているかなどをまとめ、地区の人と共に事業活用を考える説明資料を作成。 ・移住者たちとの意見交換会・専門家の訪問対応。 **地域の動き** 毎月、ミニデイの開催（15 名ほどが参加）	**Co、行政の動き**　：　②準備をする ・地区の人が大切にしている彼岸花の風景をより生かすためにできることを、具体的に考え提案。彼岸花の頃に、移住者達と花見をしながら小さな意見交換会。 ・商店の店主との相談。 ・9月の彼岸花の頃に、まちの広報やケーブルテレビに取材依頼。 ・移住者たちとお花見意見交換会。 ・具体的な企画提案。（彼岸花の咲く田園に朱傘を立てて新しい風景を創る・彼岸花のオリジナルグッズ作成） ・ミニデイに参加。地域の人に企画説明。 ・予算作成、申請書類作成。 **地域の動き** 毎月、ミニデイの開催 Co を呼び、事業に向けての企画相談。
成果や見えてきた課題	【成果】 ・地区の大まかな状況把握。地区の人が大切にしている「彼岸花」を中心にする。 ・ミニデイを主催、活性化グループの一員で役員でもある商店の店主が、色々と相談にのってくれるようになり、**「ぜひ何かやりたい」という前向きな気持ち、やる気を引き出せた。**	【成果】 ・事業を少しずつ進める中で、「彼岸花の風景をより生かそう」「多くの人に見てもらいたい」という気持ちを高められた。 ・Co の提案を前向きに受け入れ「やってみよう」という流れをつくることができた。

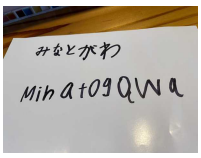
13ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point03
地区の人の気持ちにより沿いながら、企画を広げるための広報実施。

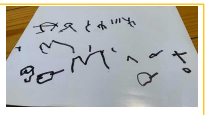
「カタチにする」（Co がつくる企画案）が、地域の想いによって「よりよいカタチになる」ように、集落の声を生かし、状況に合わせて臨機応変に対応していく。

Co、行政の動き　：　**③実際に活動する**

・彼岸花グッズの作成と配布によって、地域への誇りと存続や活性への前向きな気持ちを生み出す。
・彼岸花をモチーフにしたロゴには、移住者の子どもたちの手書き文字を使い、移住者と地元の人をつなぐことを意識した。
・田園に朱傘を 10 セット設置し、山・川・彼岸花の美しさを地区内外の人が再認識できる新しい風景を創り、地域の人で来場者におもてなしを行った。
・「彼岸花を楽しむ会」開催。



地域の動き



・彼岸花のための草刈り。
・事前準備（Tシャツ、てぬぐい仕分け、縁台の組み立て、のぼりの作成・設置）。
・当日は、点在させた朱傘のそれぞれ近隣の人が出し入れを担当。

【成果】
・移住者の子どもの手書き文字を使ったロゴは、地区の人にも好評で、「地域の子ども」を意識してもらうことができた。
・Tシャツ、てぬぐい、のぼりなど具体物を見せることで、活性化への気持ちをより一層高めることができた。
・**地区の方が達成感**を感じ「多くの人会えて嬉しかった」「新しい風景で地域の価値を再確認」「ありがとう」と言ってくださる状況を生み出せた。

17ヶ月～

・・　Point04
写真を共有して振り返り、実施した企画について達成感を醸成。

写真を共有して振り返り、実施した企画について達成感を感じられるようにする。
地域の要望に応え、事業予算を有効に活用できるよう、計画を見直し、軽微な変更申請など臨機応変に対応する。

Co、行政の動き　：　**④振り返り、新たな展開**

・集会所に当日のまとめ写真を掲示。
・ミニデイで写真をみんなで見る時間を設け、写真が欲しい人には後日追加印刷して配布。
・「朱傘の風景」を地区の人に周知し、中山間活性の横展開につながるよう、町内のイベントでも朱傘を活用した。（産業祭、潮風のキルト展）
・朱傘活用の可能性を考える。

地域の動き

・毎月、ミニデイの開催。

【成果】
地区外の人に地域を説明する際に「彼岸花と朱傘の風景」を自分達の地域の魅力として紹介してくれるようになった。「来年もやろう」という前向きな気持ちを引き出すことができた。

▶▶ 取組のプロセスポイント　みんなにとって、無理なく地域を楽しめる空間・時間を創出する！

専門家からの助言
- 偉大な区長さんのため、後継者が難しいモデルの1つ。
- 「彼岸花」を深堀りしてみるのもよい。
- 秋祭り復活など、風通しのきっかけになれば。

活動開始当初

幅広く地区の人と話合いをする中で、区長発進ではない地域活性の在り方・事業活用の可能性を探る。

半年経過

彼岸花をより生かすため、新しい風景を創ろう！

情報収集と相談から、方向性を定め具体的な相談を進める。
- 長年大切に育て、かつて彼岸花祭りも行われていた地区の宝・彼岸花を生かし朱傘で創る風景の企画を提案。
- ミニデイなどで住民と関係を深めながら、具体的な物品案や彼岸花のロゴ、グッズ案でイメージを共有する。

地域の人の想いに寄り添いながら、企画を提案しカタチを見せる

1 年経過

朱傘×彼岸花の風景の実現。
- 9 月の「彼岸花を楽しむ会」に向けて、物品購入、グッズ作成を進める。移住者と地元をつなぐため、移住者の子どもの手書き文字を使ったロゴを作成。
- てぬぐいやTシャツの配布、縁台の組立てなどに、多くの住民が参加し、「みんなで無理なく分担」のよい流れができた。
- 田園に朱傘を 10 セット設置し、山・川・彼岸花の美しさを地域内外の人が再認識できる新しい風景を創り、200 人以上の来場者に、てぬぐいプレゼントとお茶菓子のおもてなしを行った。

物品や風景が見えることで、どんどん前向きな気持ちに

2年経過

「素敵な風景」「楽しんでもらえた」の実感を生かす

「彼岸花と朱傘の風景」を新しい地域の魅力・誇りとして、感じてもらえている。これを生かし次のカタチへ。

市町村・Co から一言

地域のみなさんの気持ちに寄り添い、「大きなイベントにせず、無理せずみんなが楽しめる形」を常に意識しながら企画を進めたことで、地域の方が達成感を感じ「ありがとう」と言ってくださる状況を生み出せた。時には企画を提案し、緩やかに乗せていくことも有効だと思います。

専門家の担当委員から一言

地域の人々が大切にしているもの（彼岸花）を中心に据え、寄り添い、「やってみよう」という前向きな気持ちを引き出し、無理のない形で実行に移した事例。区長ルートとは別のルートを開拓し、「既存体制に依らずに地域が動き出せる基盤」を創出した点に注目。

室戸市 郷地区（7集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 326世帯
・人　　口	： 589人
・高齢化率	： 45．7%
・事業主体となる団体	： 地域活性化委員会 ～レッツ郷～
・地域活動の拠点	： 室津郷公会堂

・・ Co の紹介

【肩書き】
集落支援員
【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：郷地区の活性化（地区の取組の伴走支援）

・希望人材像：地域住民と積極的にコミュニケーションを図り、意欲的に行動できる人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
室戸市の中心を流れる室津川流域にある7集落で構成されている。主な産業は農業で、ハイキングが楽しめる四十寺山があり、ガイド活動の他、桜やツツジの植林活動も行われている。

【課題】
地域資源の活用が十分になされていない。

【これまでの取組】
・年に数回の四十寺山ハイキングの実施。ハイキングではガイド活動も行っている。
・主に観光に関連する分野で「四十寺山桜美人の会」が取組を実践。関係者で飲み会を開くなど、住民同士の関係も良好。

・・ 対象集落を選定した理由

主に観光に関連する分野で取組を行っていた「四十寺山桜美人の会」が、高知県主催の博覧会「牧野博士の新休日」に合わせて地域資源を活用した地区の活性化に関する取組を検討していた。そこで、小さな集落活性化事業を活用し、新たな活動の展開を検討することを目的とし、選定した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①地区イベント「レッツ“郷”室津八幡宮」の開催。
②地区のお米を活用した特産品「ポン菓子」と、野菜を活用した「漬物」の開発。
③休耕田の活用。（漬物用野菜の栽培）

・・ 成果

①地域住民による WS を3回開催し、「自分たちの地域の将来を考える」という意識が住民に芽生えた。
②集落全体での取組となり、地域活性化に向けた住民主体の活動について機運が高まった。
③数人ではあるが、集落内外からイベントの手伝いの申し出があり、自分たちの取組が軸となって、交流人口の拡大につながるという気づきが得られた。
④住民主体で発案から実行・開催ができたことで成功体験が生まれ、自分たちだけの取組でも十分に魅力があるものを作ることができるという自信と気づきを得られた。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	視察経費
備品・消耗品	・夏祭りイベントなどに関わる備品購入・レンタル ・特産品開発（ポン菓子、漬物）に関わる備品購入・原材料

	活動開始　～　3ヶ月	3ヶ月　～　10ヶ月
ポイント！	・・ Point01 関係者で話し合い、地区の魅力や改善点を再確認。 自分達の地区の魅力や将来像をもう一度見直すところからスタート。 地区の主体性をいかに育てていくか。地区住民が自分達で考え、取り組み、磨き上げを行っていくことができるように進めた。	・・ Point02 適材適所を心掛けたイベントの検討。 取組を実施する際、地域住民は仕事として参加しているわけではないため、住民が望まない限りは苦手なことや大変なことを押し付けないよう気を付けた。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**：①地域の将来像を考えてみる ・行政側の提案で事業を進めるのではなく、地区の人々が取り組みたいと思える事業を引き出し、自主的に事業を進めることで地域の将来像実現に向けた取組につなげたい想いのもと、地区との調整を行った。 ・県支援制度「実践活動サポーター（P.3）」を導入。関係者個々人が思う地区の将来像やそのための取組を引き出すように WS 実施。 →当初から Co の必要性を感じており、Co の選定開始。	**Co、行政の動き**：②まずできることを整理 ・Co 選定開始から3ヶ月後、Co 着任。 ・新任 Co（集落支援員）を地区の人に知ってもらうため、市広報紙に着任の挨拶を掲載。自然と地域に溶け込めるようになる。その他、地区住民の集まりに顔を出すなど関係性の構築に取り組んだ。
	地域の動き ・地区の希望は施設改修（トイレ）が主であった。（集落活動センター化の話も有り） ・地区で実施していた定例会を活用し、住民 WS を開催。地域の魅力・改善点を踏まえた将来像についてみんなで意見交換を行い、“お米”や“伝統行事”などの多くの共通ワードが抽出された。	**地域の動き** ・将来的には集落活動センターの設置を目指すことや、まずは、地域の子ども向けの夏祭りをやってみる！という方針が打ち出された。 ・今後、集落活動センターに配置する機能のお試しの場として、夏祭りを活用する方針が整理された。 ・夏祭り開催に向けて、準備・運営・人材配置などを関係者で協議・整理するなど実施に向けた取組を展開していった。
成果や見えてきた課題	【成果】 当初、施設改修（トイレ）について多くの意見が挙がっていたが、WS による意見交換により、集落活動の実施へと方向性が変わってきた。 【課題】 活動を展開していくうえで、地区内外での関係人口をどのように増やしていくか。	【課題】 メンバー各々の意見・アイデアを引き出す必要があるが、数度の会議を経て発言量の差が大きくなってきた。特に発言量が少ない方の意見が流される、否定されるなどがないよう、意見の拾い上げや発言しやすい雰囲気作りが必要。

10ヶ月　～　11ヶ月

・・　Point03
地区イベント「室津八幡宮レッツ郷親子夏祭り」の開催！

住民主体の発案から実行・開催ができたことで、成功体験が生まれ、より具体的な取組について意見が出るようになった。

Co、行政の動き　：　**③地区イベントの実施と振り返り**

イベント後は、振り返りも含め、誰でも気兼ねなく参加し意見を出せる環境になるよう、最初の段階ではどのような意見・アイデアでも受け入れた。（但し、今後出た意見を集約し、実際に取り組むかどうかを検討する際には実現可能性も含めた意見をもらう）

地域の動き

・住民が考えた夏祭りが開催でき、催事として成功したことで、「自分たちだけでも実現できる！」という成功体験につながった。
・イベント後の振り返りや継続的な話し合いを実施。
・特産品開発（ポン菓子）の取組を開始し、試作品を夏祭りで配布。

【成果】
住民同士で協力し、みんなで取組を進めていく力が強い地域であるという長所を再確認できた。
【課題】
集落活動センターの設置が早期に実現できるよう進めていく中、進捗を急ぐあまり一部でも住民の方が置いて行かれることがないよう、事業のスピード感の調整が難しい。

12ヶ月～

・・　Point04
1 年の活動で大まかな年間スケジュールを把握。次年度の活動スケジュールをみんなで想定・検討・共有。

1年間取組を実施してみて、大まかなスケジュールがつかめた。次の1年間の活動スケジュールを事前に住民と想定・検討・共有することで準備などが後手に回らないように取組を進めた。

Co、行政の動き　：　**④新たな展開につなげる**

・特産品開発（ポン菓子）の取組として、近隣の集落活動センターで実施されるイベントに出店し、試作品を提供。アンケートを取り、改良を行った。
・新たな取組として、特産品開発（漬物）に着手し、休耕田を活用して、漬物で使用する野菜の栽培を行うなど、地域課題を循環的に解決できる取組を検討し、実施。
・夏祭りの際に補助金を活用したことから、補助金ありきの取り組みにならないよう、調整の都度、Co や行政がフォローしていく。

地域の動き

・継続的な話し合いにより、地区の団結力が高まる。
・活動から派生する新たな取組についてアイデアを出し合う。
・次年度のスケジュールについても地区住民で共有。

【成果】
一つの事業に取り組む際に、みんなで団結して進めていくことが、以前よりも可能になった。
【課題】
地区の活性化のため、中心となって関わる人だけでなく、催事での手伝いだけや、好きなことだけでも関わってくれるライトな関係人口を増やすこと。

▶▶ 取組のプロセスポイント　住民で企画・開催した夏祭りにより小さな成功体験を創出

専門家からの助言
地域が関心をもっているハード整備以外のもので求心力となるものを模索できれば、切り口がたくさん見つかるかもしれない。

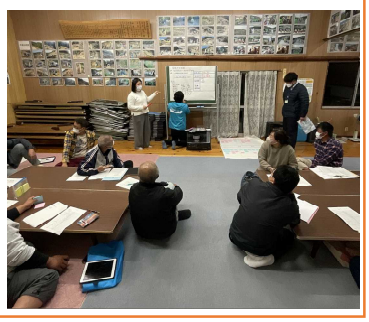
活動開始当初

地区の関係者同士は、以前から仲が良く、活動を実践していく、人を受け入れるという点で素地はあったが、自分達の地区にある素材を“どう活かしていくか”が見えない状況であった。

5ヶ月経過

みんなで地区の将来を考えるWSを14回実施。

・自分達の地域の将来像を改めて考える場としてWSを実施。
・意見を共有する中で、「まずできることをやってみよう！」という意識に変わってきた。



将来は集落活動センターを設置。まずは、夏祭りを開催する！

10ヶ月経過

「室津八幡宮レッツ郷親子夏祭り」の開催。

・たくさんの人が訪れ、大盛況となった。
・当初は「市外から露店を呼ばないと地区のものだけでは人が来ないのではないか」と不安だったが、夏祭りが成功に終わったことで、自分たちだけでも十分に魅力があるものを作ることができるという自信と気づきを得られた。
・夏祭りは、将来、集落活動センターで実践することをお試しする場、子供達が地域に愛着をもつきっかけの場、みんなが楽しむ場とする！

専門家からの助言
プロジェクトありきで、プロジェクトが先にあり、それを収める箱が集落活動センターであることを再認識していくことが重要！

1年経過

小さな成功体験から生まれる新たな取組。

2年経過

1年目の取組で得られた経験を、次年度に活かす。

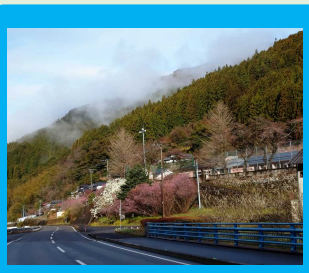
1年を通して大まかなスケジュールを掴んだことで、早い段階で次年度の流れを検討。また、誰でも気兼ねなく参加し意見を出せる環境になるよう、最初の段階ではどのような意見・アイデアでも受け入れるなど、解決方針を検討・実践した。

市町村・Co から一言

みんなで目標をしっかりと共有しながら、集落内外の関係人口が増えていくような事業が実施できるよう支援を行っていく。集落内外の人を巻き込んだ取組を継続的に実施し、自然と関わりを持ってくれる人達を増やしていくよう取組を行っていきたい。

専門家の担当委員から一言

ハード整備を事業取組の契機としながらも、地域全体の将来を考え、課題解決を図る取組へ展開させた例。WSや自主的なイベント実施を通して、地域への関心を持つ人々を増やし、拠点施設整備を手段として捉え直している点に注目。



いの町 上東地区（４集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 49 世帯
・人　　口	： 81 人
・高齢化率	： 70%
・事業主体となる団体	： 上東を愛する会
・地域活動の拠点	： 上東小学校

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：上東(ジョウトウ)地域の現状把握、既存の地域活動や地域外とのつながりの「たな卸し」及び新たな展開への伴走支援
・希望人材像：中山間地域での活動に意欲があり、集落の活性化や課題解決のために真摯に取り組む活動ができる人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
・「上東を愛する会」、農事組合法人「上東」設立など、地域を支える活動がある。
・約 30 年前から大阪の音楽家、東京の映画関係者との親交が継続し、土佐和紙関連の人脈が広がるなど、地域外との独自のネットワークが蓄積。

【課題】
・人口減少と高齢化の進行が顕著であり、自治活動は縮小傾向。マンパワーの確保が求められる。
・避難所や集いの場である上東小が老朽化。

【これまでの取組】
・「花祭り」の開催や農事組合法人上東による近隣集落の田畑の受託作業。
・休校の上東小を活用したドラム缶楽器・スティールパンの「上東パンの学校」を開校。

・・ 対象集落を選定した理由

・映画のロケ地(「絵の中のぼくの村」1996 年公開)になったことなどが縁で大阪の音楽家と出会い、休校の上東小を活用したドラム缶楽器・スティールパンの「上東パンの学校」がスタート(2005 年)。県内外での演奏が増え、地域発信につながっている。
・小規模ながら土佐和紙の原料・楮の共同作業を開始し(2008 年)、記録映画「明日をへぐる」(2021 年公開)につながった。
・上記のように日ごろからの地域活動の素地がある上東集落を選定した。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①若者(～40 歳代の卒業生)の LINE グループ「上東を考え隊・発信し隊」開始。インスタグラム「お山の上東」inotown_chao_joto を開設。
②「上東のコレカラを話し合う会(WS)」
③「上東を愛する会」便りの発行。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	消耗品、動画作成　等
備品・消耗品	鳥獣対策用品、ホワイトボード等備品

・・ 成果

①地域の共同作業の日時に合わせて、上東在住ではない卒業生が家族で帰省する光景が見られるようになった。
②「上東のコレカラを話し合う会(WS)」を通して、集落の将来像を主体的に考えたり発言したりする機運が高まってきた。

	活動開始　～　8ヶ月	9ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 **地域ニーズに即した小さな集落活性化事業実施の検討。** 活動の素地はできているので、地域の将来に対する不安ごとや困りごとを知ることから始めた。 若い世代がすでに作成していた出身者の LINE グループやインスタグラムを活用するなど取組を開始。	・・ Point02 **活動の復活に向けた地域の手助けを開始！** 持続可能な地域活動となるよう、高齢者なども含めた詳細な聞き取りを実施。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①意見を聞く ・上東を愛する会の活動や農事組合法人上東の活動、地域の実情について行政が地区にヒアリングと事業の説明を実施。 ・Co を配置し、地区の現状把握、地区内及び出身者などからの意見収集を実施。 ・地域外に住んでいる若者が LINE グループでつながっていることがわかり、地域の活動と連携することができないか調整を図り、考案した。	**Co、行政の動き**　：　②動き始める ・上東小学校を地域の交流促進拠点とし、持続可能な地域活動を行う仕組み作りを検討。 ・和紙をきっかけに 10 年以上前から上東と関わりがあるデザイナーと、“かじがら”の使い道の調査・提案を実施。 →東京方面への PR をデザイナーが実施。上東に興味を持ってくれた方をつないでもらうよう連携。 ・備品購入などによる拠点の環境整備。
	地域の動き ・役員会で若者 LINE グループのアイデアなどを情報共有。若者などの LINE グループ「上東を考え隊・発信し隊」を作り、気楽な意見交換と情報共有を開始。 ・インスタグラム「お山の上東」を開設し、情報発信開始。 ・地区内の4集落毎の会合、TV 組合、猟友会、ミニデイ、氏神様行事など従前からの集落運営の協議や作業などを継続。	**地域の動き** 役員会で、「パンの学校」に併せて花見、会食、演奏鑑賞の集い(ミニデイ上東)の開催を決め、「上東便り」の全戸告知を実施。
成果や見えてきた課題	【成果】 専門家委員より「できることをできる所から」「人口減の中、棚卸し(洗い出して整理)により将来への負担を軽く」などの助言で「新たなことでなく、楽しく次の世代へつなげる工夫をしよう」という考え方になり気持ちが楽になった。 【課題】 役員の世代交代、後継者育成。	【成果】 住民及び出身者に、上東地域の将来像を具体的に考えようとする機運が生まれた。 【課題】 同時に、それぞれの関わり方(考え方)を確認しつつ、「できる」「できない」などを整理しないと行き違いが生じる恐れが発生する。

13ヶ月　～　18ヶ月

・・　Point03
WS や視察(具体的なイメージ)により地域の熱量がアップ！

WS では、出た意見を否定せずに、丁寧に洗い出し、地域のモチベーションを上げつつ、持続可能な活動を意識して住民へ投げかけを行った。

Co、行政の動き　：　③実際に活動する

・「上東のコレカラを話し合う会 WS」を2回開催し、これまでの活動の振り返りを実施。
・「上東を愛する会」便り作成。4 月(1-2 号)、6 月(3 号)、7 月(4 号)、9 月(5 号)
・追手前高校吾北分校「地域学」、県立大「域学共生実習」関係への対応。
・加工品(どぶろく)の情報収集、視察調整。

地域の動き

・愛校作業(清掃・除草)及び慰労会実施。
・WS で出た意見を参考に、大豊町の「どぶろく作り」を視察し、加工品の意義を再認識すると同時に、飲食・営業など法令・設備・備品整備の経費など課題も把握。
・東京都世田谷区「生活工房ギャラリー」の「かじがら WS」と、上東の楮へぐり(※1)作業を LINE で結び交流。

【成果】
・WS には役員以外の参加もあり、進行(ファシリテーター(※2))の技量も相まって、充実したものとなった。
・新型コロナの5類移行を受け、2つの行事のあと、懇親会を再開できた。

19ヶ月～

・・　Point04
WS と活動を通して得られた経験から集落存続に向けた取組を考える。

集落を存続するための具体的な取組をじっくり考える。

Co、行政の動き　：　④今後の取組検討

・第3回「上東のコレカラを話し合う会 WS」を開催。
・演奏会、健康づくり、映画上映行事の企画について関係者・町担当課と協議。
・「上東を愛する会」便り作成。10 月(6 号)、11 月(7 号)
・今後の事業計画に関して協議、情報収集。
・WS の結果から、住民や出身者の関わり方を確認し、「できること」「できないこと」などを整理。

地域の動き

・役員会を開催し、令和 6 年度へ向けた取組の骨格を決定。今後の打ち合わせ、令和 6 年度事業の確認などを実施。
・2002 年の「上東を愛する会」発足当時から、随時、全戸配布している便りに加え、一層高齢化が進行し、単身高齢者も増えている現状を踏まえ、民生委員や集落の役員と連携し、口コミでの情報伝達にも力を入れる。

【成果】
WS を通して、「自分たちが楽しく暮らせば良い」、または「外部から人を呼び込みたい」のどちらなのか、「次世代が根付ける可能性が上東にあるのか」という根本的なことをじっくり考えるようになった。

※1 特殊な包丁で土佐楮(こうぞ)の皮から表皮部分を削ぎ取る作業
※2 ワークショップや会議などの場面で、参加者の発言を促す、話を整理することで、話し合いをより良い結果に導く進行役

▶▶ 取組のプロセスポイント　新たなことでなく、楽しく次の世代へつなげる工夫

活動開始当初

地域の将来に対する不安や困りごとを知ることから開始。地区の現状把握、地区内及び出身者などからの意見収集。

専門家からの助言
徐々に取組の棚卸し（洗い出して整理）を行うのはどうか。

1年経過

SNSを活用した新たな取組！
・若者（～40 歳代の卒業生）の LINE グループ「上東を考え隊・発信し隊」開始。インスタグラム「お山の上東」を開設。
・中山間地域の課題に対応する新しいｺﾐｭﾆﾃｨが構築される。

専門家からの助言
何がどうありたいのか」を住民から引き出すことが大事。目標と現状の間を割っていくプロセス（取組を小分けにして実験的にやっていくことなど）が必要。

1 年 1 ヶ月経過

上東地域の将来像を具体的に考えようとする機運

WSの開催。
・「上東のこれからを話し合う会 WS」を開催。
どぶろくづくり視察（大豊町）、かじがわ WS、楮へぐり作業などにつながる。
・「できること」「できないこと」などを整理していく。

専門家からの助言
「現場にいけば誰かに会える」といったように、同窓会の要素を含んだ仕掛けも大事。

1 年5ヶ月経過

「上東を愛する会便り」を作成
　地域の情報発信手段として、「上東を愛する会便り」を発行し、活動内容など情報を発信。

2年経過

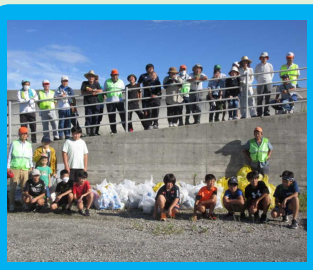
根本的な課題をじっくり考えるようになる。

市町村・Co から一言

上東には、農事組合法人上東、和紙や映画、スティールパンなどを通して、上東を愛してくれ繋がっている外部の人脈がある。そのご縁を活かし、更に上東に関わる人を拡げ紡いでいくと、いろんなアイデアや見えていなかった資源などが生まれてくるかもしれない。そういったものを小さく生んで積み上げてほしい。

専門家の担当委員から一言

活発な取組を長年行っている一方で、人材不足も深刻という例。これまでの活動での「繋がり」を活かした関係人口づくりと、多くの活動を現状の人材にあわせて「できること」と「できないこと」に整理する活動とを、両輪として行っているところも注目。



南国市 三和地区（２２集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 1、246 世帯
・人　　口	： 2、622 人
・高齢化率	： 44.9%
・事業主体となる団体	： 三和を良くする会
・地域活動の拠点	： 三和防災コミュニティーセンター

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域に寄り添える人材、地域の実情を知っている人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
・南国市の平野部に位置し、海にも面している自然が多い地区である。また、集落活動センター「チーム稲生」の近接集落である。
・地域課題を協議し解決を目指す組織として「三和を良くする会」が設立されている。

【課題】
・人口減、少子高齢化。
・後継者の確保、育成。

【これまでの取組】
・これからも住み続けたいと思える地域となり、地区を維持・活性化していくため、平成 30 年度に「三和を良くする会」を組織。地域の課題に応じた部会により課題解決に向けた話し合いを実施。
・「三和まつり」などの地域行事がある。

・・ 対象集落を選定した理由

平成 30 年度の「三和を良くする会」設置当初から役場の企画課と関わりがあり、活動状況も把握していた。今後の地域の将来像を考えていく上で、本事業の活用が望ましいと考えたため選定。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①カフェ「ナナラ」を毎月１回開催。
②年2回の親子料理教室の開催。
③みわりんピック（地区の運動会）の開催。
④みわ出会いの BBQ の開催。
⑤防災活動、海岸清掃。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	イベント謝金、バス借上料、宣伝費、振込手数料
備品・消耗品	アナログミキサー、Co 用PC、イベント用品、事務用品、防災関連用品

・・ 成果

①小さな成功体験を通じて、地域にまとまりや積極性が見られるようになった。
②三和を良くする会など、他団体も含めた話し合いが事業により促進されたことで、以前と比べて会のメンバーが地区の現状を把握できるようになり、現実的な計画を立てられるようになった。
③各部会間の情報共有・連携が図れるようになった。
④地区内で積極的に活動する若手人材を発掘できた。

	活動開始　～　9ヶ月	10ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 住民との信頼関係を構築。 Co や市役所職員が三和を良くする会への出席や電話連絡などを密に行うことで、住民と信頼関係を構築できた。 まずは地域で何ができるか、Co から地域に投げかけ、事業についての話し合いを実施。	・・ Point02 キックオフイベント実施により、地域に活気！ キックオフイベント(みわの春祭り)により地域が活気づいた。 活動を継続して続けていけるように Co はサポート役に徹した。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①話し合う ・総会にて、小さな集落活性化事業に取り組むことを「三和を良くする会」会員に周知した。 ・専門家と三和地区の視察後、住民との意見交換を実施した。 →"どのような活動をしたい"について、地域の想いを語った。 ・翌年度事業や年度内に「みわの春祭り」実施に向けて細かなスケジュールを組み、会を重ねながら話を進めた。	**Co、行政の動き**　：　②実施する ・役員会や各部会などを多く開催するように促し、課題解決に向けた話し合いを進めた。 ・イベント実施に向け、保険の申請や保健所への届出などを調べ、助言・サポートに努めた。 ・イベント当日は、配役など足りていない部分のサポートを行った。 ・翌年度事業の各部会の案について個別ヒアリングを順次行った。
	地域の動き ・臨時総会にて、翌年度事業に向けた案を各部会(地域活性化部会、少子高齢化対策部会、地域防災環境対策部会)で抽出。 ・活動開始から9ヶ月後、第1回みわの春祭り実行委員会開催。 	**地域の動き** ・第 2、3 回みわの春まつり実行委員会を開催。 ・「みわの春祭り」実施に向けた下準備。 ・周知については、三和地区の広報誌、チラシなどで行った。 ・活動開始から12ヶ月後、「みわの春祭り」を実施し、地区民間・世代間の交流が図れた。
成果や見えてきた課題	【成果】 地域でイベントを行うのは 4 年ぶりだったが、意欲的に取り組む姿勢が見られた。 【課題】 コロナ禍でのイベント開催であったこともあり実施を心配する意見があった。	【成果】 ・イベントに取り組んだことで、地域にまとまりが見られるようになり、地区民間・世代間の交流も図れた。 ・コロナ禍で停滞していた「三和を良くする会」が再び動き出した。 【課題】 ・負担の大きい人と小さい人の差がある。 ・女性の声が通りにくく、参画も少ない。

13ヶ月　～　16ヶ月

・・　Point03
やりたいことを尊重しつつ現実的に実施できる取組へ。

役員の役割分担や事業バランスを Co が把握し、やりたいことだけでなく、現実的に実施できる取組となるよう促した。

Co、行政の動き　：　**③住民が相談しやすい場づくり**

・曜日と時間を決めて Co が地区公民館に常駐する日を設け、それを周知することにより地域の方に相談してもらいやすい“場所づくり”をした。
→その結果、女性達が毎回相談に訪れるようになり良い関係性が築けた。事業に対する不安の声が寄せられた時には、住民と協議しながら事業内容の変更に向けて手続きを進めた。
・住民から相談を受けた際、課題や懸念事項を整理しながら、継続可能な取組となるようサポートした。

地域の動き

・地域活性化部会では、料理教室からカフェ事業への変更手続きと同時進行でカフェメニューの試作をするなど意欲的な姿が見られた。
・一方で、住民間の役割分担が曖昧で他人任せとなっている部会が見られた。
・イベント実施に向け、部会や役員会などを積極的に開催した。

【成果】
・住民同士で話し合う機会が多くなったことで現状の把握ができるようになり、現実的な計画を考えられるようになった。
・本当に自分たちができること・やりたいことを考えるようになった。
・地域活性化部会の女性達はとても意欲的になり、何事にも積極的になった。

【課題】
・役割分担をしっかりと決め、いかに主体的に取組を進めていくか。
・若手が発言しづらい雰囲気があった。

17ヶ月～

・・　Point04
これまでの振り返りを行いながら来年度事業の方向性を検討していく。

各部会でイベントを計画していたため進捗管理を十分に行った。また、部会間の連携を図るように促し、地域全体でイベントを盛り上げる機運の醸成を図った。

Co、行政の動き　：　**④今後の取組検討**

・それぞれの部会の活動の方向を見失わないように、進捗管理を行った。
・各部会の連携を促し、「3部会で三和を良くする会なのでみんな一緒にやってもいいんですよ」と呼びかけを行った。また、部会以外の方にも協力をお願いした。
・取組の共有・連携を図ることを目的に、毎月定例会を開いてもらうことが決定。
→2部会での合同事業などの話が出てきた。

地域の動き

・部会ごとにイベントを実施した。
① 地域活性化部会
・親子料理教室、カフェ「ナナラ」、みわりんピック
②地域防災環境対策部会
・第 1 回、第 2 回海岸清掃
③少子高齢化対策部会
・みわ出会いの BBQ
・3 部会でイベントがしたいとの意見が複数寄せられた。
・各部会で、「あれもこれもやりたい！」との意見が出た。若者のやりたいことに対して、実施にあたっての課題などに関する意見が多く出た。

【成果】
連携・共有の大切さを感じ、部会を越えて取組に参加する人が増えた。

【課題】
・連携が取れていない部会がある。
・「若者がやりたいことを地域で応援していくカタチづくり」の検討。

▶▶ 取組のプロセスポイント　実践から生まれる小さな成功体験が前向きな意見を生む

専門家からの助言
計画づくりに時間をかけるのではなく、まずは、動いてみてそこから広げていけばいい。

活動開始当初

まず、できることを話し合う。コロナ禍を経てのイベント検討であり、心配事も多い中、意欲的な意見・姿勢が見られた。

1年経過

みわの春祭りを実施！

「みわの春祭り」を実施したことで、地区民間・世代間の交流が図られた。コロナ禍を経ての開催であったが、停滞していた「三和を良くする会」が再び動き出すきっかけとなった。

イベントの実施により、地域でやってみたいことが複数提案！

専門家からの助言
「女性の声が通らない」や「若手のしたいことができない」などは、これから事業を考えていくうえで、早めに手を打っていかなければいけない。

1年1ヶ月経過

相談しやすい“場所づくり”。

地区公民館を活用し、曜日・時間を決めた Co の常駐を実施。相談しやすい場所づくりにより、女性達との良い関係性構築が図れた。

話し合いにより、現実的な計画が考えられるようになった。

1年5ヶ月経過

部会ごとにイベントを実施。

①地域活性化部会
・親子料理教室、カフェ「ナナラ」、みわりんピック
②地域防災環境対策部会
・第 1 回、第 2 回海岸清掃
③少子高齢化対策部会
・みわ出会いの BBQ
・各部会でも、「あれもこれもやりたい！」との意見や若者の「やりたいこと」実施にあたっての課題など多くの意見を抽出。

専門家からの助言
役割を小分けにしてみんながプレイヤーとなり、それぞれ持ち場があると良い。

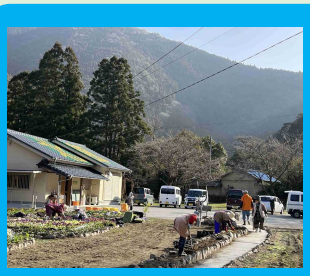
2年経過

市町村・Co から一言

地域に溶け込みつつも客観的に物事をとらえ、事業を進めていくことが大切だと思います。

専門家の担当委員から一言

今ある拠点と組織をフルに活用する一歩を踏み出してくださった事例です。個々に輝いていたさまざまな人や取組を横につなぐ場が次々とできています。これにより、地域の未来に対するモヤモヤした感覚が晴れはじめています。さらに、個々の人や取組の輝きも一層増しています。



北川村 北部地区（３集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 25 世帯
・人　　口	： 35 人
・高齢化率	： 66.1%
・事業主体となる団体	： いこいの里
・地域活動の拠点	： いこいの里（北部集会所）

・・ Co の紹介

【肩書き】
集落再生 Co
【雇用形態】
地域おこし協力隊

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域意向調査を踏まえた組織づくりや活動計画支援、交流関係づくり企画立案、イベント開催や体験プログラム運営支援、情報発信や地場産品 PR 活動、担い手発掘育成など
・希望人材像：持続可能な地域づくりにチャレンジしていただける人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
北川村の北部、役場から車で 45 分に位置し、人口 35 人、高齢化率 66.1%ではあるが、住民の主体性が根付いており「集落で生活を継続したい」という希望が強い。集落のリーダーが存在。

【課題】
・ゆずの栽培が盛んであったが、園地耕作者の高齢化、集落の生産者だけでは管理できない放棄園地の問題。
・神祭や田役（※）など地区行事・集落活動についても人材不足のため継続が懸念される。

【これまでの取組】
地域存続プランとして、住民同士の話し合いの場の形成、組織化・ビジネス化と段階を踏まえて集落再生に取り組み始めた。

※田んぼに引いてある水路の掃除や整備、草刈り

・・ 対象集落を選定した理由

地域存続プラン策定にあたり、住民主体で集落再生の取組を始めた北部地区をモデルとするため本事業の対象集落に選定。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①北部地区活動拠点「いこいの里」で SNS 投稿を継続することによるファンづくり。
②アユ寿司の販売や、チャレンジショップによる弁当・総菜などを提供できる仕組みづくり。
③DIY イベントなど、イベントの実施や苔玉づくり体験。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	活動車両リース料、視察料、冷蔵庫、食品衛生管理者講習
備品・消耗品	パソコン、交流イベント WS 材料費、ホワイトボードシート

・・ 成果

①「いこいの里」という名称が北部活動拠点として存在感を持ち始め、住民にとっても「何かが始まった」という認識につながった。

②「できる人ができる時に関わる」という共通認識が生まれ、様々な企画などを実施したほか、地区のリーダーが SNS デビューするなど、外部への発信について意識が変化していった。

③拠点を中心に協力しあう体制ができ、外部協力者の積極的な関わりによって、住民からも主体的な動きが見え始めた。

	活動開始　～　4ヶ月	5ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 キーパーソンと行動を共にし、徐々に話をできる関係に。 移住して間もない Co が、短時間で地域の信用を勝ち得ることは容易ではないため、住民が信頼を置いているキーパーソンに聞き取りを行った。なるべく行動を共にし、何度か顔を合わせる中で徐々に住民と個別でも話ができる関係性に。	・・ Point02 既存組織「いこいの里」の活動方針を明確化。 4つのポイントを整理。 ①初期投資にお金を掛けない。 ②住民の安心安全な暮らしが一番！ ③完全ボランティアをなくして活動する仕組みづくり。 ④関わる人達が自由に活用できる場。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①意見を聞く ・住民の生活動線・リズムを考慮した接触を試みる。 ・話合いの内容は、データ化及び見える化。（ビジョンマップ（※1）、グラフィックレコーディング（※2）など） ・「持ち寄りカフェ」を開催し、手作りのものにお金を払う仕組みと交流のキッカケとして、スイーツの無償提供と「お気持ち代を貯金箱に入れるシステム」を導入。 ・調理場の飲食店営業許可取得と保険加入調査申請。（食品衛生対策） ※1 将来像や目標、目指す理想などを視覚的に表現 ※2 会議やイベントの進行と内容を図やイラストで表現	**Co、行政の動き**　：　②動き始める ・毎日の SNS 投稿によるブランディング（※3）。 ・外部契約講師による苔玉 WS 開催。 ・シーズンに応じた集落発信の飲食提供お試し企画「三月菜（高菜）おにぎり」。 ・新規移住者による「手作り餃子・チーズケーキ」の販売。 ・「いこいの里」地元食堂初営業（鮎寿司の販売）。 ・チャレンジショップ開催に向け、出店者募集要項を作成し、回覧。 ※自分達の地域のブランド（価値）を形成するために行う様々なコミュニケーション活動
	地域の動き ・リーダーが地区ごとに Co に同行して土地を案内し、地域の特性や住民を紹介。 ・これまで無償で提供していた家庭菜園で採れた野菜などを販売するにあたり、品質やタイミングにプレッシャーがあった。 ・ゆずの収穫シーズンは、収穫作業と並行して、会議・イベント、お手伝いなど、毎日様々な予定をこなす忙しい状況が続く。	**地域の動き** ・お花見・忘年会以外の活動は、「できる人ができる時に関わる」という方向性に。 ・集落の女性が集会所の飲食店営業許可申請取得と食品衛生責任者講習受講。 ・地区のリーダーが Instagram デビュー。日々の投稿をチェックしている（Instagram の投稿は Co）。
成果や見えてきた課題	【成果】 ・「いこいの里ビジョンマップ」という共通の未来予想図ができた。 ・住民に「何かが始まった」という認識が広がった。 【課題】 ゆず作業期間は忙しいため、手の込んだ料理や多くの献立を用意できない。 →外部からの応援者による援助が必要。善意に甘える形にならないよう個人の楽しみとマッチングさせた仕組化が必要。	【成果】 ・飲食店営業許可認定により、安心安全な環境整備が整った。 ・SNS を通じて、集落への好意的なコメントが増加し、現地訪問にもつながった。 【課題】 ・神祭以外で話し合いのための招集が負担になる。 ・ゆずを活用したいが、通常出荷との区別や仕事の段取りに影響が生じる可能性がある。

13ヶ月　～　15ヶ月

・・　Point03
地区外との協力による試験的な取組。

集落住民の意識では、長らくできないと思っていた「ゆずシーズン中でもできる活動方法」を、これまでの活動で応援してくれる地区外の協力者とタッグを組むことで試験的に実施した。

Co、行政の動き　：　③応援者の見える化

・イベントへの参加などは、「気が向いた時に良かったら寄ってください」を徹底。
・Co が出店者から希望内容やイメージを聞き取り、チャレンジショップの告知チラシを作成し、集客を図った。
・移動手段のない方へ宅配する「まごころ便」、平日は仕事で北部地区へ行けない方やいきなり北部地区まで行くのは気が引ける人向けの「役場前お届け便」を実施。

地域の動き

チャレンジショップ農家さん応援企画の発案。
・「農家さんがゆず作業に集中できるように」と集落外から出店協力。
・加茂地区→ゆずシーズンのピークは共に頑張りたいと 11 月隔週金曜日開催。今後も月2回（金）開催定例化を希望。家庭料理のお弁当やおかずパックを提供。
・平鍋地区→ゆずを使用したお菓子の提供。集客やゆずのPRがより見込める土・日のチャレンジショップ開催。
・ふるさと納税返礼品注文受け入れ＆対応の通年化。
・イベント開催情報などを、口コミ拡散。SNS 利用者は「いこいの里」アカウント共有。

【成果】
　応援者の見える化が飲食分野でも実現。
【課題】
　集落全体で「いこいの里」を活用していく構想のためには、ビジネス目的が入らないと長期的な関わりや継続は難しい。

16ヶ月～

・・　Point04
住民主体によるチャレンジショップの開催につなげる。

地域の前向きな動きを後押しして、住民主体によるチャレンジショップの開催につなげる。
「いこいの里」活動ビジョンの周知による、理解者や協力者が自然に集まる体制づくり。

Co、行政の動き　：　④主体的活動展開

【花壇整備×チャレンジショップ】
・大鍋串刺しおでん。（住民のお手伝いでおにぎりとゆず蒸しパンも提供）
・役場職員の連絡網でチャレンジショップと北部地区の活動 PR につながる。
・外部からの問い合わせには、「いこいの里」でできること・できないことのイメージを伝える。先方からの内容をみんなで共有し、意思の確認や実行する場合の方法について相談。

地域の動き

・住民によるチャレンジショップへの出店や主催は難しいが、定期的に出店してくれる人の補助で、蒸しパン提供など積極的な声が挙がり始めた。
・各々が関われる分野で、適材適所な役割分担ができつつある。
・「山カフェの視察に行きたい」と、リーダー自らが視察先情報を調べて提案。
・「いこいの里」のステッカーを用意して、チャレンジショップのテイクアウトなどへの活用を提案。
・リーダーは、今後も集落活動に時間と労力を費やす方向で考えている。
・北部地区自体の住民は少ないが親族の数と点在地は多いので、知っている様々な情報を共有してくれる。

【成果】
・事業をスタートして、拠点を用意することで、協力しあう体制になった。
・外部協力者の積極的な関わりによって、住民からも主体的な活動参加の声が増えてきつつある。

▶▶ 取組のプロセスポイント　無理のない活動目標から広がる地域活動展開

専門家からの助言
この先10年間で大きな課題となることが明白な「食事の確保」などへの対応の検討が必要では。

活動開始当初

日常の延長で無理なく実施可能な活動を目標に設定。事業は自走に向けた仕組みの構築段階を補助してもらうためと再認識＆周知。

ゆず作業に従事しない外部からの応援者による援助が必要。

5ヶ月経過

安心安全な飲食提供の仕組化と継続可能な運営方法。
・ゆずが特産品の地区にとって、収穫時期は食事も簡易なものとなりがちで、食事の楽しみすら取れない状況。
・翌年度の収穫時期に対策が取れないか検討。
→まずはお試し企画「三月菜（高菜）おにぎり」を実施。
→外部協力者との連携を考え、キーパーソンに確認するなど情報収集。

専門家からの助言
収穫体験・田舎暮らし体験などは、地域の人だけで全て行う必要はない。地域の人と体験する人のつなぎ役を、関係人口の中からできる人に手伝ってもらえばいい。また、地域の人で役割を分けて負担を小さくしていく。いろいろな人の「関わりしろ」を作つくることが大事。

1年経過

飲食店営業許可認定により、安心安全な環境整備。

1年4ヶ月経過

住民が動けない時期の外部協力者による支援。
「農家さんが作業に集中できるように」、「お手伝いの人の分まで用意するご飯作業の負担が減るように」と、集落外（加茂地区※実家が久江ノ上、平鍋地区、其々定年退職者）が出店協力。

2年経過

市町村・Co から一言

・話し合いは住民が集まるところに出向いていく。「飲み会を開いて仲良くなる」のステップがなくとも、共通ビジョンが描けて信用が集まれば少しずつ小さく進化実現は可能!
・無理なく持続可能なやり方をゆるく始め、小さな成功体験を繰り返す。

専門家の担当委員から一言

活発な議論を重ね、将来構想を練ってきたが、その具現化と人材育成が課題であった例。地域の将来像を、「ビジョンマップ」として示したことで住民の共通認識が拡がり、実践の推進力となっている。新たに整備した拠点で、試験的な実践を促している仕組にも注目。

大月町

樫ノ浦・西泊地区

（姫ノ井集落活動センター周辺）

【集落の現状】

・世 帯 数	： 148 世帯
・人　　口	： 251 人
・高齢化率	： 61.3%
・事業主体となる団体	： なし
・地域活動の拠点	： 地区集会所

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・地域間連携への伴走支援
・希望人材像：地域に寄り添える人材、地域を知っている人材

・・ 対象集落の特徴

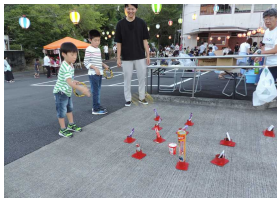
【特徴】
・姫ノ井集落活動センター「姫の里」（以下、姫の里と称する。）の隣にある地区。
・各地区では、自治会による定例会が開催されているが、高齢化や担い手不足により地域活動は衰退傾向。
・地区集会所が津波浸水区域内であり、住民が安心して集える交流の場がない。

【課題】
・生活環境の不便解消（買い物方法や移動手段の確保）。
・単体で集落を維持していくことが困難な状況。

【これまでの取組】
・地域団体の活動は、住民が中心となり、集落内でのみ実施している。

・・ 対象集落を選定した理由

・高齢化や人口減少により、住民の暮らしの維持が難しくなっている状況。
・地区単体ではなく地区の連携を図り、地域活性化を試みる必要がある為、姫の里と隣接した樫ノ浦地区、西泊地区の選定に至った。



事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①姫の里「再編委員会」が立ち上がり活動の見直し、組織の見直しが行われた。
②「姫の里便り」を両地区に配布し、姫の里のモーニングやランチ、体操教室などに参加し、地域を越えた交流がはじまった。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	Co 人件費

・・ 成果

・「姫の里便り」「姫の里便り（地区外版）」の発信により、姫の里と樫ノ浦地区、西泊地区それぞれのやりとりが生まれた。
→ランチ＋α（お弁当）の販売にむけて小さくスタートすることを検討。

	活動開始　～　3ヶ月	4ヶ月　～　12ヶ月
ポイント！	・・ Point01 **対象地区と姫の里の活動状況を確認。** 樫ノ浦地区、西泊地区と姫の里の連携を進め、集落活動センターを中心とした活性化につなげようと考え、まずは各地区の活動状況確認を行った。	・・ Point02 **第三者（専門家）から地区への提案により、姫の里「再編委員会」が立ち上がる** 専門家から地区への提案後、間をおかずに県からも地区に提案、スケジュール調整を行い、実行に向けて行政が併走。 ※町と地区は距離が近いため、**第三者が入り提案することで地区が動き始めた。**
Co・行政・地域の動き	**行政の動き**　：①状況を確認 ・コロナ禍の影響もあり、姫の里の活動が失速。まずは姫の里の活性化が必要と考え、活動を再開する方向で姫の里と協議開始。 ※姫の里の活動の再開と同じタイミングで樫ノ浦地区、西泊地区を含む周辺地区が、活性化に向けて町と連携し動き出していた。 ・姫の里と町で、具体的な今後の方向性について協議を始める。 ※この時点で Co は未着任	**行政などの動き**　：②協議を開始 ・4ヶ月後：専門家が地区を訪問し、町も含め姫の里との協議を実施。 ＜専門家からの提案＞ **＊事業計画の見直し、組織の再編。** **＊組織を見直すための委員会を立ち上げ。** （配食サービスや洗濯サービスなども提案） ・6ヶ月半後：県と町と姫の里が協議。 **＊姫の里設置までの経緯や立地条件、専門家の提案を踏まえ、今後の活動について確認。** （見直し委員会の立ち上げ時期を確認） →Co を配置し、周辺地区の巻き込みを試みることとなった。
	地域の動き ・姫の里設置当初の計画通りに活動ができていない状況。（唯一活動していた部会もコロナ禍で活動を休止） ※当初の活動計画はハードルが高い。 →姫の里周辺地区（小才角地区、樫ノ浦地区、西泊地区など）が連携した活動は存在しなかった。	**地域の動き** ・専門家委員との協議を経て、姫の里の今後の運営などに関する協議がスタート。 ・7ヶ月半後：**姫の里再編委員会を立ち上げ。** →Co の人選がスタート。 →再編委員会で、送迎・買い物支援事業・組織の体制見直しについて協議。
成果や見えてきた課題	【課題】 ・組織やメンバーの固定化により、地域内の他の住民に参加してもらうまでに至っていない。 ・部会メンバーは現状ボランティアで活動しており、参加の呼びかけが難しい。 ・若い世代を地域活動に参加してもらう方法が見つからない。	【成果】 ・専門家からの提案により、組織に動きが生まれ、姫の里の雰囲気も少しずつ変わってきた。 ・姫の里に Co を置き、周辺地域の核となる集落活動センターとして動き出す雰囲気も出てきた。 【課題】 まだまだボランティア意識が強い。

12ヶ月　～　17ヶ月

・・　Point03
情報発信に取り組んだことで住民の要望に応えることができた。

広報誌「姫の里便り」を発行し、姫の里の活動状況や新しい Co を地域に知ってもらった。

Co、行政の動き　：　③活動を知らせる

・12 ヶ月後、Co が2名着任。
・役場のサポートも受けながら、Co が「姫の里便り」を発行し、姫の里の活動に加え、Co 紹介などの情報を姫ノ井地区へ周知。併せて住民の意見・要望の募集も行った。

・姫の里を様々な世代が活用してもらえるよう、町役場内の部署の垣根を越え、福祉部署との連携を図り始めた。
→R6 からファミリーサポートセンター（ファミサポ）の実施場所として姫の里を活用することが決まり、7 月の納涼祭でファミサポの PR を実施。

地域の動き

・「姫の里便り」による住民からの要望によりアルミ缶の回収や小さなコンビニ（雑貨販売）を開始。
・ファミサポ側からの告知もあり、姫の里納涼祭に地域から親子など多くの人が訪れた。

【成果】
・Co が着任し、姫ノ井地区へ情報発信することで地区の要望（アルミ缶の回収や小さなコンビニ）が活動につながり、見える動きが出てきた。
・ファミサポ活用により、子育て世代が集える場所と認識されるようになった。

18ヶ月～

・・　Point04
Co が住民に認知されてきた。
→地域の求めるものの深掘り＋「新たな人材」を発掘。

「姫の里便り」をきっかけに、地域の方から Co に声をかけてもらえるようになった。
次のステップとして、「地域が姫の里に何を求めているか」などのヒアリングや、新たな人材発掘を検討。

Co、行政の動き　：　④主体的活動展開

・ヒアリングだけで終らないような工夫を検討した。
・新たな人材を発掘するために、地区内外へ声かけを行った。
・樫ノ浦地区、西泊地区の人に姫の里の活動を知ってもらうにはどうしたいいかを考え、「姫の里便り（**地区外版**）」を作成、配布。
・次年度はランチに加え、まずは単発のイベントとして新たにお弁当作りの実施について、姫の里へ投げかけた。
→姫の里にて前向きに検討される事となった。

地域の動き

・「姫の里便り（地区外版）」を配布したことで、集落活動センターのランチやモーニングなどに樫ノ浦地区、西泊地区などの人の来店が増加した。
・「良い夫婦の日」に夫婦でランチに来た方へのプレゼントを初めて実施。
→好評により、次はバレンタイン企画へと発展。

【成果】
・「姫の里便り」により情報発信ができたことで、姫ノ井地区と樫西地区の間で双方向のやりとりが生まれた。
・地域からも意見が出始めた。
→ランチ＋α（お弁当）の販売にむけて小さくスタートすることを検討。

▶▶ 取組のプロセスポイント　町役場内の部署を飛び越えた連携により、幅広い世代が拠点を利用

活動開始当初

現状の活動は、拠点施設での月2回のランチ開催となっており、活動が乏しい。また周辺地区との関わりも無い状況。
＜役場の想い＞
＊姫の里の周辺地区を含めた活性化が必要。
＊拠点施設が開いている日を増やし、人が集える場にしたい。

専門家からの助言
ランチだけでなく、配食、お弁当作りを行うことで、販売先が増え、見守りにもつながる。

姫の里を地域の集える場にしたい！

1年経過

第三者からの提案、町の伴走支援。
　第三者（専門家、県）からの視点を踏まえた協議・意見交換を実施。
→姫の里再編委員会が立ち上がり、協議には町が必ず入り、会議の運営の支援、提案を行う。
→若い方が部会長になるなど、姫の里自体の雰囲気が少しずつ変わり始める。

Coが2名着任

町職員が常に地区の話し合いに参加し、地区の状況や想いを踏まえ提案をした。

部署の垣根をこえて事業と連携することで、利用者層や告知先の拡大につながった。

姫の里の状況を踏まえ提案

福祉部署との連携で、新たな世代の活用。
　町職員が福祉部署に働きかけ、R6 からファミリーサポートセンター（ファミサポ）の実施場所として姫の里を活用することが決まる。
→ファミサポからの告知により、子育て世代による姫の里の活用につながる。
→姫の里にて赤ちゃん相談会実施、参加親子を対象にしたランチ会実施

2年経過

「姫の里便り」の発行。
「姫の里便り」で、意見や要望を募集。
→アルミ缶の回収や小さなコンビニ（雑貨販売）を開始。
→ランチの利用者が増える。
・次年度に向けて、ランチだけでなく、**お弁当の実施**を姫の里に提案。
→姫の里で前向きに検討。

市町村・Co から一言

Co配置後は、集落活動センターの活動を知ってもらい、集落活動センター構成集落以外の地域から来てもらうことに重点をおいています。月1回の姫の里便りを発行し、集落活動センターの活動を知ってもらい、各地区に足を運んで地区の現状を把握していく、そんな活動を心がけています。

専門家の担当委員から一言

中心人物が責任感を持ってがんばる一方、部会制度が形骸化し、担い手の広がりを欠くことで機能不全に陥っていた地域が、組織再編を契機に新たな担い手を得て、動き始めた事例。組織再編のための協議に町が必ず参加し、会議運営の支援や提案を行った点に注目。

2-2　令和５年度　対象集落一覧

市町村	モデル地区
越知町	明治東部地区 （⇒P.57）
仁淀川町	別枝地区 （⇒P.59）
土佐市	宇佐地区 （⇒P.61）
安芸市	奈比賀地区 （⇒P.63）

越知町 明治東部地区（５集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	:100 世帯
・人　　口	:171 人
・高齢化率	:63.8%
・事業主体となる団体	:なし
・地域活動の拠点	:なし

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：地域の現状把握と既存の地域活動・新たな活動への伴走支援
・希望人材像：地域に寄り添える人材、地域を知っている人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
5集落（片岡、谷ノ内、黒瀬、宮ヶ奈路、南片岡）で構成されており、主な産業は農業で山椒や文旦を作っている。現状で、住民同士の交流はある。

【課題】
神祭などの活動が縮小、簡素化傾向にあり、危機感は高いが、リーダーや地域活動に携れる人の高齢化が進み、新しい取組が難しい。

【これまでの取組】
・片岡集落のイベントとして100年以上続く盆踊りが開催されている。2年前に記録を残すために保存会を立ち上げた。
・谷ノ内集落は「タケノコ寿司」を作る文化がある。

・・ 対象集落を選定した理由

盆踊りなど伝統文化が残り、今もなお地域住民が主体となって行事を実行している集落がある。また、地域おこし協力隊卒業者が定住している集落も存在し、事業を行う素地がある。高齢化率は高い状況であるが、新たな風と既存の文化を融合させ、交流・関係人口拡大を図ることで地域の活性化、担い手育成、集落の維持・継続につなげていくことを目指す。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

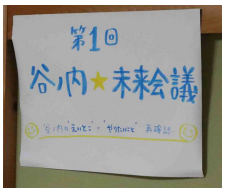
①地域便り「明治東部集落通信　小鮎だより」発行。
②茶園堂体操。
③集落での話し合いの場づくり「谷ノ内☆未来会議」。
④休校活用「土めぐるまつり」開催。
⑤空き家バンク登録推進。

・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	Co 人件費、公用車燃料・維持管理費、視察研修費

・・ 成果

①他の地域の区長から「うちでも未来会議を行いたいという」声が出てきた。
②体操を始めたことで、参加者から「公民館活動がなくなっているが、昔のようにまた集まる機会を作ってほしい」という声が出てきた。
③空き家バンクに1件登録でき、若い世代の入居が決定。

	活動開始　～　2ヶ月	3ヶ月　～
ポイント!	・・ Point01 Co を地域の人に知ってもらう。 まずはCo(集落支援員)が地域に配属されたことを知ってもらう。併せて、Co に、地域の特徴を知ってもらう。	・・ Point02 地域の未来をみんなで考える環境づくり。 「地域の未来をみんなで考える環境づくり」話し合いは、集落の人が集まりやすい時期(農繁期以外)や時間を事前に調査し日時を設定。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き：** ①地域とつながる ・区長ヒアリング資料の作成。 ・「地域だより」を作成。(自己紹介と集落での催し、活動を紹介し共有するモノづくり) ・地域巡回しながら会った人と会話。 ・各集落の住民の住んでいる場所や名前を知る。 ・住民のニーズを把握。 ・空き家の情報収集。	**Co、行政の動き：** ②活動を展開 ・神祭や地域のコスモス畑の整備など地域行事に積極的に参加。 ・地域の人も多く集まる山椒の収穫のお手伝い。 ・住民のニーズに沿った取組の実施。 →スマホ教室開催 茶園堂体操実施(月2回実施) ・「地域だより」で、地区内の取組を共有。 ・人の集まりやすい集落で住民向け WS「谷ノ内☆未来会議」実施。 ・WS に来られない人もいたので、谷ノ内集落にアンケートを実施。 ・地域だよりで WS の内容を取り扱う。
	地域の動き ・「地域だより」の内容を話題に Co に話しかけるようになった。 ・地域巡回をしていても Co の名前を呼んでくれる人が増えた。 ・「困ったことだらけだけど仕方ない」、「希望がない」という声があった。	**地域の動き** ・集まる環境をつくることで「スマホ教室を、再度開催してほしい」と要望があった。 ・他の集落の区長から、未来会議を「うちでもやってほしい」と要望があった。 
成果や見えてきた課題	【成果】 「地域だより」の作成や地域巡回により、Co の存在を地域に知ってもらえた。 【課題】 住民の方は他の地域の人に何かお願いするのは申し訳ないと考えており、それらも踏まえて、「何かやってほしいことは特にない」と言われてしまうことが多かった。	【成果】 ・住民のニーズに沿った取組を実施し、日々顔を合わすことで、住民との距離感が少し縮まったと感じる。 ・色んな面が見え始めて5つの集落全体を同時に動かすのは難しいと感じる。一歩ずつ動いていけば良いと実感した。

仁淀川町 別枝地区（１０集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	：58 世帯
・人　　口	：76 人
・高齢化率	：84.2%
・事業主体となる団体	：秋葉まつりの里・未来会議
・地域活動の拠点	：なし

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
地域おこし協力隊

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション ： 地域の活性化・特産品開発
・希望人材像 ： コミュニケーション力や創造力、発信力に優れ、関係機関や地域住民との信頼関係を築ける人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
自治活動、複数の法人、任意団体があり、地域活性化の活動を展開している。地区の有志で設立した組織「秋葉まつりの里・未来会議」があり、既存の法人や団体などと連携して活動している。

【課題】
人口・世帯数の減、農業所得減、耕作放棄地増、1人暮らしの高齢者が多い。地域資源活用。

【これまでの取組】
「秋葉まつりの里・未来会議」では、課題の洗い出しや活性化に向けた取組を実施。地域資源を活用したイベント開催や、地域特産品セットで販売する「別枝ギフト」、地域での茶園管理活動資金を募る出資者制度「パトロン会」を創設。

・・ 対象集落を選定した理由

別枝地域は、住民自らが集落消滅の危機感を持っており、地域の有志で「秋葉まつりの里・未来会議」を設立し地域活性化の活動に取り組んでいたことから、町内でのモデル的地域になると想定し選定。また、現在のCoである地域おこし協力隊が、既に別枝地域の活性化に関わっていたことも事業を進めるうえでのメリットと考えた。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

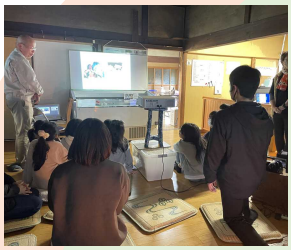
① 「秋葉まつりの里・未来会議」の事務所開所。
② 「別枝新聞」の発行。
③ 外部講師を招いての講演会。（地区外からの参加者多数）

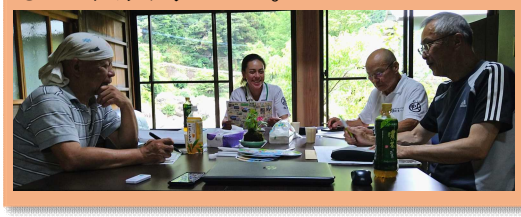
・・・ 補助金の主な活用内容

活動経費	Co 人件費、車両リース、燃料代、空き家活用清掃・管理委託、デザイン作成、講師謝金、研修費
備品・消耗品	事務所内備品、コピー用紙など消耗品、空き家活用備品・消耗品　など

・・ 成果

①既に住民主体で活動を行っているが、本事業で高齢者支援や空き家による定住促進など、新たな事業にも積極的に取り組んでいる。
②別枝地域外の住民との交流も希望しており、活動の広がりが期待できる。



	活動開始　～　4ヶ月	5ヶ月　～
ポイント!	・・ Point01 **地区組織の活動拠点である事務所の設営。** 空き家を活用し、住民が改修を行い、補助金で備品などを準備。7月に事務所が開所し、本格的に事業に取り組む準備ができた。	・・ Point02 **先進地視察や講演会などにより住民のモチベーション UP。** 夏のイベント先進地視察・講演会の開催などを実施。講演会では地域外からの参加者も多く、地区の活動に興味を持ってもらい住民のモチベーションがさらに上がった。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**　：　①地域を知る ・地区との事業の確認。既存の組織があり、事業開始前から町とのかかわりがあったため、スムーズにスタートできた。 ・町担当者とCoが組織の月1回の定例会に出席。また、事業開始にあたり、必要に応じて組織との話し合いを実施。 ・Coは、事務所の改修作業などにも参加した。	**Co、行政の動き**　：　②活動に関わる ・定例会への出席と、必要に応じて組織との話し合いを持った。Coは頻繁に事務所へ出向き、イベントなどの企画、支援などに携わる。 ・活動開始4ヶ月後には、地域に移住した方が集落支援員となり、Coとともに組織の支援を実施する。新たな事業への取組や、次年度に向けた事業計画などを支援。
	地域の動き ・地域の既存事業（イベントなど）はどれも盛況であった。 ・交流人口・関係人口とも増加傾向。 ・地域が活動するための拠点が必要で、タイミング良く空き家が発見されたことから、拠点として備品や消耗品を整備。	**地域の動き** ・地区の声から高齢者の買い物支援の仕組みづくりや空き家活用に取り組む。 ・事業開始から7ヶ月後に組織主催の講演会とパネルディスカッションを開催。 →地域外にも告知し、予想外に約100人の大勢の参加があった。地域の活動内容も紹介でき、各方面から興味を持ってもらった。
成果や見えてきた課題	【成果】 組織のリーダー3名の頑張りが素晴らしく、活動が活発であったため、事業を始めるには入りやすかった。 	【成果】 講演会では地域外からの参加も多く住民のモチベーションUPにつながった。 【課題】 ・取組への住民参加は一定あるものの、まだ買い物支援の利用に遠慮があるなど、事業の理解には十分な説明が必要。 ・地域外の方への協力依頼の検討も必要。

土佐市 宇佐地区（４集落）

【集落の現状】
- ・世 帯 数　：2,142 世帯
- ・人　　口　：3,924 人
- ・高齢化率　：48.9%
- ・事業主体となる団体：地区内に様々な既存団体あり
- ・地域活動の拠点　：USA くろしおセンターなど

・・ Co の紹介

【肩書き】
Co

【雇用形態】
集落支援員

【募集時のミッション・希望人材像】
- ・ミッション：地域の課題の把握や住民同士の話し合いを促進し、住民主体の活動を支援。
- ・希望人材像：特になし

・・ 対象集落の特徴

【特徴】

市内の各地区の中で、高齢化率（48.9%）が一番高い。古くからの漁業基地はマリンスポットとしても注目されており、近年では、南海トラフ地震よる防災対策を実施している。

【課題】

人口減少と少子高齢化が顕著。

【これまでの取組】

宇佐土曜市（土曜市組合）、宇佐大鍋まつり、宇佐港まつりを開催。その他、神祭など、イベントが盛んな地域。・特に商工会宇佐支部は、市外のイベントにも出店しPRを行っている。

・・ 対象集落を選定した理由

これまで事業を活用したことがない地区で、人口減少、高齢化によってお祭りの継続など、地域活動自体が難しくなっている状況にある。宇佐保育園が統合により宇佐地区から無くなることとなり、町が寂れるなどの声があがっている。宇佐地区では平成7年3月にまちづくり計画を策定しており、そのリニューアル版を作成するにあたり本地区を選定。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

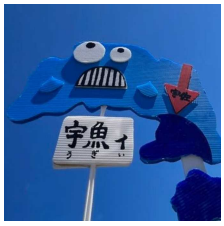
①まちづくりに関する講演会。
②WSの開催。
③地域と一緒に取り組む子ども食堂の開催。

・・ 成果

①地域の課題や将来に向けての取組について世代を超えて話し合う場ができた。
②子ども食堂への関心が高まった。

・・・ 補助金の主な活用内容

備品・消耗品	WS消耗品費 子ども食堂のぼり作成費　など

	活動開始　～　6ヶ月	7ヶ月　～　9ヶ月
ポイント！	・・ Point01 地域の課題を身近に感じ、地域でできることからはじめる。 市役所主催で高知大学の先生による「宇佐まちづくり講演会」を実施し、その後のWSにつながるよう、地域でまちづくりを始めるきっかけとした。	・・ Point02 Co が着任。Co の存在を知ってもらう活動を開始。 Coが毎日現地に向かい、人と出会ったことをもとにSNSで発信。 →住民間で徐々にCoの存在が認知され、「こどもエンゲキ会」にも出演。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き：　①話し合いを開始** ・活動開始の取組として講演会を活動開始の4月に開催。 ・住民参加型WSの定期的開催。（活動開始3ヶ月後に一般編、その翌月に学生編、商工会・PTA編を開催） 	**Co、行政の動き：　②活動を周知** ・活動開始から7ヶ月後にCo着任。地域の人にCoのことを知ってもらうよう頻繁に地域を訪れて取材、聞き取りをもとにSNS発信。（Coが作成の非公式キャラクター「宇魚（うぎ）ィちゃん」によりPR） ・同月に子ども食堂開催。 ・WS全体編開催。（活動開始から8ヶ月後） ・活動開始から9ヶ月後に「こどもエンゲキ会」開催（Co出演）。 
	地域の動き ・講演会、WSへの参加。 ・WSでは「子ども」に関する声があり、子ども食堂をまちづくりの一環として、多世代で盛り上げようとする動きがでてきた。	**地域の動き** ・Coの存在を知った方から、その知り合いの方へと紹介などで、人とのつながりの輪が広がっている。 ・子ども食堂、こどもエンゲキ会開催。
成果や見えてきた課題	【成果】 ・課題の洗い出しを行う中で、「地域でできること」、「行政が行うこと」の具体的な仕分けができた。 ・WSでの声を踏まえ住民が実施する子ども食堂を、事業として実施することとなった。 【課題】 当初はWSへの参加年代に偏りがあり、学生やその親世代の参加が少なかった。	【成果】 ・Coが毎日地域へ足を運ぶことで、開催される行事へのCo参加依頼の声がかかるようになった。 ・住民で「すぐにできることから実施」しようという雰囲気が醸成。

安芸市 奈比賀地区（３集落）

【集落の現状】

・世 帯 数	：51世帯
・人　　口	：91人
・高齢化率	：68.0%
・事業主体となる団体	：自主的な集落活動あり
・地域活動の拠点	：公民館

・・ Co の紹介

【肩書き】
地域 Co
【雇用形態】
地域おこし協力隊

【募集時のミッション・希望人材像】
・ミッション：移住、中山間地域の支援
・希望人材像：協力隊の役割や活動を理解し、意欲・熱意をもって、地域の方と向き合い、課題解決に取り組める人材

・・ 対象集落の特徴

【特徴】
70代以上の地元住民を中心に地域活動は活発であったが、コロナの影響で活動が制限されていた。令和5年度から、従来のイベント復活やパソコン教室立上げなど、活気を取り戻そうとしている。

【課題】
世代間交流が少ない、集落の取組の中心が70代以上の高齢者であり、参加する人が限定的で集落外に住む出身者への情報共有がない。

【これまでの取組】
・70代以上の地元住民を中心に「10円カフェ」「100円横丁」、季節ごとの祭礼などを実施。
・地域課題解決を図る「まちづくり懇談会」を開催。市役所と高知県立大学が連携して、「奈比賀ナビ」や「奈比賀文化史」を作成。

・・ 対象集落を選定した理由

・従来から集落活動に積極的な地域だったが、コロナ禍での活動の制限により、中心的な住民が活動意欲を失っている状況になっていた。
・市街地からも近く、施策によっては関係人口増加を見込めることから、本地区を選定。

事業実施後

・・ 事業実施により始まった主な活動

①若手住民（30～50代）の集まり。（飲み会、BBQなど）
②ふれあい学級と地域住民が一緒にﾁｭｰﾘｯﾌﾟの植栽を実施。
③Co作成の地域新聞「ナビカのこと」発行。
④地域住民が更新するブログ「ナビカのこと」の開始。
⑤集落の生活をテーマにした写真展を開催。

・・・ 補助金の主な活用内容

備品・消耗品	PC、プロジェクター、運動会景品、小さなチューリップ祭り開催（球根）

・・ 成果

①30～50代の若手が、これからの暮らしについて話し合う場が増えた。LINEグループで情報共有がしやすくなった。
②世代交代の意識が芽生え、世代間交流も増えていることから、既存の集落活動を担う意識が向上している。
③県立大学生の協力もあり、地区民運動会を復活。ふれあい学級と合同で開催を成功させた。
④地域の古いビデオや写真を Co に提供いただけるようになった。

	活動開始　～　2ヶ月	3ヶ月　～
ポイント！	・・ Point01 Co が地域活動やイベントに積極的に参加し地区を知る。 住民の方が、現在と未来を踏まえて、どのような集落像を望んでいるのかをCoが確認。	・・ Point02 住民間の情報共有が事業の“肝”。情報共有と交流の機会増加を目指す。 専門家から、「ベテラン住民と、若手住民の話し合いの場は、無理して一緒にしなくても大丈夫。」という助言で気持ちが軽くなった。 地域との情報共有、若手住民との交流、ふれあい学級との連携などを推進。
Co・行政・地域の動き	**Co、行政の動き**：　①地域を知る ・「奈比賀文化史」をもとに既存の集落活動のカレンダーを作成し、実際に動いている集落活動を確認。 ・花見、「10 円カフェ」、「100 円横丁」への参加。（交流・自己紹介） ・「10 円カフェ」、「100 円横丁」、その他、季節ごとのイベントが地区内に知られていないことから、地域新聞「ナビカのこと」発行。（活動開始2ヶ月後から） ・神祭（絵馬提灯）の PR、手伝い。	**Co、行政の動き**：　②継続した取組への展開 ・地域新聞を各戸に配布する際に、なるべく住民の方と会話をした。また、若手住民と LINE グループを作成して、連絡をとりやすくした。 ・地区内の休校中の小学校にある適応指導教室「ふれあい学級」の先生方と話す機会を増やすように努めた。毎月1度開催される「野生塾」という市の子どもたち向けの WS にも参加。
	地域の動き ・Co に対して、公民館長が奈比賀地区を案内。 ・3月　花見。（桜・チューリップ） ・6月　神祭の開催。 ・安芸市と包括連携協定を締結している高知県立大学の生徒に6月の神祭に参加してもらい、神祭の開催を支援。 （高知県立大学の地域学実習のカリキュラムの中で実施）	**地域の動き** ・Co を軸に LINE 交換や準備を行い、若手住民のみでバーベキューを開催。 ・若手住民のミーティング。運動会開催の有無、補助金活用方法、Co と地区の活動について話合い。 ・初めて若手住民が中心となって運動会を開催。80 名ほどが参加。課題もみえたが、高齢者から喜びの声が聞かれた。
成果や見えてきた課題	【成果】 住民同士は仲がよく、協力的。明るい集落であり、市外在住の奈比賀出身者が定期的に帰ってきていることもわかった。 【課題】 ・一部の住民しか、集落活動に参加できておらず、情報共有が難しい。 ・公民館長は、集落活動に参加できていない住民がどのようなことを考えているか知りたいと、切実に考えている。	【成果】 ・積極的に若手が話し合いや、集落活動に顔を出してくれるようになった。 ・奈比賀地区における、小学校の存在の大きさを実感。 ・イベント開催でたくさんの笑顔をみることができ、住民の方の自信も見えた。 【課題】 小学校、公民館のバリアフリー化ができていないことがわかった。

3 小さな集落活性化事業の進め方

小さな集落活性化事業では、各地区で様々な取組みが始まっています。本章では、小さな集落活性化事業の進め方における一般的な手順を示しています。

集落の選定、Co の選定

・集落状況を踏まえ、事業を実施する集落を選定、Co を雇用

集落・組織との調整

・集落の状況を把握し、住民と制度概要や補助金内容などを共有、事業実施の合意を得る

話し合いの実施

・話し合いの進め方を検討
・活動の具体的な内容を検討
・活動の目的と方向を明確化
・中・長期の展望を検討

活動の実施

・集落の状況に合った実施方法を検討
・小さな活動を積み重ねる

3-1　集落の選定、Co の選定

まずは、小さな集落活性化事業に取り組む集落を選定します。

また、集落の候補をある程度市町村で決めておき、Co を選定し、Co が集落に入り、集落の状況を踏まえて事業を実施する集落を選定する方法もあります。

集落の選定については、これまで実施してきた市町村の状況を踏まえ、ポイントを以下のとおり整理しました。

※Co については「1．小さな集落活性化事業とは（P.6）」を参照

選定のポイント

- □既存の活動があり、今後さらなる展開を図っていきたいと考えている。
- □集落の活動に対して、住民が前向きに取り組む姿勢がある。
- □集落に課題があり、その解決に向けた検討や取組みがなされている。
- □集落に課題があり、市町村の中で支援の優先順位が高い。

先行地区の事例

室戸市（郷地区）の場合…

集落選定当時、主に観光に関連する分野で取組を行っていた「四十寺山桜美人の会」が、地域資源を活用した地区の活性化に関する取組を検討していた。それらの活動をさらに展開し、集落活性化につなげることを目的に選定した。（P.36）

四万十町（下津井集落）の場合…

町では令和３年度に「大正北部地域づくり基本構想」を策定していることから、大正地区を想定。また、大正中津川の「集落活動センターこだま」が活動をしているが、その周辺部の集落との連携や行政の支援が十分できていなかったことから、地域づくりの素地がある下津井集落を選定した。（P.20）

黒潮町（市野々川集落）の場合…

活動が活発な「釣りクラブ」がリーダー的存在となり、地域住民にまとまりがあった。このため佐賀地区の中山間地域の中から、特に地域活動が活発な地域として、市野々川地区を選定した。（P.28）

北川村（北部地区）の場合…

地域存続プランを策定するにあたり住民主体で集落再生に取組みを始めた北部地区をモデル地区として選定。ゆず栽培が盛んであったが、園地耕作者の高齢化、放棄園地等の課題解決等に取り組むこととした。（P.48）

3-2　集落・組織との調整

集落を選定した後は、小さな集落活性化事業への取組みについて、**まずは集落の状況を把握**する必要があります。次に住民と制度概要や補助金が活用できる内容などを共有し、集落の合意を得たうえで、事業を開始します。

なお、集落の状況によって説明する方や調整を図る団体なども違うことから、地域の状況をしっかりと把握したうえで、集落との調整を図ることが望まれます。

集落の状況の把握方法としては、市町村役場内での確認、集落の代表者へのヒアリングや会合・集まりへの参加、アンケート調査などがあります。

■集落の自治会がある

■既に活動している組織がある

➡ 集落代表、活動組織の代表など、関係者に話を聞きに行き、調整

集落に活動組織がない場合や自治会の会合内で事業の説明時間確保が難しい場合

➡ 個別に聞き取りを行う、地域の方が集まる場に顔を出すなど、まず関係性の構築に向けて活動

先行地区の事例

【集落の“人”や“活動”に毎日足を運んだ。（津野町）】

・地域とかかわり、「地域のやりたいこと」を見つけるために、既存の地域組織や地域の人材を訪ねる活動を実践。“住民が集まる場”を作るのではなく、地域の人を訪ねることにより、新たな関係性を構築できると共に、集落の魅力や活動、ニーズ、課題などを抽出できた。
（P.12、P.16）

【集落の人たちの行動パターンを把握。（北川村北部地区）】

・集落住民は専業のゆず農家が大半を占めるため、住民の生活動線やリズム（天気、時期、時間帯と場所）に違和感のない接触を試みるなど、工夫を図った。Co が集落から聞き取りした内容をこまめに行政担当者と共有し、必要に応じて協力関係となれそうな別組織への橋渡しや費用捻出のための補助金申請などの手続きを実施した。（P.48）

【若い世代が作成していた SNS を活用。（いの町上東地区）】

・役員会で若者 LINE グループのアイデアなどを情報共有。若者などの LINE グループ「上東を考え隊･発信し隊」を作り、気楽な意見交換と情報共有を開始。
・インスタグラム「お山の上東」を開設し、情報発信開始。
（P.40）

3-3　話し合いの実施

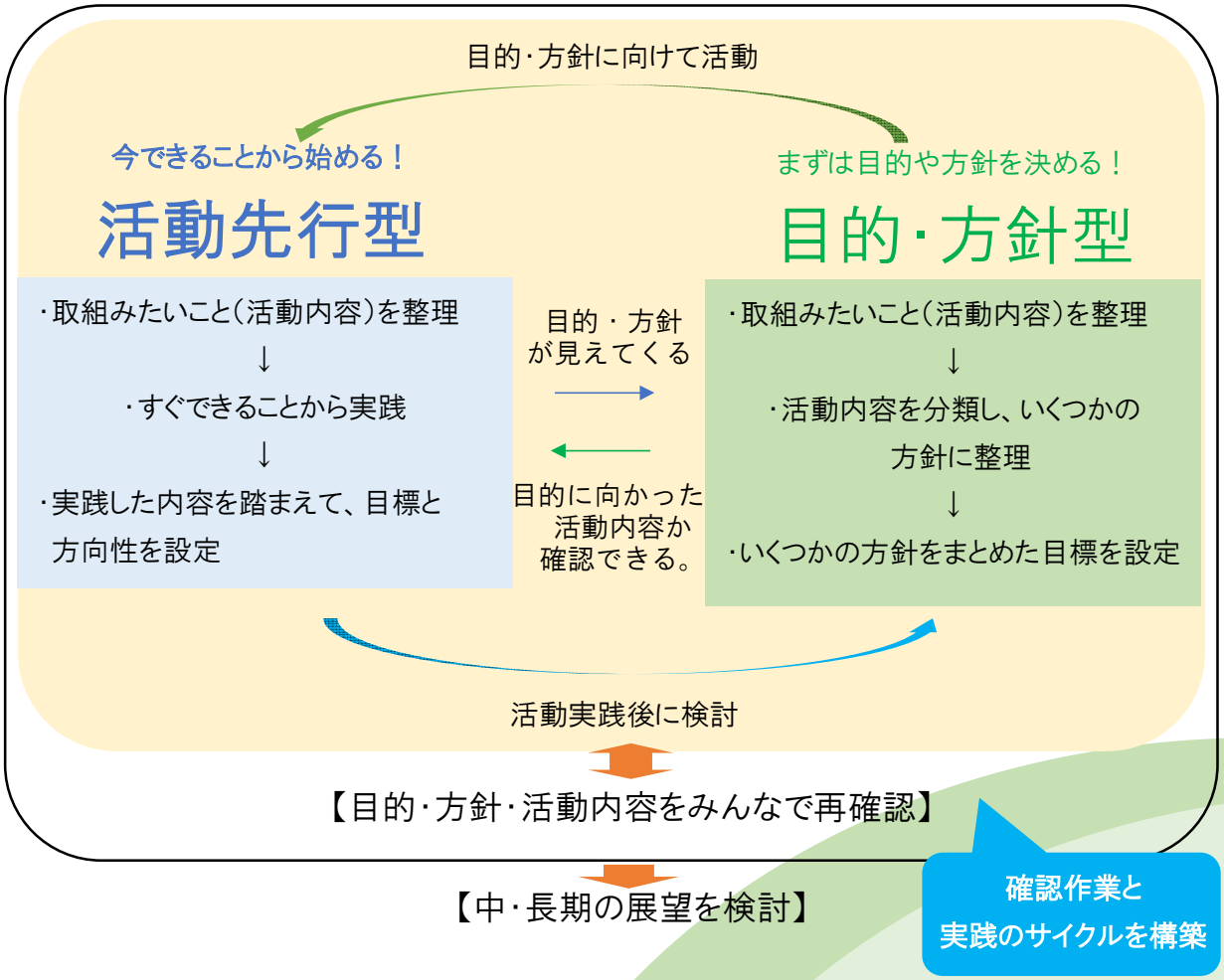
（1）話し合いの進め方

小さな集落活性化事業では、「いまできることから始めてみる」という考え方で行った事例が多いです。みんなで話し合いながら、計画に時間をかけすぎずすぐに取り組めることから実践することが小さな成功体験の積み重ねにつながります。

一方で、「まずは目的や方針を決めてから活動しよう」という動きも見られます。自分達が実践しようとしている活動が 「目標達成」に向けた取組みとして、方向性がずれていないかを確認することも大事です。

地域の実情に応じて「今できることから始める」（活動先行型）と「まずは目的や方針を決める」（目的・方針型）のどちらから検討を始めても問題がないと考えます。どちらから開始しても、活動や目的にズレが発生していないか、関係者で確認しながら、進めることが重要です。

【会議・WS など、話し合いの実施】



【目的・方針・活動内容をみんなで再確認】

【中・長期の展望を検討】

確認作業と
実践のサイクルを構築

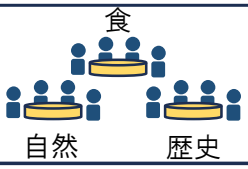
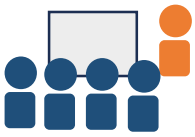
先行地区の事例

【できることに着手し、目的・方針を定めていく。（大月町樫ノ浦・西泊地区）】

・新型コロナウイルス感染症の影響を受け、失速していた活動に対し、今できることに着手しながら、将来的な目標を定めていった。（P.52）

（2）活動の具体的な内容の検討

集落での活動を検討する場合、「話し合い」を行うことが一般的です。「話し合い」の方法は色々な形があります。状況に応じた最適な形を考え、実施することがとても大事です。特に重要なのは、みんなが意見を出しやすい環境をつくることです。一般的な型にはまらず、参加者や話し合う内容によって自由な発想で検討してみてください。

委員会形式		議題を決め、それら内容について参加者が意見を出し合う形式。一般的には司会者と議事作成者が必要。
分科会形式		テーマ別で役割を決め、意見交換を図る形式。テーマ別で話した内容は、必ず全体で共有する必要がある。
勉強会形式		講師を招いて、みんなで学ぶ形式。テーマに応じて様々な方式が考えられる。 （授業形式、実践形式　など）
フィールドワーク		集落や施設などをみんなで歩きながら確認し、良いところや改善点を現場で話し合う形式。実際に現状を確認できるため、意識の共有が図りやすい。

【話し合いのルールをつくる】

会議の参加者は、年長者、若い世代、移住者などの立場や男女、年齢、居住地などの属性によって、様々な考え方を持っています。多様な立場・属性の参加者を上手くまとめていくには、「話し合いのルール」を作ることで、円滑な話し合いを実現します。

話し合いのルール例

抽出された意見を否定するのではなく、一度はみんなで考えてみる。	役割分担を明確にする。(司会・議事・とりまとめなど)	決まったことは、具体的に検討する。（５Ｗ２Ｈ）
賛否が分かれる意見は、意思決定の方針手順をみんなで話し合い決定。	“無理なく、続けられる”をこころがける。	決まったことは記録し、共有する。(情報発信方法も整理。)

先行地区の事例

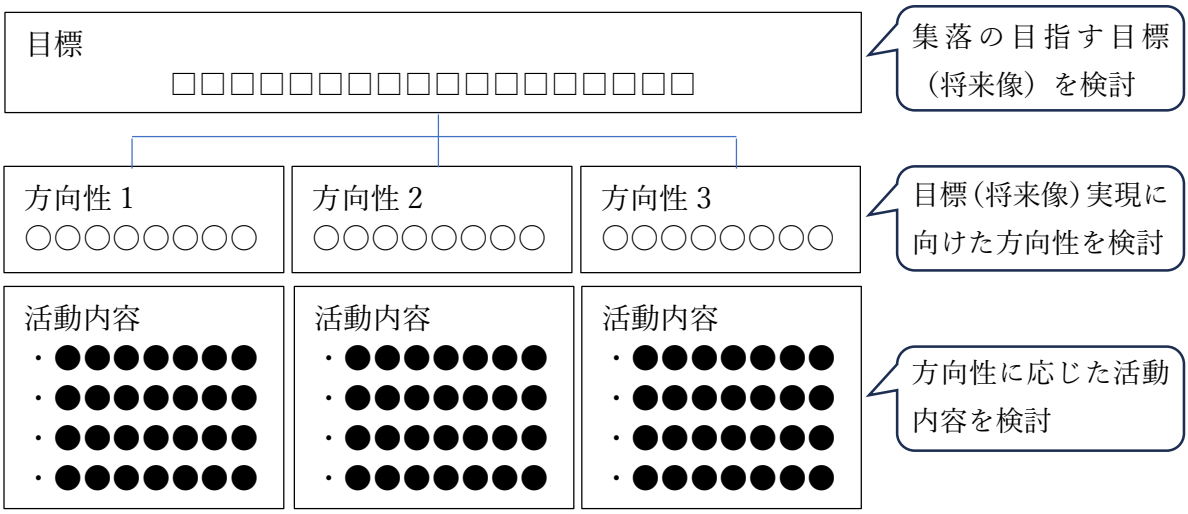
【Co に相談できる“場所づくり”。（南国市三和地区）】

・Co に相談しやすい場所づくりを行い、住民が抱える不安などへの対応を図ることで、地域活性化部会で意欲的な意見が抽出されるようになった。(P.44)

（３）活動の目的と方向の明確化

集落の活性化につながる取組みを進めるにあたっては、活動の目的と方向性を定めておくことが非常に重要です。集落全体で何を実践し、どういった目的に向かって活動をしていくかを関係者で話し合いましょう。

目的と方向性の整理方針



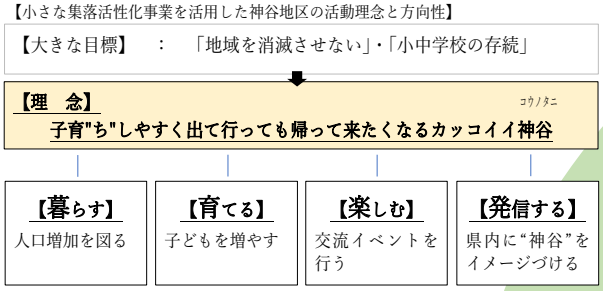
検討の流れは、集落によって異なりますが、例えば以下の３つの流れがあります。
①目標を設定し、方向性を決めて、活動内容に落とし込む。
②活動内容を話し合い、一定の分類を図りながら方向性を定め、目標を導き出す。
③各部会が既にある場合は、部会毎で１つ方向性を導き出し、活動内容を整理した上で、みんなで話し合い、全体的な目標を設定する。

上記においては、集落の良い点・資源、課題点などみんなで共有・把握し、自分達がどういった将来像に向かって活動しているのか、常に確認することが大切です。

先行地区の事例

【やりたいことから理念と方向性を整理（いの町神谷地区）】
みんなが考えるこれから“集落で取組みたいこと”を話し合いながら方向性を紐解き、活動理念と基本的な方向性を整理。（P.24）

【小さな集落活性化事業を活用した神谷地区の活動理念と方向性】



高知市内に働きに出ても、気持ちを切り替えられる**神谷地区の立地を活かす**。

保・小・中学校の連携で、子育てしやすく、楽しい地域を実現する！

自然、自慢できる暮らし、お祭りやイベント等、**今あるモノ・コトを活用**しよう。

空き家問題や交通の便等、**地域の課題をみんなで解決**していきたい。

地域と子どもを繋ぐ行事を行い、**子ども達に良い想い出**を作ってあげたい。

情報発信や交流イベントの開催で、**地域の中と外がつながる**きっかけを作る。

大人も子供も楽しめる、**住み続けたい、帰ってきたい神谷**を目指そう。

地域で地域の子供を育てることで、**子ども達を中心とした大人のつながり**を！

楽しく、明るい、**適度な田舎でのかっこいい田舎暮らし**を実現する。

朝・夕**挨拶のできる隣人**がおり、**帰ってきた時に知った顔**にあえる地区に！

地域と学校がコラボし、**スポーツや学業で成果を出せる学校**を目指す。

コンサート、芸術、海外旅行、仕事等**ここに住んでも苦むすことなく楽しめる**。

（4）中・長期の展望を検討

集落での活動が継続されていくためには、中・長期の展望を考えることも重要です。そのためには、“まずできること”を実践していき、小さな成功体験を積み重ね、その中で、集落で実現したい将来像を検討する方法が効果的です。

まずできること → 2年間の目標 → 集落の将来像

- まずできること：実施する活動において、“まずできること”を検討
- 2年間の目標：“まずできること”を実践し、小さな成功体験を積み重ねる
- 集落の将来像：活動を継続する中で、集落で実現したい将来像を検討

中・長期の展望イメージ

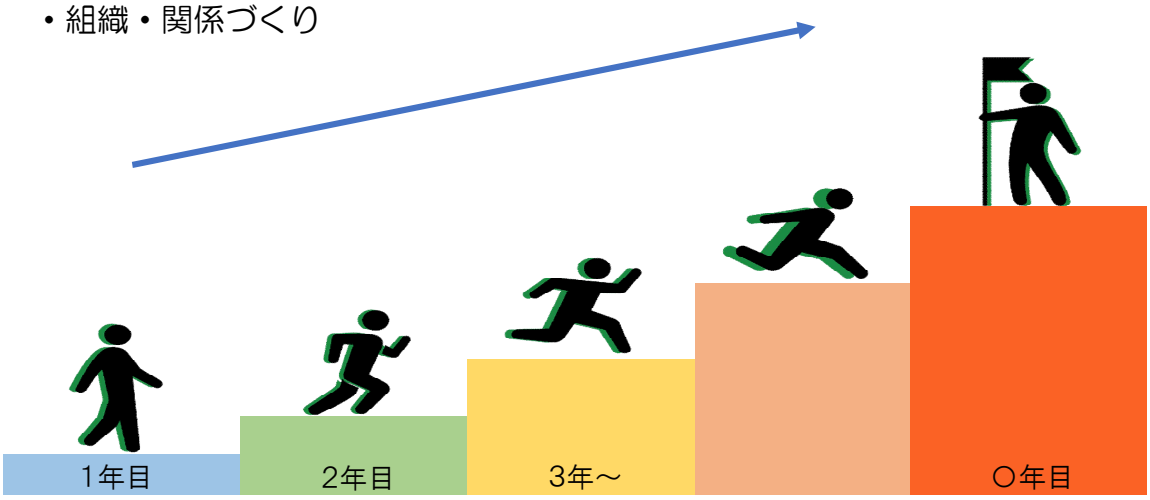
小さな集落活性化事業（モデル事業）

- “まずできること”の抽出
- 目標とそれを実現するための方針整理
- 組織・関係づくり

継続的な活動展開

- これまでの活動を活かす
- 継続的な話し合い
- 新たな展開（事業化や集落活動センター化など）

目標達成と新たな取組み



小さな成功体験の積み重ね！

大きな成功体験を実現

先行地区の事例

【活動した結果を元に、中・長期の展望を考える。（室戸市郷地区）】
地域で夏祭りを開催した経験を活かし、資金の確保、特産品開発などに取り組んだ。それら経験の積み重ねを活かし集落活動センターの開設を目指す。（P.36）

3-4　活動の実施（支援制度）

集落の活性化につながる取組み・活動の内容は、地域の課題によって様々です。それぞれの集落が、「話し合い」を重ね、それぞれの集落に合った進め方を選定します。
「今できることから始める」場合と、「中・長期の展望を検討したうえで始める」場合において、熟度や内容は異なってきますが、大がかりな準備や手間を要する活動でなくとも、小さな活動を積み重ね一歩ずつ目標に向かい活動を展開していくことが大事です。
以下に、各地区における活動の実施事例を紹介します。

活動の事例紹介

市町村名	地区名	活動･実践したこと	活動に至る目的や背景	参照ページ
津野町	1区新土居地区（三間川）	津野町内でのイベントに出店し、初めて販売活動を行った。	【Coから地区に提案】 Coが感じた地区の魅力を販売することで地区活動につなげることを提案し実施。	P.12
	10区高野地区（北川）	地域のお祭り「お洗慶さま七夕祭り」を復活させ、さらに仲間づくりにつなげる。	【地区からCoに相談】 地区から「お洗慶さま七夕祭り」の承継の相談がCoにあり、担い手、仲間を増やす取組として実施。	P.16
四万十町	下津井地区	町外在住の出身者に向けた「ふるさと便り」の発送。	【Coから地区に提案】 町外在住の出身者に対して、地域の活動を発信する「ふるさと便り」の発行をCo、町から地区に提案し、暮れ会の参加者から同意を得て実施。	P.20
いの町	神谷地区	「集いの場づくり」と地区情報の発信を目的としたパンフレットの作成に着手。	【アンケート結果を踏まえた地区からの発案】 「まずできること」に対し、アンケート結果等も踏まえながら、ワークショップ等関係者で調整を重ね、今後実施する方針。	P.24
黒潮町	市野々川地区	春企画「たけのこ堀りと発電所見学」や夏企画「流しそうめんと月を見る会」を開催。	【Coから地区に提案】 地区に足を運び、話を聞く中で、住民の意見や声をつなぐ企画として、Coがたたき台を考え提示。それら活動に付随する展開・予算も踏まえ実施。	P.28
	奥湊川地区	朱傘と縁台を点在させた新しい風景を創り、彼岸花を楽しむ会を開催。	【Coから地区に提案】 地区の人が大切にしている「風景」を生かすためにできることを、具体的に考えCoから提案。それら活動に付随する展開・予算も踏まえ実施。	P.32
室戸市	郷地区	将来的に集落活動センターとして配置する機能のお試しの場として、まずは地域の夏祭りを開催。	【地区で話し合いを重ね発案】 集落活動センターの開設を目標とし、「まずできること」として、地区から子供達を巻き込んだ夏祭りの開催の提案があり、実施。	P.36
いの町	上東地区	大豊町「どぶろく作り」の視察や東京都「生活工房ギャラリー」のかじがらワークショップと、上東の楮へぐり作業をLINEで結び交流。	【地区で話し合いを重ね発案】 「新たなことでなく、楽しく次の世代へつなげる工夫をしよう」という考えのもと、地区の話し合いにより提案	P.40
南国市	三和地区	三和の春祭りの開催。（ステージイベントやじゃんけん大会、ビンゴ大会、屋台など）	【地区から提案】 コロナ禍により地域でのイベントが４年間実施できておらず、「まずはやってみよう」との意見があがり実施。	P.44

市町村名	地区名	活動・実践したこと	活動に至る目的や背景	参照ページ
北川村	北部地区	地区外からのチャレンジショップへの出店によりお弁当やお惣菜、お菓子の販売を月2回定例化。 初の地元食堂「鮎寿司」の発売。	【Co、地区、地区外の協力により実施】 地域の特産品の繁忙期には食事すら楽しめる時間がないことから地区外の協力を得て課題解決に踏み出す活動として実施。 【Co、地区の話し合いのもと検討・実施】 地区ではボランティアの活動が主だったが、持続的な活動につながるよう時給1,000円を確保した販売を実現。	P.48
大月町	姫ノ井周辺	集落活動センターのランチやモーニングで、「姫の里便り（地区外版）」を配布。今後はランチに加え単発のイベントとして新たなお弁当作りを実施する方針。	【Coから地区に提案】 地区の要望を活動につなげ、見える化を図る動きとして、「集落活動センターを知ってもらう」ことや「新たな人材の発掘に向けた地区内外への声がけ」の方法をCoから地区に投げかけ、実施。	P.52

４　基礎から学べる地域づくりのヒント集

小さな集落活性化事業に取り組んだ集落からは、今後の事業の取組みにおける“重要なヒント”を多く学びました。本章では、それらをＱ&Ａ方式で整理しましたので、今後の事業活用の参考にしてください。

なお、★は「よくある質問」「ぜひ意識して取り組んでもらいたい」項目です。

＜注意点＞

・ここに掲載している質問及び回答事例は、小さな集落活性化事業における専門家会議や専門家による現地訪問などにおいて、個別ケースへの助言をベースに作成しています。このため、全ての事例にあてはまる答えとなっていない場合があります。
・また、各質問に関連する市町村及び地区のページ番号を記載していますが、質問に対する事例の記載がないものもあります。

集落・組織と調整する	質問１	・取り組みを検討するにあたっての地区へのアプローチ方法	
	質問２	・地区との距離感を縮める工夫	★
	質問３	・話し合いの切り口やきっかけづくり	★
	質問４	・地区に危機感がない	
	質問５	・地域課題へのアプローチ方法	
	質問６	・地区から課題がでてこないときの対処	
	質問７	・着任したばかりのＣｏの動き方	★
	質問８	・市町村職員の役割	★

集落・組織と調整する	質問 9	・集落活動センターやあったかふれあいセンターとの連携	
	質問 10	・Co の選定の仕方	
	質問 11	・地域課題と Co のマッチング	
	質問 12	・一部の人だけが動いている状況への対処	
	質問 13	・地区の活動に関わってくれる住民の洗い出し	
	質問 14	・学生との関わり	
	質問 15	・地区の隠れたキーパーソン（現場で動く人）を見つける方法	
	質問 16	・若い世代に協議や活動に参加してもらう方法	
	質問 17	・地区内の他団体との関わり方	
	質問 18	・住民ヒアリングの質問内容、問い方	
	質問 19	・地区への広報媒体の作成方法	
	質問 20	・Co が感じたことを住民と共有する方法	
	質問 21	・他の集落との連携	
話し合いの実施	質問 22	・WS の参加者、対象者の選定	
	質問 23	・WS の参加者を増やすための工夫	
	質問 24	・将来像に向けての話し合いの場づくりでのポイント、方向性	★
	質問 25	・地区住民との話し合いの進め方	
	質問 26	・会議の進め方	
	質問 27	・地区が話し合いに疲れている場合の対応	
	質問 28	・話し合いで決めた内容がいつの間にか変わっている場合の対処	★
	質問 29	・地区住民以外の参加者を増やす方法	
	質問 30	・WS で出た意見を実行していく方法	
	質問 31	・女性や若手のやりたいことができていない状況への対処	
	質問 32	・組織内で対立構造がある場合の対処	
	質問 33	・小さな話し合いを徐々に地区全体に広げていく方法	
	質問 34	・補助金ありきで話が進んでいってもよいか	★
	質問 35	・話し合いや活動記録の整理の仕方	

活動の具体的内容を検討	質問 36	・計画づくりから活動実施までの流れ	★
	質問 37	・産品を作って販売する計画を策定する方法	
	質問 38	・地区の情報発信の仕方	
	質問 39	・Co が感じたことを住民と共有する方法【20 再掲】	
	質問 40	・地区の出身者への働きかけ、アプローチの方法	
	質問 41	・U ターン者を増やす方法	
	質問 42	・活動するための人材を確保する方法	★
	質問 43	・活動の周知、新規メンバー獲得、出身者へのアプローチ方法	
活動の目的と方針を検討	質問 44	・活動の目的設定の仕方	
	質問 45	・達成できない目標などが出てきた場合の対処	
	質問 46	・初期のゴール設定の見直し方法	
	質問 47	・活動方針の整理	★
	質問 48	・活動に踏み切れない場合の対応	★
中長期の展望を検討	質問 49	・将来像を決める方法	
	質問 50	・長く続く企画、無理のない企画にする方法	
	質問 51	・組織の拡大などのタイミング	
	質問 52	・事業化に取り組むための視点	
	質問 53	・事業化する場合の地区の合意を取るアプローチ先、方法	
継続的な活動への取り組み	質問 54	・活動するための人材を確保する方法【42 再掲】	★
	質問 55	・外部人材を配置することの検討	
	質問 56	・リーダーの後継者がいない場合の対応	
	質問 57	・活動の周知、新規メンバー獲得、出身者へのアプローチ方法【43 再掲】	
	質問 58	・地区の盛り上げ方、落ち着かせ方、声がけの言葉の選び方	
	質問 59	・収穫時期以外の体験メニューを考える方法	
	質問 60	・役割分担の効果	
	質問 61	・話し合いや活動記録の整理の仕方【35 再掲】	

質問1

・これから取り組む活動の具体的な内容を検討するにあたり、地区へのアプローチの仕方を教えてください。

回答

地区代表者へのアプローチを図るとともに、キーパーソンなどが居る場合は、併せてアプローチを図っていく。

・基本的に、まずは地区代表へアプローチをかけていく方向で良い。
・市町村役場内で地区代表やキーパーソンの情報を持っていると思われる。まずはそこから情報を収集することも考えられる。
・もし、キーパーソンや活動組織が明確な場合は、そちらにも活動内容やアイデア出しなどの面でアプローチを図っておくことが大事。

質問2

・集落、組織と調整を進めるにあたって、距離感を縮めていく工夫はありますか。

回答

★

地区への顔出しなど、小さなことでも構わない。一緒にいる時間や寄り添う時間が大切。

・小さな集まり、話し合いへの参加から始めて、少しずつで構わないので、地区住民との関わりの場を大きくしていく。関係性を築いていけるように地区へ顔を出していくなど、小さな取り組みの積み重ねが大事。
・小規模の集落であれば、それぞれのご自宅に訪問をして気になることや困りごとを聞き出していくなども有効と考えられる。
・長野県飯田市の事例として、職員がプロジェクトを起こす際、「成功したことを考えて地区住民の背中にそっと身を隠すところまで考えて行うこと」との話があった。メディア取材の際に、コメントを求められることがあるが、Co が答えるのではなく、地区の会長さんなどに発言を促すことで、大きく風当たりが変わってくる。
・地区住民のご自宅に訪問する際、仏壇に手を合わせるなど、気遣いを持つことも大事な配慮である。

事例市町村）津野町（P.12、16）、四万十町（P.20）、黒潮町（P.28、32）、南国市（P.44）
北川村（P.48）

質問3

・地区への話し合いの切り口やきっかけはどのようにつくりますか。

回答

★

「地区に入る」、「何かの集まりに出ないといけない」のではなく、「1人１人に会いに行く」感覚を持つ。

・地区の動きだけでなく、もう少し人に焦点を当ててみるのも一つの方法である。
・１回の話し合いで全てを洗い出すのではなく、「次回の集まりでは～しよう！」といった内容につなげていくことが大事。

質問4

・地区に危機感や「自分ゴト」感が少ない場合、活動を始める中で「やらされている感」が生まれないか。

回答

事業の方針について、丁寧な説明を行っていかないといけない。

・危機感が弱いなかでの取り組みは「危機感を強める」又は「危機感以外でまとめる」方法が考えられる。
・事業について丁寧な説明を行い、内容を理解していただいた上で、イベントや話し合いへの積極的な参加を促し、実際に感じていただく。その中で、「自分ゴト」にしていくことが重要。
・みんなでやらなければできないことや困難となっていることを中心とする「将来形成型」や、地域の世話役を中心にする「おせっかい型」のパターンがある。
・話し合いについて、「いい加減、だいたい」をルール化することで住民が参加しやすくなる。（途中参加OK、時間が合えば参加などのルールをつくる）

質問5

・集落、住民から「やりたいこと」が出てこない場合など、地域課題へのアプローチ方法を教えてください。

回答

まずは“課題をつくる”“課題を抽出する”ことをやってみる。

・課題を細分化又は具体的な課題をつくっていけば解決の方向性が見つけられる。それぞれの“課題”が出てきたときはラッキーだと思いながら、地域と一緒に解決していくスタンスでよい。
・行政、Co のビジョンと地区のビジョンを、定期的に言葉にしてすり合わせることで、結果的に「～をどうにかしなければいけない」といった、Co の想いが地域の想いになり、自分をアピールしなくても地区が実施してくれることが一つの理想形である。思うことがあれば地区へ投げ掛けていくことが大事。

事例市町村）津野町（P.12、16）

質問6

・地区から課題がでてこないときはどうすればいいですか。

回答

「困りごと」と「不安ごと」を分けて聞いてみる。

・地区の将来像を語ってもらう。地区の将来像＝現在、地区ができていないことにもつながる。それらが地域課題として捉えられる。地区住民は、意外と地域全体を見ることがないため、Co が地区住民に対して、率直な感想や気になることを話すことで、改めて地区住民に地区の現状を見える化し、知って、感じてもらう。それをきっかけに聞き出すことができる。Co と地区住民双方の持つ困りごと、不安ごとをあぶりだし、「どのように拾っていくか」がポイントになる。
・また、「一緒に手伝いたい！」「仲間がほしい！」など関心、前向きな発言がでるように、やりたいことから話し合いをしていき、積み重ねをしていく。「楽しそう！」「やってみたい！」と思えるようなきっかけをつくることが大事。
・日常の暮らしの延長線上で地域課題を抽出することで、自分達の生活に直結する「学び」につなげられる。

事例市町村）津野町（P.12）

質問 7

・着任したばかりの Co に、いきなり調整をお願いするのは厳しいのではないでしょうか。

回答

★

地区内外の関係者に協力してもらい、Co を支えながら一緒に取り組んでいく。

・例えば、地域おこし協力隊 OB の方からアドバイスを受けて、連携して取り組んでいく方法も考えられる。
・Co に任せるのではなく、市町村職員が一体となって取り組んでいくことが大事。

事例市町村）四万十町（P.20）

質問 8

・市町村職員の役割はなんですか。

回答

★

集落、Co それぞれの行動などを注視し、大きな方針は一緒に考える。

Co に、即座に役割を求めるのは厳しい面もあるので、まずは市町村職員が二人三脚で進め、「アクセル」と「ブレーキ」のように調整していく役割が重要である。Co に任せるのではなく、一緒に取り組んで進めた方が良い。

質問 9

・集落活動センターやあったかふれあいセンターとの連携をどう図っていけばよいですか。

回答

【あったかふれあいセンター】

福祉関連にこだわらず、例えば「昔の手仕事を一緒にやる」「おじいちゃんおばあちゃんの昔の話を聞く」など多世代ごちゃまぜのにぎやかな場をつくる。

地区の作業を介護予防目的に、お年寄りと若い人が混ざって作業をする場をつくるなどにより「稼ぐ」という視点にもつながる。

【集落活動センター】

集落活動センターをやってきた人たちから見えてくること、行政の考え、地区の考えをミックスしながら、どういう手段で進めていくかなど、協働して活動を行う。

集落活動センターの人たちにも協力いただきながら一緒に戦略を練ることができれば、やってきたことが次に活きてくる。

事例市町村）大月町（P.52）

質問10

・Co の選定をどう進めれば良いか教えてください。

回答

地域から人を出してもらうのが難しいようであれば、県や外部の組織とも連携して探す必要がある。

・Co は「地域に寄り添える方」が大前提であるが、それ以外に「地域の状況をある程度把握している方」や「キーパーソンと面識がある方」などに集落支援員として着任してもらうことが良い。なかなか適任の方がいなければ、外部（地域おこし協力隊）を含めて探すことも考えられる。
・市町村職員が忙しく、手が回らないのであれば、市町村職員の「サポートをしてもらえる方」、という位置づけで Co を選定するのも方法の一つである。

質問11

・地域課題と Co のマッチングをどう進めればよいでしょうか。

回答

業務目的を明確にすることが重要である。

・初期段階では、「Co に何をしてほしいかが分からない」状態だと思う。まずは行政サイドで地区の状況を整理し、何をしていきたいのか、どういった人物が必要なのかをしっかりと考える必要がある。
・なお、本業務は地区の将来像を実現するために、地域特性や人材・組織との連携を上手く図っていくことが重要である。人に会いに行き、人の意見を聞くことができることが求められる能力の一つと考える。

質問12

・組織で一部の人だけが動くような体制になった場合、どう対処すればよいでしょうか。

回答

「あて職」にならないよう、みんなで活動することが大事。組織の見直しにむけて検討する。

・活動や組織内で細かく役割を分担し、だれかに役割を持たせすぎないように、みんなに役割が設定されるよう整理するほうが良い。
・第三者（市町村職員や Co）がバックアップしながら、一旦、組織の見直しを検討してみないか、地域に投げかけてみる。
・組織の見直しでは、「あて職」にならないように、また、だれかに役割を持たせすぎないように、活動や組織内のみんなで細かく役割を分担し、活動するよう整理した方が良い。

事例市町村）大月町（P.52）

質問 13

・地区の活動に関わってくれる住民の“洗い出し”はどのようにすればよいでしょうか。

回答

「人単位のネットワーク」を活用し、地区内の情報収集を行う。

・地区住民のお子さん（現役世代）が、いまどこで、どんな仕事をしているかなどを整理しておく。そこから関わってくれそうな人をピックアップしてみる。そうやって今後の活動の糸口探しを行い、次のステップにつなげていく。
・主体メンバーやリーダーの想いを文字に起こし、地区住民に伝えてみることも効果的。逆に地区から想いを収集する（アンケートなど）ことも考えられる。それら想いに同調してくれる方が、地区の活動を助けてくれるケースも考えられる。
・女性グループや、趣味の会など、既存組織との連携も重要。

質問 14

・学生との関わりはどのようなことが考えられますか。

回答

学生による外部からみた地域の資源活用やイベントへの協力などからスタートしてみる。

・高校の探求学習や大学のゼミ、研究室などと連携し、地区のことを知る、地区の将来を一緒に考えてもらうなどがあげられる。
・学生による地域へのアンケート調査やイベントの協力（企画から入ってもらうことやイベント当日の支援）などが考えられる。

質問 15

・役職だけではない地区の隠れたキーパーソン(現場で動く人)を見つける方法はありますか。

回答

その地区に住んでいる方にキーパーソンやキーパーソンを知っている人を教えてもらい、そこから見つけ出す。

・キーパーソンを知っている人については、自分で全部を見つけようとせず、その地区に住んでいる市町村職員や学校の先生、PTA の方などに相談することで紹介してもらえることが多い。
・見つける方法も大事だが、“見つけてもらう”という考え方もあっていいのではないかと考える。活動していきたいことに対して、想いなどを報告することで、それらに関心のある人が見に来てくれる。そこからさらに人が広がっていく方向性もある。そのほうが、幅広く関係性をつくっていくことができ、地域を見つけてもらえる可能性が高まる。★
・出会ってきた人の中で、何かに詳しい人がいれば、その人は隠れたキーパーソンである。出会ってきた人たちを１人１人整理すれば、意外と多くの人（役職以外の人）に会っていることが見えてくる。

質問16

・地区の若い世代にどうすれば協議や活動に参加してもらえますか。

回答

来てくれるのを待つのではなく、自分たちからアプローチをかけることが大事。

・若い世代の人たちは、日中に仕事などをしている人が多いため、年配の人たちが集まる時間帯には参加しにくいと思う。どうやって仲間を集めるかに発想を変える。「若い人が会に参加しない」のであれば、こちら側から集まっている場所に話を聞きに行き、自分たちで動きをつなぎながら、関心のあることを拾っていくこと。自分たちが相手の仲間になる。待っていても若い人から来てくれないので、自分たちが動き、想いを受け止めていく。
・話の切り口として、例えば、草刈りについて、機械などスマート化していく際、今までやっていた人たちでは困難であるが、若い人だったら以外と簡単にできることもある。そのような事例の関わりも含めていくと、興味関心や思い入れを持った若い人たちがつながっていくこともある。

事例市町村）安芸市（P.63）

質問17

・事業実施地区内にある「他の組織（例：〇〇保存会、JA 女性部会、■■祭り実行委員会　など）」との関わり方について、どのようなアプローチがありますか。

回答

こちらが“してほしいこと”と、“相手のやりたいこと、できること”をマッチングするなど、かかわりしろを明確にする。

・団体としてつながれば、活動の広がりが見込める。自然に団体メンバーが集まる場をつながる場に変えていく。
・活動、やりたいこと、できることを見える化していき、一緒に話をする場をつくっていく。また、集落同士の関係性がどのあたりにあるのかを探ることがファーストステップと考える。活動を基準につながりを深めていくなどの動きが大事。

事例市町村）津野町（P.12）

質問18

・住民へのヒアリング時に重要な質問項目や問い方を教えてください。

回答

いきなり本音を聞き出すのではなく、周りの情報から探っていく。

ヒアリングの中で、地域課題について共有し、活動自体の必要性に住民に気付いてもらえるような設問設定と流れをつくる。いきなり地区の将来像に対する想いを聞きだすのではなく、情報を収集し、地区のことを知った上でヒアリングをかけていくことが重要。

事例市町村）津野町（P.12、16）、黒潮町（P.28、32）、北川村（P.48）

質問 19

・地区への広報媒体はどのように作成すればよいでしょうか。

回答

地区でできる可能な範囲で進めていく。

・地区への情報発信については、はじめからいくつかの取組を行う必要はない。
・ご高齢の方々も見やすいように、文字を大きくすることや Co の紹介、取り組んでいる活動も記載する。若い世代は SNS（Web）も利用して周知をしていく方法も良い。例えば、今後の集落イベントなどを実施する際の試験的な取り組みとして、どういったものが効果的なのかを検証することも考えられる。

事例市町村）津野町（P. 12、16）

質問 20

・Co などが地区に入って活動して実際に感じた「感触」「手応え」「悩み」などを、地区の方とどうやって共有を図っていけばよいでしょうか。

回答

地区住民に話を聞いてもらいながら、「ふるさと便り」などにしてメッセージを伝えてみる。

・地区住民には、Co の存在を知らない方もいる。活動内容、どういった役割なのかと併せて、Co の想いをみんなに伝える仕組みを検討することも大事。
・地区外に出られた方々に共有できれば、外に出て行っても「支えていける」又は「積極的に関われることがある」と考えてもらえるようになる。

事例市町村）津野町（P. 12、16）

質問 21

・集落ごとの取り組みが昔からあり、他の集落との連携のイメージがありませんが、問題ないでしょうか。

回答

丁寧に状況を確認することが前提であり、無理に連携を進めず、将来（例えば 10 年後）を考えた時に、このままで良いのか、投げかけてみることも一つの方法である。

・地区や集落間の関係性、仕組みの変化（集落のみんなで子供を大切にしていく、女性の参画を増やす　など）は、本事業の目的の一つでもある。
・集落内外を含め、新たな関係性を構築する、組織化する点において、これまでの仕組みで上手くやっていけるのか、もしくはある程度やり方を変えていく必要があるのか、これまでの活動を通して、上手くいった点、反省点を整理し、検討をしてほしい。

質問 22

・WS の参加者、対象者の選定はどう進めればよいでしょうか。

回答

実施する内容に応じた参加者を考える。

例えば、子供を集めるイベントであれば、子供、子育て世代、教育関係者など、子供に近い人たちを WS に呼んだほうがよい。目的に応じた参加者を検討し、呼びかけることが大事。

事例市町村）土佐市（P.61）

質問 23

・WS の参加者を増やすための工夫はありますか。また、話し合い参加者の固定化を改善する方法を教えてください。

回答

開催場所・時間帯・テーマの見直しなど、地区の特性に応じた開催方法を検討することが大事。

- 1 人が少しずつ関わる人を増やしていくことも大事。知り合いの声掛けなどにより、参加者を増やしていく。
- 参加してほしい世代や組織、人材がいれば、話し合いへの参加を待つのではなく、こちらから出向くことも大事。
- 世代や状況に応じて集まれる時間が異なる点や WS 開催の周知を図るうえで効果的な情報発信方法が異なる。外に働きに出ている世代は、平日昼間は地区にいない。また、子育て世代は家事を行う時間帯があり、夕方頃は参加できない。高齢者は紙媒体、若い世代は SNS など電子媒体が繋がりやすいなど特性に応じた設定が必要である。
- WS 結果は地区の人々に伝えるなど、共有することが大事。

事例市町村）津野町（P.16）

質問 24

・将来像に向けての話し合いの場づくりでのポイント、方向性は、どのようなものになりますか。

回答

★

固くなりすぎずに、ヒアリングされる側にとってもリラックスした話しやすい環境を作ることが重要である。

- 茶飲みをするような感覚で、何気ない会話や世間話をしながら本題の話へ流れをもっていく。（※昔の写真を見たり、話を聞いたりするなど）こうした関わりの中で、地域の方の想いをきっかけとして、取り組みにつなげていくこともできる。
- お菓子、お茶、コーヒーなどがあると、リラックスした雰囲気を作りやすい。

質問 25

・地区住民との話し合いの進め方についてアドバイスをお願いします。

回答

こじんまりやる気のある人たちを集めて動かせるような形で、話し合いを積み、得られた結果や方針を地区全体に共有する。

いきなり地区全体で議論するとまとまりがつかないことがある。活動に興味がある方や今後活動に関わっていただく方など、まずは少数で意見をまとめ、地区全体に意見を波及していく方法が考えられる。

質問 26

・会議の進め方について教えてください。

回答

地元の意見の取り上げ方、声・ニーズを幅広く聞くといったプロセスが必要。

- 声が大きい人の意見だけが先行するのは望ましくない。手続きや段階をきちんと踏まえることが重要。
- また、会議の中で意見の偏りや否定的な意見が出ることも考えられる。会議のルールとして「否定しない」、「実現可能性を探る」などを決めておくことや、会議以外に、世代別、関係者別などの意見交換の場を持つことも考えられる。

事例市町村）室戸市（P.36）

質問 27

・地区が話し合いに疲れている場合はどうすればいいですか。

回答

話し合いの場を固定化する必要はない。

- 話し合いの場を固定化するのでは無く、普段の何気ない場所などの色々な場面で話をしていき、議論のきっかけをつくっていく。会議やWSは意見交換の一つの手法である。様々な意見が聞けるのであれば、これら手法に固執する必要はない。みんなが意見を出しやすい環境や場面を作っていくことが大事。
- 地区が小さい場合は、地区の人が集まる場を作らなくても、話し合いに代えて、各世帯をCoが訪問し、意見をまとめて進めることもできる。

事例市町村）四万十町（P.20）

質問 28

・話し合いで決めた内容が、いつの間にか変わっている場合はどうすればいいですか。

回答

★

最低限のルールを設け、誰がいつまでに何をするのか、次に何を話し合うのかなど、決定事項は具体的かつ明確にしておく。

・決定したことを毎回振り返る、それらを行うためにしっかりと模造紙などに記録を残し、継ぎ足していくことで見える化を図る。
・また、決定したことは 5W2H（why なぜ（目的）、who だれが、when いつ、where どこで、what なにを、how どうやって、how much いくらで）を決めていく。それらを決めるために次の会を実施する目的とするのも一つの方法である。

質問 29

・（地区内に企業など住民以外の「人」がいる場合）話し合いの参加者を増やす方法を教えてください。

回答

お試し企画・イベントなどを開催し、立地企業や関係者、地元出身者に声かけを行う。

イベント実施の中で、地区住民だけでなく、立地企業、関係団体などの人たちに声をかけて、色々なことに関わってもらう。それら新たな参加者から WS への参加者を獲得するなどの方法もある。子育て世代などは、地区イベントに子供を連れて参加することが多い。

質問 30

・協議の場で終わらないための支援方法として、WS で出た意見をどう実行へ移していけばよいでしょうか。

回答

WS 時の取り組みとしてプロミスカードを使ってみる。

・「次に何をするか」を話し合ってもらい具体的に書き記していく。具体的に「何をしていくか」を定めることで、実行するために何が必要かなどを考えることができ、次の行動につながる。
・小さな成功が人の熱（やる気）を高めていくことにつながっていくことも意識する。

質問 31

・女性や若手のやりたいことができていない状況のときはどうすればよいですか。

回答

それぞれの意見が役に立っている雰囲気づくりが大事。

・女性達や若手に任せるなど、役割を小分けにする。
・話し合いで出た意見は否定しないことをルールとして決めるなども大事。
・女性や若い世代の活動を否定するのでなく、支援する仕組みをみんなで考える会を設けるのも一つの方法である。

事例市町村）室戸市（P.36）

質問 32

・組織内で対立構造がある場合はどうすればよいでしょうか。

回答

それぞれの置かれている立場を変えることや、お互いの活動や役割に協力してもらう。

・会長や副会長などの役職がある場合は、各活動に高所からアドバイスを行うような相談役になってもらうなども考えられる。協議会を意見共有の場とし、それぞれの活動を応援する役割を与える。
・役割分担と“まずはやってみる”という考えを全体で共有し、小さな成功体験を積み重ねていく。

質問 33

・小さな話し合いを徐々に地区全体（中心人物から周り）へと広げていくためにはどうすればよいでしょうか。

回答

活動理念や方針が、地区長だけでなく住民の方々にも伝わる仕掛けが必要。

・いきなり関わってくださいではなく、活動の見える化を図り、少しでも関わる人を募っていくほうが良い。
・話し合いの場に、一度に大勢を呼ぶことは大変である。広報などを活用しても参加率は伸びないケースが見受けられる。
・もし現在、10 人メンバーがいるのなら、その 10 人のメンバーの方々に、「自分の周りで話し合いに参加してほしい人を必ず３人連れてきてくださいね」と伝えあうことで、30 人に増え、２回目以降も同様に行えば、参加者が増えていく。
・中々、簡単にはいかないが、“3”という数字に意味があり、３人中２人がだめでも１人来れば、またそこから３人出席してくれる可能性が出てくる。地道ではあるが、知り合いのツテを通じて徐々に広げていくことが大事。
・また、地区イベントを開催し、そこでつながりを広げることで、地区全体に波及することも考えられる。

質問 34

・補助金ありきで話が進んでいってもよいのでしょうか。

回答

★

補助金の活用が目的でなく、地区の活動を継続していくために、何が必要かしっかりと議論。

補助金は、地区における活動や目標実現に向けた支援の一つであり、しっかりとした地区の将来像を描き、それらに向けた活動について話し合い、組織化や見える化を図っていくことを理解していただくことから始めてほしい。補助金頼みでは、補助金が終了すると途中で活動が止まることもある。「無理なく、無駄なく」を意識して活動や目標を整理してほしい。

質問 35

・話し合いや活動の記録はどのように整理すればよいでしょうか。

回答

話し合いなどの活動記録は“時系列の記録”として活用し、将来的には地区の歩みについて、世代を超えて振り返ることができるようにしておく。

・時系列の記録は、将来の取り組みにおいても活動の支えになる。
・また、写真や映像で残すことも有効である。併せて、SNS などの情報発信を展開することで、活動の記録保存につながるケースもある。

事例市町村）津野町（P.12、16）、いの町（神谷地区）（P.24）、室戸市（P.36）、南国市（P.44）、北川村（P.48）

質問 36

・計画づくりから活動実施までの流れを教えてほしいです。

回答

★

話し合いに時間をかけるよりも実践しながら進めていく。

・まずは、動いてみてそこから広げていくよう考える。
・最初の取り組み方を間違えてしまうと、リカバリーが大変になってしまう。行政が全部面倒を見ることが続くと、住民がその認識を持ってしまうため、基本的に実践しながら考えるなかでも、最初に“打ってはいけない手”が何かをきちんと把握しながら進めていく必要がある。
・地区関係者への説明が必須などの状況であり、まずは目的と活動方針をまとめないといけないなどのケースもある。そういった場合は、地域での目的、活動方針を絞りながら、やっていきたいこと、すぐできることをまとめ、すぐに活動できるよう準備しておくことも大事。

事例市町村）黒潮町（P.28、32）、室戸市（P.36）、北川村（P.48）

質問 37

・産品を作って販売する計画を策定する場合は、どのようにすればよいですか。

回答

出口戦略をしっかりと検討・構築する。

作るプロセス、売るプロセスに、出身者（県人会）や副業・企業を探して関係人口を入れるなどが大事。将来的な事業化を目指すのであれば、しっかりとした事業計画を練っていく必要がある。補助金頼みだと活動が止まってしまうこともある。継続的に販売を続けていくための仕組みづくりを検討する必要がある。

質問 38

・地区外への情報発信はどのように行えばよいでしょうか。

回答

地区の情報発信においては、紙媒体と電子媒体があり、それぞれで役割が異なるため、両方を併用して展開していくことが大事。

・広報誌、SNS、メディアなど様々な媒体があるが、これらは役割や対象者に効果的に伝わる方法として特性が異なる。一つに絞るのではなく、複合的に検討することが大事。
・また、例えば、ふるさと納税を活用した返礼品の原料が地区で採れたものであるなどのアピールを行う。そこからビジネスにつながることも考えられる。

事例市町村）いの町（上東地区）（P.40）

質問 39

・Co などが地区に入って活動して実際に感じた「感触」「手応え」「悩み」などを、地区の方とどうやって共有を図っていけばよいでしょうか。【20 再掲】

回答

地区の方々に話を聞いてもらいながら、「ふるさと便り」などにしてメッセージを伝えてみる。

・地区の方には、Co の存在を知らない方もいる。活動内容、どういった役割なのかと併せて、Co の想いをみんなに伝える仕組みを検討することが大事。
・地区外に出られた方々に共有できれば、外に出て行っても「支えていける」又は「積極的に関われることがある」と考えてもらえるようになる。

事例市町村）津野町（P.12、16）

質問 40

・地区の出身者への働きかけ、アプローチの方法を教えてください。

回答

地区出身者から得られた意見を地域新聞にして、地区の方が集まる場所に掲載する。

・地区出身者とのコミュニティはSNSなどを通じて形成する、また、定期的に集落便りを送るなども考えられる。
・それら活動の中で得られた意見、出身者の現状などを、地域新聞に「地区への想い」として掲載すると、それを見て地区の方から連絡するなど、地区とのつながりが再熱するなど反響は大きい。

事例市町村）四万十町（P.20）

質問 41

・Uターン者を増やすためにはどうすればよいですか。

回答

お盆や正月の帰省時に、地区の状況・取り組みの情報発信を行う。

・SNSや便りなどの関係性を構築するとともに、地区に帰ってくるきっかけを作る。また、長期休暇期間の帰省時に合わせて、地区の情報や取り組みを発信するなど、継続的に実施することで、地区に戻ってきたいと考えるきっかけにもなる。
・地区にある“良い想い出”や“知り合いがいる”という要素は非常に重要である。
・普段の会話のような、緩くて柔らかい雰囲気で話し合いを行うことやメッセージ性のあるものを発信するなど工夫をすることも重要。

事例市町村）四万十町（P.20）、いの町（上東地区）（P.40）

質問 42

・活動の人材が不足しているのですが、どのように人材を確保していけばよいか教えてください。

回答

地区で行っている日常的な取り組み・活動を、関係人口創出・人材確保につなげていく。

・地区内で人材不足で困っている活動自体を、体験の場として発信することも考えられる。収穫体験、田舎暮らし体験などは地区の人だけで行う必要はない。地区の人と体験する人のつなぎ役を、関係人口の中からできる人に手伝ってもらえばよい。農家や旅館などの人手不足は、「仲間を求めている」「関係人口がそこで形成される可能性が高い」と捉えている。課題をベースに人を集める仕組みを考えてみる。
★ ・鹿児島県の日置市の「スポーツ草刈り」の取り組みのような形で、関係人口をつくっていくなど、チャンスに変えていく方向は有り得る。
・これまで困難だった取り組みが、協力隊が来てくれたことにより、色々なことができるようになる。
・また、民間企業を中心とした兼業、副業やプロポーザルで、「～の地域課題があるが、良いアイデアはないか」など、募集をかけると、手が挙がることがある。地域貢献を意識している民間事業者と連携することも一つの手段。（高知県イノベーションプラットフォームなど）

事例市町村）北川村（P.48）

質問 43

・活動の周知方法や新たなメンバーを増やすための取り組み、地区外で暮らす出身者へのアプローチ方法を教えてください。

回答

情報発信をベースに、都市部にいる出身者側が地区を支える仕組みづくりにつなげる。

・SNS を通じた地区出身者とのやりとりや、現状で出身者の方が活躍できる場などもありえる。例えば、学校を核とする場合は、「地区の写真を集めている」ことを呼びかけ、リプリント（複写）し、学校に展示することでつながりをつくり、校舎内で同窓会を意識的に開催するなどもある。
・HP や SNS の作成は、若者が携わりやすい仕事、作業となるので、地区の活動に若者に参画してもらう。SNS などで情報交換を行い、「現場にいけばだれかに会える」など、普段実施していることをオープンにする。
・また、動画を撮影し、PR 用の素材として残していくのも一つの方法である。

質問 44

・活動の目的設定はどのようにすればよいですか。

回答

活動の目的設定においては、地域資源や地域課題など、活動の背景にある項目をしっかりと抽出・整理することが大事。

・課題解決の目的を設定した上で、それに基づき人を集めるアプローチが考えられる。また、イベントを通じて、地区内外の関係性をつくった上で目的を設定する方法も選択肢の一つである。
・“今いる住民が楽しむ”という方向性でやっていく、一方で地域課題と向き合うタイミングをつくることも必要。現在は、わいわいがやがやでも、コミュニティの成熟に伴い、急速に地域課題解決に向けた意識に変更する可能性も考えられる。

質問 45

・地区（住民）で達成できない目標などが出てきた場合は、どのように対応すればよいですか。

回答

★

住民が行う内容なのか、行政で対応する内容なのか、地区と行政が調整を図り、棲み分けをしていくことが大事。

例えば出生率アップや未婚率減少などは、地区だけでできることではない。そういった内容を目標とすると、達成できない目標となってしまう。そういった内容は行政でしっかりと対応を図り、住民サイドでは、将来的な目標を持った中で、今、何ができるかを考えていくことが重要。

事例市町村）いの町（神谷地区）（P.24）

質問
46

・初期のゴール設定の見直しはどのように行えばよいでしょうか。

回答

活動内容やそれら結果に応じて、臨機応変に見直しいくことが大事。
　初期のゴール設定がどういうものか、考え直した方がいい場合もある。１年活動してみて、無理のない範囲、もしくはより高い目標を持つなど、ゴールを変更するのも一つの方法である。

質問
47

・どうやって活動方針を整理していけばよいでしょうか。

回答

★

活動目的に向けた取り組みを、いくつかの項目に整理していく必要がある。

- 例えば、最終目標に集落活動センターの開所を設定した場合、活動方針として、「組織づくり」、「素材探し」、「情報発信」など、必要な取り組みを設定することができる。
- 活動方針を設定することで、活動の具体的な内容が活動目標に向けた取り組みとして“ずれていないか”をみんなで確認する指標となる。なお、活動方針の設定は、方針を設定して活動内容の具体化を図るケースもあれば、具体的な活動内容が決まっている中で、それらをまとめて活動方針とするケースもあり、状況に応じて対応が必要。

質問
48

・地域課題はあるが、活動に踏み切れないような場合、どういう対応が考えられますか。

回答

★

他団体への視察が効果的である。

- 活動の事例となる取り組みの先進地へ視察に行くことで、「これなら自分たちでもできる」と視察者が気づくきっかけになる。
- 視察には「自分たちが実施することの参考」、「行政目線でのあるべき姿、方向性」の２つの視点がある。視察先に不安ごとの相談を行うことも有効なので、その場合は、視察先の関係者に、事前に相談内容を伝えておくことが必要。

質問 49

・どのように将来像を決めていけばよいでしょうか。

回答

今までの取り組みを下地にしながら、体力的に厳しい状況でも、現状を変えなくてもやっていける選択肢を少しずつ探っていくこと。

各集落や各家庭、それぞれのレベルで不安や課題感がある。様々な取り組みの中で、「地区でなんとか支えられないか」、「それぞれの集落で、どのような助け合いの仕組みづくりが可能か」、「関係人口も含め、周りにいる人たちにどういったことで助けを求めていくのか」、その下地を地区、行政、Co が一緒になって検討してほしい。そこから将来像が明確になる。

質問 50

・長く続く企画、無理のない企画にしていくにはどうすればよいでしょうか。

回答

地区内で、集落点検（家族構成、年齢などの見える化）によって現在の状況を洗い出し、活動する方の負担や無理なくやっていく方法を検討しながら、取り組みを進めることが重要である。

- 地域活動の継続に向けた仕組みづくりも必要。行政、Co だけでなく、地区住民においても、望む将来の姿についてぼんやりとでも意識してもらいながら活動を進める。
- 5 年後、10 年後をイメージし、現在の状況とこれからあるべき姿、人材特性、予算、関係人口の活用などをしっかりと地区で話し合い、具体的な企画を検討する必要がある。
- また、例えば、現在、地区住民で楽しんで実施している取り組みを外の方（交流人口）、出身者で地区外に住んでいる方（関係人口）も参加できる取り組みにすることで、地区住民の負担が少なく実施できれば、長く続けやすい。

質問 51

・（現在、地区で活動する既存の組織があるが、さらに）組織の拡大などのタイミングはありますか。

回答

様々な活動を経て組織化を図り、次へのステップアップとする可能性が考えられる。

取り組みの事業化・収益化、取り組みの拡大など様々な要素がある。ただし、無理なく続けることが可能か、地区でしっかりと話し合いながら決めていく必要がある。状況によっては、現状のまま取り組むという選択肢も考えられる。

質問52

・どういった視点で事業化に取り組めばよいですか。

回答

地域づくりとの連携、地域づくりとは一定切り離すなど、様々な観点から議論し、事業化を目指すことも方法の一つ。

地区の活動を継続していくために収益を獲得する取り組みとしての観点や地区住民、Co の生計が成り立つことを目指すなども考えられる。

質問53

・事業化するにあたって、地区の合意を取るアプローチ先や方法を教えてください。

回答

区長や組織のリーダーだけではなく、その周りの方や移住者の方などに合意形成に向けた働きかけを行う。

事業化にむけて、地区の合意も必要な場合は、地区住民や移住者に対して、合意形成に向けた働きかけを行うことで、事業の周知や参画なども期待できる。

質問54

・活動の人材が不足しているのですが、どのように人材を確保していけばよいか教えてください。**【42 再掲】**

回答

地区で行っている日常的な取り組みや活動を、関係人口創出及び人材確保につなげていく。

★

- 地区内で人材不足で困っている活動自体を体験の場として発信することも考えられる。収穫体験、田舎暮らし体験などは地区の人だけで行う必要はない。地区の人と体験する人のつなぎ役を関係人口の中からできる人に手伝ってもらえばよい。農家や旅館などの人手不足は、「仲間を求めている」「関係人口がそこで形成される可能性が高い」と捉えている。課題をベースに人を集める仕組みを考える方法もある。
- 鹿児島県日置市の「スポーツ草刈り」の取り組みのような形で、関係人口をつくっていくなど、チャンスに変えていく方向は考えられる。
- これまで困難だった取り組みが、協力隊が来てくれたことにより、色々なことができるようになる。
- また、民間企業を中心とした兼業、副業やプロポーザルで、「～の地域課題があるが、良いアイデアはないか」など、募集をかけると、手が挙がることがある。地域貢献を意識している民間事業者と連携することも一つの手段である。（高知県イノベーションプラットフォームなど）

事例市町村）北川村（P.48）

質問 55

・外部から来た人材が、キーパーソンとして配置されることも考えられますか。

回答

キーパーソンとなる人材が、地区の中で完結していた取り組みを広域的な視点でとらえ、外から支えてもらえるようなやりとりを可能にしたケースもある。

・伝統文化も景観整備もそうだが、色々な方法で取り組むにあたり、キーパーソンは必要になってくる。そうした中で、外部からの人材がキーパーソンとなり、より広い視点で事業を展開したケースもある。
・また、地区住民で役割をつくることも大事である。「少ない人数でこの地区を持続的にするためにどうしたらいいか」の考え方も重要。人材を集める必要がある項目と、現在の住民で持続的に地区や活動を継続していく方法は切り分けておく。
・例えば、「フットパス（地域の風景を楽しみながら歩くこと）」を地区で実施するにあたり、地区のガイドやナビゲートは地区外からサポートしてもらいながら、地区住民はそのあたりの草刈りなど、普段行っていることを丁寧にやってもらう。地区の人たちと触れ合い、訪れた方々に一言もらえれば、「喜んでもらえるなら丁寧にやっていこう」や「少しお金が絡むようなことも考えていける」ことにつながる。今までの取り組みの延長線上で、あるものを活かしながら関わってくれる人たちを見つけていき、リピートで来る人たちがいれば、少し踏み込んでサポートをしてもらう道筋も考えられる。

質問 56

・リーダーの後継者がいない場合は、どのようにすればよいでしょうか。

回答

活動における事業グループを作り、その課程で次のリーダーが生まれてくると良い。

・リーダーの後継者は、現在のリーダーが後継者に「任せる」「委ねる」という引継ぎが必要となる。引継ぎのプロセス構築自体を小さな集落活性化事業の最終ゴールとするのも一つの方法である。
・世代、性格によりリーダー像は異なるため、同じようなリーダー像を求める必要はない。現リーダーの想いだけでなく次の人々が自分たちの想いを共有、実現する場があると良い。別の取り組みスタイルや、別の牽引役などが生まれてくる可能性も考えられる。

質問 57

・活動の周知方法や新たなメンバーを増やすための取り組み、地区外で暮らす出身者へのアプローチ方法を教えてください。【43 再掲】

回答

情報発信をベースに、都市部にいる出身者側が地区を支える仕組みづくりにつなげる。

・SNS を通じた地区出身者とのやりとりや、現状で出身者の方が活躍できる場などもありえる。例えば、学校を核とする場合は、「地区の写真を集めている」ことを呼びかけ、リプリント（複写）し、学校に展示することでつながりをつくり、校舎内で同窓会を意識的に開催するなどもある。
・HP や SNS の作成は、若者が携わりやすい仕事、作業となるので、地区の活動に若者に参画してもらう。SNS などで情報交換を行い、「現場にいけばだれかに会える」など、普段実施していることをオープンにする。
・また、動画を撮影し、PR 用の素材として残していくのも一つの方法である。

質問 58

・地区の盛り上げ方、落ち着かせ方、声がけの言葉の選び方を教えてください。

回答

現状とギャップを埋めて実現につなげていくことが必要となる。

・（盛り上げ方）住民が負担を感じないように、楽しめる内容から進めることで、徐々に地区が盛り上がっていく。
・（落ち着かせ方）例えば、地域で色々な取り組みを考えている中で、その取り組み自体が本質的な課題解決につながりにくいケースもある。外部の視点も取り入れながら、優先順位をつけて取り組む。
・（声かけの言葉の選び方）行政としては、それら活動の「アクセル」と「ブレーキ」を意識し、ポイントに応じて、地区への助言や声掛けを行う。

質問 59

・（ゆずの収穫時期は忙しすぎて体験を受け入れる余裕がないが）その時期以外の体験メニューはどのようなものがありますか。

回答

年間の作業スケジュールを洗い出し、そこから体験メニュー化できそうなものを考える。

例えば、農業だと収穫時期以外の作業において人手が必要な場面があるので、それらを体験・手伝いとして検討することも一つの方法である。

質問60

・役割分担の効果を教えてください。

回答

個人負担軽減とそれぞれに責任感が生まれる。

活動を分割することで個人の負担を軽減でき、地区の中で、関係者の“かかわりしろ”がつくられ、それぞれに責任感が生まれる。それら全体が機能し、地区全体での取り組みを発信・提供する発想が大事。

質問61

・話し合いや活動の記録はどのように整理すればよいでしょうか。**【35再掲】**

回答

話し合いなどの活動記録は“時系列の記録”として活用し、将来的には地区の歩みについて、世代を超えて振り返ることができるようにしておく。

・時系列の記録は、将来の取り組みにおいても活動の支えになる。
・また、写真や映像で残すことも有効である。併せて、SNS などの情報発信を展開することで活動の記録保存につながるケースもある。

事例市町村）津野町（P.12、16）、いの町（神谷地区）（P.24）、室戸市（P.36）、南国市（P.44）、北川村（P.48）

５　令和４・５年度専門家会議各委員による小さな集落活性化事業の総評

氏名　：　小田切　徳美　座長
所属　：　明治大学農学部　教授

小さな集落活性化事業の新しい性格　～重層的伴走型支援～

今までも、高知県の中山間地域対策は、全国の取り組みのフロンティア（最前線）であった。その背景には地域が直面する厳しさがある。しかし、そうした状況にもかかわらず、地域の内発的な取り組みが多彩に生じているのが高知県中山間地域の特徴であり、その支援策は全国から注目されている。

このハンドブックの対象である小さな集落活性化事業もまたフロンティアである。中心的な取り組みであった集落活動センターに加わっていない集落を対象とする事業である。そのため、高知県の中山間対策は、集落活動センター事業と小さな集落活性化事業の二つの大きな仕組みが揃い、より強力なものとなったと言える。もちろん、小さな集落活性化事業の結果、既存のセンターの構成集落になったり、あるいは新たなセンターが形成されたりすることもあり、両者は連続的である。

しかし、小さな集落活性化事業は、全国各地の中山間地域対策の中でも、また高知県の他分野の事業と比較しても明確な特徴がある。それを「重層的伴走型支援」と表現したい。「伴走型支援」とは、ここでは「様々な環境変化に柔軟に対応するために、対象の内発力を高めることを主眼にして、活動プロセスのなかで常につながり続ける対応」と理解できる。この考え方は福祉からビジネスまでの幅広い部門で活用されている。

小さな集落活性化事業では、集落活動の再生にこれを適応しており、各市町村で選任されるコーディネーターが重要な役割を発揮している。そのタイプは様々であり、地域の動きにともない活動を柔軟に変化させている実態もある。また、従来から「高知方式」と言われる地域支援企画員や県庁中山間地域対策課職員も分担して地域支援に加わっており、さらに私達、専門家会議のメンバー（6 人）が地域を訪問し、定期的な会議の場でコーディネーター等と意見交換することも仕組み化されている。

このように、対象集落をめぐり、まさに「重層的」な伴走体制が築かれている。この結果、本ハンドブックで見られるように、集落では小さなことから大きなことまで、着実な変化が生じている。それは、まさに本事業の成果であり、ハンドブックの前半ではそれが分かりやすくまとめられている。

同時に、地域とコーディネーターが、事業中、切れ目なくつながったことによって、集落内の小さな変化とそのターニングポイントがしっかりと把握されたことも事業の特徴でもある。このハンドブックではそのような転換点、つまり、集落の内発性が強まった契機を、後半に「ヒント集」としてまとめている。そこには、「重層的伴走」によりはじめて見えてきたものも含まれている。そのため、「ヒント集」は地域づくり（集落再生）に取り組めない集落、あるいは活動途上で困難に直面する集落の生きたヒントとなるものであろう。

中山間地域対策のフロンテイアとしての本事業は、このように対象集落のみでなく、多面的な成果をもたらしている。そして、実は、このコーナー（専門家による「総評」）にまとめられた専門家によるコメントも、この事業にかかわり、私達が学んだことがまとめられている。それも小さくない成果であろう。

氏名　　：　平井　太郎　副座長
所属　　：　弘前大学大学院　地域社会研究科　教授

高知に希望あり。暮らしの奥深さが生む共感の連鎖が地域の未来を照らし出す。

高知の山は深い。そして海は広い。そうした山に抱かれた里や海に向き合う町は、どこも人口減少に苦しみ、未来を展望しづらいと言われる。だが、このハンドブックに刻まれた１つ１つの地域の軌跡をご覧いただきたい。どれだけお年寄りばかりになり、山に呑み込まれようとも、希望の光が差している。それは、そこに暮らす人びとが、コーディネーターや県・市町村の職員とともに、自分たちの山の暮らし、海の暮らしに光を当て、地域内外の人びとの共感を得はじめているからだ。

どの例でも、地域の当たり前の暮らしをコーディネーターが丹念に掘り起こし、チラシやネットを通じて、子どもたちや出身者などと共有しようとしている。格式ばった人口減少やインフラ維持といった問題を掲げるのではない。ふだんの、あるいは、忘れかけた、飲み語らう場から出発し、つねにそこに立ち戻っている。そうした場にこそ、年齢や性別、出身や国籍さえも超え、人は共感し集うからだ。そして自ずから、人口減少やインフラ維持といった課題に、それぞれに道筋をつけようとしている。

共感の連鎖は始まったばかりだ。県や市町村の息の長い伴走が求められる。何より、このハンドブックを手に取ったみなさんも一歩、踏み出してほしい。その一歩、一歩が積み重なって、共感の輪は高知全体を包み込むことだろう。

氏名　：　嶋田　暁文　委員
所属　：　九州大学大学院法学研究院 教授

「自治の総量」を高める県の役割　　～小さな集落活性化事業の意義～

平成の大合併の頃からであろうか、「市町村中心主義」という考え方が強くなり、県の存在意義が定かでなくなってきた。しかし、多くの市町村は、人財・財源の不足に苦しんでおり、余力を有していない。こうした状況に鑑みるならば、今、求められるのは、市町村中心主義から脱却し、県がもっと積極的に補完機能を発揮することで、「県＋市町村」で「自治の総量」を大きくしていく、という発想を持つことなのではないだろうか。

ただし、他方で、補完機能の発揮は、現場を十分に踏まえない県が介入することで市町村による現場起点の自主的運営を阻害してしまう危険性をはらんでいる。それゆえ県に求められるのは、そうした危険性を回避しながら補完機能を十分に発揮することである。しかし、それはいかにして可能なのか。この難題への一つの回答が、小さな集落活性化事業であるように思う。

この事業では、県職員が現場に出向き、地域の実情をつぶさに見ながら、寄り添う形で市町村を支援している。さらに、専門家集団からアドバイスを得る形で、県の市町村への適切な関わり方を担保するという注目すべき工夫が施されている。今後の県のあるべき方向性を具現化した事業と言えよう。

氏名　：　図司　直也　委員
所属　：　法政大学現代福祉学部　教授

日常の暮らしを前向きに刻んで、集落を支える力に。

集落の活動は、日常の暮らしや農業生産を支える上で、毎年粛々と繰り返され、基本的には「守り」の性格を帯びている。それも、地域住民の高齢化が進み、担い手が減る中で、集落の力は右肩下がりで、現状を維持しようとするだけでも、それなりのパワーを要する。

この小さな集落活性化事業では、その「支えの力」をどのように生み出すのかが焦点となる。私が担当した津野町と四万十町では、コーディネーターがまずは現場に出向き、お茶飲みや行事に関わりながら、そこで出会った集落の顔ぶれや資源を、地域新聞の形で「見える化」し、各方面に届けてくれている。その行動に派手さはないものの、新聞の存在は、地域内外で話題に上り、住民が自らの日常を明るく振り返る機会を生んでいる。

両地域では、集落行事の記録を残したり、活動に女性が加わったり、続ける資金を稼ぐ意識が生まれたり、とこれまでの活動にささやかな変化が実感されている。地域新聞が日常の「前向きな刻み」の積み重ねを体現し、集落活動を持続させる「支えの力」を生みつつある。これこそが、本事業の成果ではないだろうか。この先の展開を、コーディネーターの皆さんと引き続き見届けていきたい。

氏名　：　筒井　一伸　委員
所属　：　鳥取大学地域学部　教授

フレキシブルに“コミュニティ”の単位を探そう！

この「小さな集落活性化事業」には多くの特徴があるが，私が注目したのは実施地域の広がりの多様さである。この事業では「複数の集落を一つの地区として連携した取組も可能であり，集落ごとで取組みすることも可能」とあり，原則 2 集落以上必要としながらも横展開に向けては 1 集落単独でも実施可能とする。高知県がこれまで取り組んできた集落活動センターが旧小学校区単位のまとまりを基本とするのに対して，よりフレキシブルに実施地域を設定できるところは特徴的である。

地域づくりを英語で「コミュニティディベロップメント community development」することがあるが，地域づくりとしての小さな集落活性化事業の基盤もコミュニティであることに間違いはない。しかし，そもそも集落＝コミュニティではない。コミュニティ community の語源は，コミュニケーション communication の語源と同一でラテン語の communis「共同の，共有の（=英語の common）」と言われている。その意味でもコミュニケーションの有無がコミュニティを考える際の最も基本である。

地域づくりに向けてコミュケーションが取れる地理的な範囲と協働可能な関係，すなわちコミュニティを確認する，再構築することがこの事業の真の目的かもしれない。

氏名　：　中塚　雅也　委員
所属　：　神戸大学大学院農学研究科　教授

コーディネーターと育つ集落。

小さな集落の活性化には，コーディネーターの存在が欠かせない。本事業においてコーディネーターの配置が設計されているのは，それ共通認識となっていることの証左である。コーディネートとは，調整や調和を図ることであるが，集落活性化の中でのこれを行うのは至難の業である。性別，年齢，セクター，集落内外，過去－未来，これらの関係性に配慮しながら，前に進めることは一種の職人技である。さらに本事業で難しいのは,“よそもの“の助言者としてではなく，地域に住み，伴走者として，時には，住民と同様のプレイヤーとしての役割も求められることである。

このようなコーディネーターを，集落に“配置”するのは容易でない。本事業を展開する上で一番の課題となっていたのではないだろうか。コーディネーターが絶対的に不足するなか求められるのは，コーディネーターも集落とともに育てられるという考え方であり，そのキャリアを行政も集落もサポートしていくという姿勢である。また，コーディネーターは人でなく役割とも考えるべきである。誰でもコーディネーターになりうる。コーディネーターの育成とキャリア支援の仕組みづくりこそ，今後，県行政や我々に課せられた課題であろう。

高知県
Kochi Prefecture

〒780-8570 高知県高知市丸ノ内 1 丁目 2 番 20 号(本庁舎 3 階)
■担当課 ： 総合企画部 中山間地域対策課
TEL ： 088-823-9600
FAX ： 088-823-9258
Mail ： 080601@ken.pref.kochi.lg.jp
令和6年3月作成